
傷ついても、ずっと

まつちい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

傷ついても、ずっと

【Nコード】

N34330

【作者名】

まつちい

【あらすじ】

未来。

人間は奴らから逃れるために水中で暮らすように進化？していた。

名波あい、19歳。

生まれた時から水中にいて、死ぬまでそのはずだった。

しかし奴らは水中にまで手を伸ばしてきたのだ。

そんなとき、あいは一人の男と出会う。

『俺と一緒にみんなを守ってみないか？』

その一言があいの心を動かした。

今こそ、奴らと戦わなければならない。

1 陸上占領（前書き）

ジャンルはファンタジーだが、実際は恋愛あり、ホラーでSFチック。

色んな意味で気分を害されても作者は責任を持てかねます。

1 陸上占領

一 陸上占領

西暦二千年からその後、時は流れ続けた。地球はまだ丸い。過去の人間が戦争をしたり、オゾン層を破壊したり、痛々しい自滅行為を繰り返したくせに相変わらず形は変わらない。月は満ち欠けを規則的に行い、太陽は毎日昇る。空は青く、雲は白い。過去の誰が決めたのかはつきりとは知らないが一日は二十四時間、一年は三六五日。たまに雨が降って水は地面を濡らす。雷が鳴っては、どこかに落ちる。昔と何も変わらない。だが、雨の日は見逃せない。昔の世界に帰れる日だから。

人間は西暦三千年近くまで、平成という年号で呼ばれた時代と同じように、全員が陸地にいた。肉を食べ、野菜を作っていた。車や電車が空を飛ぶことはなかったが、スピード面ではかなり進化し時間短縮の成果をあげていた。だが、日本でその頃から大きく叫ばれていた少子化問題は時を追うごとに深刻となり、世界へと波紋を広げた。それは一人っ子政策をにかけていた中国も例外ではなく、気づいたときには人口はピーク時の半以下になっていた。政府としては人口増大を掲げたが、その時代の人々は争いが減る分、生きやすくなるとあまり子供を産もうとはしなくなった。次第に母性という単語が使われることも減り、家族の繋がりが希薄の一途を辿っていた。人口が減ったことのメリットは、どこでも混雑はなくなっただけではなかった。異国との交流も疎遠になり、政府でさえ年に何度も集まることもなくなっていく。それに異を唱えるものもなくなり、人々の関係も消滅していくようだった。そして、それに輪をかけたように出現したのが、奴らだ。

* 西暦三千年

ケースー

一人の中年のホームレスが夜中に自分の家で目が覚めた。時代が変わるうとも、人間の生物上組織されるレベルにほとんど違いはない。金持ちがいれば、貧困に苦しむ人間も後を絶たない。その一人が住んでいるのは、家といっても公園の中の段ボールで建設されたものだ。すでに猛暑が何日も続いていて、その時も寝苦しさで目覚めたのだと思い、すぐにまた目を瞑ろうとした。身に纏った衣類はすでにほとんどなく、ただ暑さに耐えるしかなかったのだ。公園は大きなもので、彼らの縄張りにいる上級者たちはどこかで青いビニールシートを集めて家を建てる。だがこの男は新参者で、シート区域には入り込めなかった。段ボール住まいで仲良くなった隣の住人にはよくしてもらっているが、彼も今は寝息をたてているようだ。そんな小さな寝息が聞こえるほど、開放的であり身近にいる。しかし、それ以外にも男はいつも感じない何かが側にいる気配を感じた。直感だ。段ボールの家の中にはろくな食べ物もなく、多少あったとしても拾ったままの中身の少ない空き缶だ。これに水を入れるとジュースやコーヒー、勿論薄味、が飲めるのだと隣の住人に聞いた。

これを目当てで犬や猫がやってくるはずもない。残りの可能性は……子供だ。

まだ真夜中だが、俗に言う不良少年ならば普通にうろつくだろう。そしてストレス解消にホームレスを殴ると最近専ら噂である。だが、それらを疑う声はしない。そんなに声を殺して来るのか。そんなはずもない。それに、男は自分が狙われる理由もわからなかった。そんなのいらないのかもしれないが、それならば逃げようもない。男は、身震いをするほど近くにあったやかんを手を取った。戦うなら少しでも何かあったほうがいい。この家は狭い上に、物もないゆえに、隠れる場所もない。この公園で暮らすようになってからは

出したことのない俊敏な動きで、男は入口へと移動し、左右に目をキョロキョロ動かしながら偵察した。仕事も家もないが死にたくねえ、そんな思いでいっぱいだった。月も出ていない今夜の外は真っ暗で、木々の向こうにある道に立つ街灯の明かりだけが頼りだった。カサ……。

葉を引きずるような音に反応し、男は身体全部を家の中に戻した。確かに、いる。しばらく暴れる心臓を右手で押さえ、やかんを握りしめてただ待った。

カサカサ……。

再び音がする。しかも、近づいてきているようだ。だが、その姿は見えない。

「誰だ」

闇に向かって話しかけるも返事はない。

「ゴキブリじゃねえよな」

本当はそうあって欲しいと願いながら、男は小声で呟いた。虫よりも怖いのが、言葉が分かるのに話を通じない人間だ。虫のほうがマシ。危害を加えるのは、ごく少数だ。だが、虫ではなさそうだ。人でもない。動物でも……。右で気配がしても、すぐにそれは別の方角へ移動する。こんなに静かに動くものはあるのか。少し顔を出すのは返って怖いのではないかと男は怯えた。自分を守る囲いもなく、頼れるのは反射神経のみ。それも最近では自信を失っている。

しかし、命のためなら仕方ない。男は決意を込めて一人頷いた。一気に行く。走って、目の前の植え込みの後ろに回る。それで、この家を観察するんだ。もしかしたら途中で何かされるかもしれない。そしたらこのやかんで殴ってやるんだ。きっと何もいなければ安心できる。このままじゃ気になって眠れない。勢いが大切だ。少年時代に五十メートルを七秒で走ったんだ、なめるなよ。三、二、一……。カウントをしながら、男は陸上大会でやらされるようなスタートフォームで一気に家から飛び出した。植え込みまでは三メートルほどだ。ほぼ頭から地面に突っ込むように全身で着地すると、左手

に植え込みの小枝が当たり、傷付いたのがわかる。

だがやかんを離すことなく必死で身体を起こすと、忍者のように木陰に隠れた。家、と呼ばれる物にとくに異変はない。一応周りを見渡すも、それらしい姿は見当たらない。やはり気のせいだ。だが、これで安心して眠れる。そう思い、今度は隠れる必要もなく飛び出したスピードの何倍も遅い動きで家へと戻った。

「いつてえ……」

家に入り、再び横になり先程木で傷付いた所を見ると、血が流れている。消毒液も、絆

創膏ももちろんない。男は人差し指に唾をつけると、左手の負傷部に何回もすりつけた。

「ま、これでいいよな」

安心感からまた瞼が重くなる。明日は朝一番に市の役人が配りに来る弁当をもらいに行

くので、早く起きなくてはならない。いつも並べなくて隣にわけてもらってばかりだ。

もう寝るか。そう思った瞬間だった。

カサササササ……

最初に聞いた音の十倍速で何かが一気に近づいてくる気配がした。眠りかけていた目を

うつすら開け、首を少し持ち上げて足元を見ると、真っ黒な塊をした生き物が猛スピードで近寄ってきている。それは、一瞬見えた姿だとタワシと同じ形をしていた。掃除をする時に使用していた、あれだ。十センチほどの楕円で、全身固そうな毛で覆われているようだ。体の真ん中には横に一本の黄色いラインが入っている。そして一番恐怖を煽ったのは、目玉だ。うずらの卵のようなその二つの目は、タワシの体の前部にあり飛び出している。目の表面らしきところを黒い小さな点が左右ばらばらに動きながら、男の方へ向かってきた。

「う……うわああ!」

男は跳ねるようにして上半身を起こすと、座ったままの状態で後ずさった。それは見たことのない生き物で、身体の上部についた大きな目玉を狂ったように回していた。

「来るな！ 来るなあ」

やかんには手が届かない。手当たり次第に布やゴミを投げるも当たることなく、その物体はじつと男を見つめている。この暗闇の中、その小さな目でどれほど自分を把握しているのか。目玉から赤外線が出ていて、この家の中すべてを調べ尽くしているように見える。と、次の瞬間、タワシのような生き物は男目掛けてジャンプした。まるで羽があるかのように、それは空中に浮かびあがった。逃げられない。男の意識は驚きによるショックで薄れていった。

翌朝男が目覚めた時、家の中に変化はなかった。

「あれっ？ えっ？」

昨夜妙な生き物に襲われた気がするのだが、夢だったのだろうか。いや、そんなはずがない。あんなにもはつきりと迫ってきたのだ。

あの時の恐怖を思い出すだけで、手が震えた。

「おーい、タカさんよ」

昨夜のことを思い出そうと頭を巡らしていると、隣の住人が声をかけてきた。入り口からは光が差し込み、そこに一人の男の姿がある。彼こそ、男がここへ迷い込んで来た時から世話を焼いてくれる恩人だ。こうして様子を見に来てくれることも有り難い。

「お、ヨンさん」

「ウイ！ ういいうい！」

これはヨンの返事だ。この男は、この公園に住み始めてから数年、今までの名前は捨てた。現実から逃げ、社会から離れたら無意味なものだと悟ったという。だが、人と関わる以上は呼び名が必要だ。男自身は、自分の過去の名前をとってタカと名乗っていた。それは歴とした本名の一部だ。それは世間という社会の中に戻りたい、生きていたいという気持ちを捨てきれない証でもある。隣の住人のこの男はいつも四回返事を繰り返すので、ヨンだ。彼はいつもよくし

てくれるが、名は語ろうとはしない。本人もそれで納得している。世間には世間の、ここにはこのプライバシーがある。そして、それは大して変わらない。

「おめえ、今日も間に合わなかったっぺ」

ヨンは家の中を覗きながら言ってくる。

「あー。昨日眠れなくて」

ヨンが座れるように入口付近にある小物を脇に放り投げると、彼は靴を脱いで何も言わ

ずに上がりこむ。毎朝の恒例と言っても間違いではない。こうして、彼はタカのところ

に弁当を持ってきては分けてくれるのだ。年齢も二回りは離れていると思われるのに、ここ

での暮らしが長い分、彼の方が確実に日々をこなしている。

「暑かったからなあー」

今も暑い。給付された弁当の蓋を開けると、ヨンは少しのおかずをその上に乗せタカに

渡してきた。大して品数は入っていないが、タダで貰えるのだから文句は言えない。その

中には今日も卵焼きがある。ヨンは卵が嫌いだ。渡してくれる蓋の上のおかずは彼の嫌い

な物ばかりであることを、タカは知っている。それを指摘したことは一度もなく、有り難

いと思うべきなのだ。

「ヨンさん、昨日変な生き物を見ませんでしたか？」

おかずを受け取りながら、ヨンの顔を窺う。

「変な生き物？ 何だそれ」

ヨンは狭苦しい紙の家の中で胡座をかき、早速好物の鶏肉に割り箸を進めている。それ

こそ一番欲しかった物だ。思わずじっと見ていると涎が出そうになる。と、タカはヨンの

擦り切れたスボンの穴から見える膝のイボが目に入った。風呂にも長く入っていないもの

だから、服だけでなく身体の表面も垢にまみれて黒ずんでいる。その中に、目立って赤い

大きなイボが突出しているのだ。それに視線を移しながら、タカは答える。

「ええ。なんかタワシみたいな。茶色くて、こう、ゴツゴツしたすばしっこい……」

手で摘んでいた卵焼きを口の中に放り込むと、両手で小さい円を作る。昨夜の生き物の大きさを思い出そうとして、何度かその形を変えた。だが、それも確かではない。

「ああタワシい？　なんだそれ、夢でも見たんじゃねえのかあ？」
「……いや、俺もそう思ったんですけど。あまりにもリアルだったような。それより、ヨンさん、その膝どうしたんですか？」

タカが指差すヨンの膝は異様に膨れあがっている部分だ。それは、イボという大きさではなくなってきている。タカが数回瞬きをしたうちに、それは倍以上の大きさに変化した。

「うい。ういいうい？」

挙動不信に両足を確かめ、ヨンはイボに気が付いたようだ。怪訝そうな顔をして、持っていたお箸でイボをつつく。直感で、タカは嫌な予感がした。そのイボはヨンが突く度に形が変わるのだ。それから、まるで逃げるように。

「あれ。こないだここ怪我しちゃってよお。放っておいたんだけど、なあんでイボになったんだあ？　擦り傷だったんだぞ」

タカは、イボを見ていると徐々に気分が悪くなってきた。なんだかイボに見られている気がするのだ。その上、ヨンの間延びした口調が神経を煽る。心臓が速く脈打っていく。原因は何だ。

「気をつけたほうがいいですよ。変な病気じゃないといいけど」

「大丈夫だよお」

言いながら、ヨンさんは箸を置いて胸の辺りを手でさすっている。

タカは卵焼きの二切れ目を口の中に放り込みながら、顔をしかめた。体調が悪そうなのが気になるではないか。

「ヨンさん、どうした」

「うーん。なんか昨日から胃の調子が悪くてなあ。これも、やるよ」よく見れば、普段ならば一気に腹に収めていた量の弁当には、ほとんど手をつけていないようだ。その残り全部をタカに渡すと、ヨンは次第に青くなっていく顔をゆらゆらさせながら自分の家に帰ろうと立ち上がった。タカは、病院へ行こう促そうとした。しかし、金がないのはお互い様だ。行きたくても行けないのだ。人に言われると腹も立つだろうし、自分なら断るはずだ。その誘いは再度口から出ることなく、彼の背中を見送るしかなかった。タカは目の前の弁当に目を落とすと、迷わず箸をつけてご飯を口に放り込んだ。黙っているしかないのだ。自分の昨夜の傷口を見つめながら、タカは一人溜め息を漏らした。

昼間は特にすることもない。空き缶を拾う奴や、日払い労働に出る奴もいる。だが、タカにはまだ決まった行動はなかった。何もしなくても腹は減る。朝はヨンの弁当に有りつけるが、昼と夜は自分で確保しなければならない。助けてくれる者はいないが、食べなければ死ぬだけだ。その他にも、早急に雨が振ったとき用にシートの確保が必要だ。段ボールの箱ではふやけてすぐに使い物にならなくなってしまう。いつもより満タンの腹を押さえて、タカは家を出た。特に取られる物もないので、身軽な身体で行き先を考えていた時だった。

「ぎゃああ」

隣の家から、湿気った今の空気に不似合いな乾いた叫び声が響いた。ヨンの声であることは確実で、タカは慌てた。軽快に踏み出したはずの足は止まり、ただヨンの家に耳を澄ました。胃腸がおかしいと言っていたのが悪化したのだろうか。心配だったが、あの叫び声の原因を目にするのは躊躇われた。あれは何かに驚いた声に違いない。見たくない、怖い。だが、そこでじっとしていても仕方がな

いことは分かっていた。普段から優しくしてくれたヨンを見捨てるわけにはいかないのだ。拳を握りしめ、覚悟を決める。そして、タカは隣の家に向かった。入口にはタオルが簾のようにかけられている。それを手でどけてから中に入ると、タカはその惨劇に言葉を失った。思った通り、ヨンの容態が急変していたのだ。しかも、それは異常というべき苦しみ方だ。

「ヨンさん！ どうした」

ヨンは床に大の字に転がり、膝を振り回しながら叫んでいる。両手を大きく床に広げ、それをめちやくちやに動かしているものだから、容易に近付くことも出来ない。家の中に散乱している小物が、彼の手によってタカの足下に飛んでくる。目や口が引き裂かれそうなほどに開いている。それを見て、タカは先程の恐怖よりも焦りが勝った。どうにかしなければ。

「おい、大丈夫か！」

何度か彼の手に殴られながらタカが近づくと、ヨンの痛みの原因が目飛び込んできた。その途端、タカまでもが悲鳴を上げる結果となり驚きと恐怖で尻餅を付いた。

「うわあああ！」

叫び声は付属的なもので、意図的に口から出た物だった。本来ならばショックで声さえ失ってしまいそうだ。しかし、それに反するように声は出た。あたかも脳みそがここは叫ぶ所だ、と命令したことを客観的に判断したように、それは機械的なものだった。それを出し切っても、惹き付けられるようにそこから目を離すことができない。もう一度声を出そうと息を吸ったが、今度はそれが形になっではくれなかった。だが、身体も言うことを聞かない。ただ床に転がったまま、タカはヨンを見つめるしかなかった。ヨンの膝の中では、なんと昨夜タカに向かってきたあのタワシもどきの生き物が動いているのが見えたのだ。薄皮一枚の下で、奴らの目玉が動いているのが分かる。このあとどうなるのか、予想することさえ躊躇われた。

「ヨン……ヨンさん。なんだこいつら……。おい」

タカは、消え入りそうな声で呟きながら、近くにあるタオルを丸めてヨンの膝を目掛けて投げる。しかし、そんなものは全く効果がない。むしろ、奴らの目の動きが数倍の早さになっている。威嚇でもしているつもりなのか。誰が助けに来てくれるわけではない。ヨンが何度か上げる悲鳴だけが、虚しく昼間の公園に響く。この時間は人通りも少なく、同じ住民は何かしらを求めて外へ出払っていることが多い。助けを呼ぶならば、電話をするか道で声を掛けるしかない。しかし、後者はほぼ無理な話だろう。そんな中、ヨンは、膝がどこかへとんでいくことを望んでいるかのように強く上下に振り始めた。

と、その瞬間だった。ヨンの皮膚を破って何十、何百ともいえる小さなタワシもどきが……。まるで、タマゴからひよこが孵る時のように産まれた。つまり、限界まで膨れ上がった皮膚を破って現れたのだ。その数は途方もない。数センチ単位の奴らが、ぞろぞろと地面をそこら中に這いだした。やはり夢などではなかった。タワシもどきは膝から生まれると、コマのように体を回しながら辺りを詮索しているようだ。その速さの俊敏なこと、ヨンの膝からは大量の血が流れたし、床に敷いてある段ボールの色をペンキで塗るようにじつとりと染めていく。奴らもヨンの血にまみれているため、動いた跡が残る。すぐに家の床は奴らに占領されてしまった。だが、タカの足は恐怖で全く動かなかった。

「来るなあ……来るなあ」

タカが絞り出すような声でタワシもどきに呟きかけると、その生き物はヨンのの方を見た。ヨンは、長いボサボサの髪を掻き回しながら身体中で悶えている。血が溢れる肉の間から白い骨らしきものが目に入ったとき、タカは吐きそうになり顔を下に向けて口を固く閉じた。

「いつてええよお！ あああ！」

ヨンは大きな口を開けて叫び続けているが、タカに出来ることはな

かった。気分は最悪

で、喉はカラカラだ。彼の叫び声は永遠に続くかと思われたが、それは突然止んだ。必死

で吐き気を堪えヨンの顔を見ると、タカはもうそれを我慢出来なかった。そのまま床に自

分の汚物を吐き出す。目の前では、タワシもどきがヨンの口から体内への侵入を試みてい

たのだ。奴らに親玉がいるのだろうか。出てくる時も一斉だったが、入るのもまた同様だ。

「な……なんだこいつら」

タカは汚れた自分の口を手で拭くと、座った状態でおしりを滑らせ少しずつ後ずさりし

た。足が震える。それ故に、移動手段はこれで精一杯だった。ヨンのことは心配だし助け

たい。だが、今すぐにその場を立ち去れと、タカの頭の中の赤色灯が忙しく回り続けて

危険を知らせている。それに抗うつもりもない。タカはそのままくると体勢を変え、四

つん這いになって自分の陣地へと戻った。今のところヨンの家の外には奴らの姿はなかつ

たが、時間の問題だろう。タカの両手足は土で汚れていた。自分の家の中で座り込むと、

先程見たものを思い返す。

「なんだ。あれ……あいつらは何がしたいんだ」

しばらく、タカは考えながらタオルケットで全身を覆った。少しでも身を守りたかった

し、隠れたかった。タオルの隙間から家の入口付近に目をこらすも、全く異常はないよう

だ。しかし、タカには安全を確かめるために、そこから出る勇氣はなかった。隣のテント

で恩人とも言える人物が苦しんでいるのを知りながらも、見なかった振りをして賢明に眠

りにつこうと目を閉じた。

タカが気づいた時、辺りには日の光が減っていた。あんな極限状態でもどうにか眠ってしまったようだ。気温も大分下がっている。タオルケットから慎重に全身を出すと、タカは家から顔だけを出して隣の住まいの様子を窺う。静かだ。もう悲鳴は聞こえない。ゆっくり立ち上がり、足音が立たないようにと気遣いながら近づいて行く。「ヨンさん」

タカは彼の生存の可能性を心の隅では否定していた。それでも、生きているかもしれないことに賭けたかった。だが、予想通り返事はない。

「大丈夫か……よ？」

横たわるヨンの姿を目にしたとき、言葉は魔物に吸い取られたように出なかった。ヨンは口を大きく開いたままだ。昼にタワシもどきが出てきた膝の跡は、くつきりと残っている。さらに異様なことに、腹部にも同じように穴が開いていた。そして、その開いた腹の中には何一つ臓器が残っていないのだ。全くの空洞。なぜだ。人間なら必ずあるはずの血液も、段ボールに染み込んだものを除いては零れていない。だからこそ、彼の死体を見ても死体だという実感が湧かなかった。マネキン人形のようなのだ。事態を把握できないまま、タカは公園の外へと走った。近くの店に飛び込み、死体があると通報して貰うためだ。

家に戻ったタカが次に見たものは一つ、ヨンの姿だ。先程よりも衝撃は少ないが、なるべく見たくはない。だが、またもや疑問が湧いてしまったのだ。

「なんだ？　なんで目玉が……両方ねえんだ？」

目玉が入っているべき場所には、ぽっかりと二つの穴があるだけだった。それもまた、彼を人形らしくさせている所以だ。こんな人間を見るのは初めてだ。恐怖など消え去ったかのように、思わず身

を乗り出して覗き込む。

「すいませーん、警察の者ですが、通報いただいた方はあなたですか？」

警察署の刑事が二人でやってきた。家の目印に、白いタオルを近くの木に結んでおくと

いったのですぐわかったそうだ。

「え……と、発見された死体はそちらですね」

警察官から見ると、どうやら死体の異常さはタカの身体に隠されて見えないようだ。冷静にそう言くと、彼らは中に入ってこようとする。どうせホームレスが餓死した程度にしか思っていないのだろう。死体を運び出してそれで終わりにするつもりに決まっている。おそらく、本体を目にするまでは。そんな警察官に縋るような目をする、タカは両手で彼らの身体にしがみついた。

「お願いだ、助けてくれ。殺される、俺も食われちまうよ！」

ただ誰かに側にいてほしかった。あのどこから現れたかも知れない生き物の姿が頭から離れない。タカは何度も何度も繰り返し叫んだ。だが、そんな彼に警察官は驚いたようで、タカの身体から発する刺激臭にも圧倒され腕を離そうともがいている。

「あの、とりあえず死体を」

頻りにタカから離れたがっているのが分かる。それでもいいのだ。この惨劇を体験すれば誰でも同じ気持ちになるに違いない。言われるがままにタカがどくと、ヨンは変わらぬ姿で現れた。そこで初めて、警官は事態を察したようだ。それが、異常であることに。

「なんだこれ！ 誰がやったんだ？」

警察官は、ここにきて初めて衝撃を露わにした。

「タワシだよ！ 奴らが来たんだ！ 助けてくれよー」

いつの間にか涙が溢れてきたタカは、拳で目を擦った。だが、警察官の目が自分の拳を

凝視していることに気づく。これをタカがやったのだろうと怪しまれているのだろうか

心配になる。

「応援を呼ぶので待ってください。それより、その手のイボ……。随分大きいですけど大

丈夫ですか？ 病院へ行くなら、早いほうが良いですよ」

どこかで聞いたような台詞に少しの嫌悪感を覚えながら、タカは自分の手を見て愕然とした。昨夜、茂みに飛び込んだ際に負傷した所に大きなイボがある。それは、今朝ヨンさんが箸で突いていたものに酷似していた。そういえば、タカは先程からなぜか胃に不快感があった。死体を見たせいだと思っていたが……。警察官は、胃に手を当てどんどん青白くなっていくタカを不思議そうに見ている。どうすれば助かるのかタカは考えたが、それは絶望的だった。それなら、あの不気味な生き物を警察官に見せてやろうと思った。そうすれば、電話で信じてくれなかったことも受け入れるだろう。おそらく今自分の体内にいるであろうやつを。タカの考えが的中したようで、すぐに手が痛みだした。手から腕、胸から腹部へと痛みが広がっていく。身体が裂けてしまうのではないかと思うほどの痛みが走り、痺れるような感覚が襲う。

「う……うああああ！」

そう、奴らがまた現れる……。

ケース二

「先生、血圧低下しています。脈拍もどんどん微弱になっています！」

病院の手術室。執刀医師やその助手に囲まれた中心にいるのは、小さな男の子だ。緊迫した空気の中、数人の足が忙しなく移動する。心音を示す機械の音が虚しく部屋に響いているが、それも明らかにゆっくりとしている。

「ん……。血液が足りないな。輸血の準備！」

メスを持ったまま、助手を見ることなく医師が言った。彼は、この手術に自信があった。

何度も経験しているし、なにより自分の腕を信じている。それなのに、この急変だ。原因が分からない。だからといって、慌てるわけにもいかないのだ。努めて落ち着いて処理しなければならぬ。

「先生、あと微量しかないんです！」

「よし、じゃあひとまずそれで食い止めよう。残りは廊下のご両親にも提供願ってくれ。」

センターからの待つわけにはいかない」

「はい」

命ぜられた助手は、急いだ様子で手術室のドアを出て行こうとした。だが、彼女はその瞬間小さく悲鳴を漏らす。手術室のドアを開いた時、何かが足元を通った気がしたのだ。

それも黒っぽい生き物に見え、心当たりがあるとすれば一つだ。

「な、なに。ゴキブリ……？」

咄嗟に辺りを見回すが、それらしき物の姿は消えている。気のせいだろうか。

「おい、何をやっている！ 早く行け」

「はいっ！」

医師の声で我に返ると、助手はそそくさと出て行った。

「きゃ！ 先生！」

一人の助手が出て行くと同時に、別の女性が悲鳴を上げた。手術室の緊迫した空気の中、それは邪魔な音でしかない。冷静でいなければならぬ場所で、感情を乱される。声の主にはあられもなく冷たい視線が向けられた。

「なんだっ！」

それでも医師が患者から目を離すことはない。内心は悲鳴など上げる女性に苛ついていたため、声音が普段より低くなる。

「変な生き物が床に！」

「そんなものは早く捕まえろ。それより麻酔も追加だ！」

すべては患者のためである。その生き物を探す目など、どこにもなかった。そして、女性が一瞬目を離すと、それはいつの間にかどこかへ消えていた。首を傾げながら女性も所定の作業に戻った。

数時間後、手術は成功し何事もなかったかのように終わりを迎えた。生き物の存在を追求する物もいなかった。すべてはこのためにあつたのだ。緊迫した空気が緩み、口々に労いの言葉が飛び交う。

「お疲れさまでした」

「お疲れ。じゃあICUに運んで。油断しないで常に見てあげてね。それと廊下のご両親をご案内して」

「はい」

医師と助手たちは各々に手術室を後にする。部屋の中に残ったのは、二人の助手だけだった。一人は頭につけている帽子をとりながら、疲れた顔をしている。

「疲れたねー」

「香織もお疲れさま。目眩がしたよ。長かったね……」

香織と呼ばれた女性は、苦笑いをしながら力無く頷いた。

「でもさ、私一回血液を取りに出たでしょう？ あの時ね、もしかしたら見間違いかもしれないけれど……」

下を向いていた顔を勢いよく上げると、香織は思い切ったようにそのあとを繋げた。

「変な生き物を見たの……」

笑われると覚悟をしていた。しかし、もう一人もそれを聞くと顔色を変えたのだ。

「ねえ、私も見たかもしれない。それ……。黒っばいやつ？」

香織は驚き、周りを見回し誰もいないのを確認すると、声を低くして答えた。

「あんたも見たの？」

「う……ん。ゴキブリのような、違うような奴。でも気持ち悪いし、

それどころじゃなかったし、次に見たときにはいなかったの」

「私も同じ。なんか不吉な予感もしたし。変なことは言っちゃいけない気がする」

お互い顔を見合わせるも、その生き物がすでにいない限り、もうどうしようもない。手術室のあちこちを二人は見回すが、そんな物がいた形跡もなかった。目撃したのが自分だけなら気のせいで済んだ。しかしそうではなく、二人は言葉にできない違和感を胸にしまい込めて、その場を後にした。あんな小さな生き物だ。たとえ病院内に存在しようとも、さほどの問題はないと思っただのだ。だが、異変はすぐに発覚することになる。

同日の夜中、手術を担当した医師のもとに、看護師が姿を見せた。帰宅しようとしていた医師は、白衣を脱ぐと看護師のほうを向いた。彼の容態は安定しているはずだった。確かに手術中は予想外に血圧が低下した時もあるが、どうにか持ちこたえ両親に感謝の言葉を貰ったばかりだ。

「どうした？」

看護師に向けられた声は少し疲れもまじり、面倒臭そうだった。医師は小さなことならば、明日にしてくれと言いたかった。おかげで看護師はそれを続けるのが憚られた。ここに来る時点で医師の手助けが必要なことは明白だったからである。

「あの、彼の腹部に大きなイボが見られるんです。処置の指示を頂きたくて」

鞆を掴んだ手を止め、医師は訝し気に看護師の顔を見つめた。確かに、手術で開腹はした。しかし、そんな出来物はなかったはずだ。炎症を起こしたか、感染症か。いくつかイボの出来る症状を思い浮かべたが、どれも当てはまらない。結局看護師の表現が間違っているのではないかと疑いたくなった。

「そんなもの、縫合を行った数時間前にはなかったぞ」

「はい。そうなのですが、先程消毒を行った際に見付けまして」
「大きいのか？」

「はい。それと中で……」

看護師は、言いくそうに口を噤んでしまう。医師はそれを咎めるような視線を向けてから、先を促した。

「なんだ」

「中で何かが動いて……いるようなんです」

「そんな……。馬鹿な」

医師は、咄嗟に鞆を離すと、一度脱いでハンガーにかけた白衣を再び無言で手に取った。看護師の言うことが確かならば、医療ミスに繋がってしまう。一刻の猶予も許されないのだ。帰宅ころではなくなってしまったようだ。一言だけ返すと、看護師を押しつけるようにして部屋を後にし、すぐにICUへと走って行った。夜間の病院内は、入院患者も寝静まっている。その中を、医師は駆け足で向かう。背後からもう一つの足音がするのは知らせに來た看護師のものだろう。それを振り返る余裕もなく走り続けると、すぐに驚く光景が広がった。

「先生早く来て下さい！」

ICUの周りにかなりの人だかりが出来ているのだ。その中から、悲痛な叫びが聞こえる。

これだけ人がいるのに、なぜすぐに自分が呼ばれたのかと文句を言いたくなった。さ

らに容態が悪くなったらどうするのだ。だが、こんなに人が集まるとはどういうことだ。

そのことにまず違和感を覚える。

「な、なんだ！ 何事だ？」

人だかりが医師を見た途端に脇に退け、道ができる。花嫁が歩くバ―ジンロードのよう

だ。だが、この道が幸せへの道ではないことは確かだ。なぜなら、その部屋の中からは手術で命を助けたはずの子供の泣き声が漏れていたのだ。それも、かなりの大声だ。こんなことはあり得ない。これで冷静でいるという方が無理だった。医師は顔面を引きつらせな

がら子供の元へ駆け寄った。

「うわああ！ 先生え！ 痛いよ」

ベッドの上では、男の子がお腹を押さえて泣いている。その顔は泣き喚いているためか

真つ赤である。心なしが身体全体が膨張しているようにも見える。

イボだけでここまで痛

がるというのか。聴診器を手に取るが、医師の手が震える。未だかつてこんなことはなかった。

「大丈夫だから。だから、先生に見せましょう。ね、お腹を見せて真つ青な顔の看護師が三人がかりで男の子をベッドに押さえ付けているが無駄なようだった。

今にも、彼はベッドから転げ落ちそうだった。三人の看護師の視線が医師に突き刺さる。足が止まった医師に対して、非難するような視線と言葉が飛ぶ。

「先生！ 早くして下さい。お願いします！」

看護師が男の子のお腹の辺りの服をたくしあげた。同時にそれまで騒がしかった部屋は、男の子の悲鳴以外が消えた。腹部を見て、周りの人間が絶句したのだ。が、次の瞬間には、それも割れんばかりの喧騒にかわった。看護婦の一人はお腹を見た途端に、恐怖でその手を離してしまった。

「おい、どこへ行くんだ！ 服を押さえろ！」

医師が呼びかけるも彼女の耳には届かないようで、叫びながら部屋を飛び出して行く。男の子のお腹のイボは、すでに皮が千切れそうなくらいに膨張し、その中で生き物が動いているのが確認できた。こんなことは、長年医師を勤めているこの男にも初めてのことだ。看護師同様、部屋を去りたい衝動に駆られる。だが、そんな訳にもいかない。この度胸こそ、この職業で手に入れた一番の宝物なのだから。

「なんだこれは。開くぞ。メスを持ってこい！」

周りで傍観していた男の医師が、メス、メスと呟きながらどこかへ消えた。その間にも、お腹のイボは見る間に大きくなっていく。足が震えそうになるのを必死で堪える。どうしてこんなに急激に成長するのだ。医師が次に見たものは、目玉だ。クルクル回る目玉が皮膚の下から医師を、看護師を終始見回している。

「き……ぎゃあああ！」

足や腕を押さえていた二人の看護師も、それを見た瞬間に叫びながらどこかへ行つてし

まった。医師も限界だ。こんな事態は予測できないし、遭遇したこともない。逃げる度胸

も必要ではないのか。そんな葛藤を心の中でしているうちに、ベッドの脇にへたりこんで

しまった。何だ、どうすればいい。その疑問に頭が支配され、目が離せなくなる。

「うわああ」

男の子の絶叫を最後に、腹の中で動いていたその目玉が飛び出してきた。実際には目玉

が一番で身体も付いてきたわけだが、その生き物の目玉は人間のそれよりも格段に大きい。

身体の一部である目玉、というよりも身体が付属品のようだ。皮膚を突き破る時には、中

から勢いをつけてジャンプした、まるでそんな現れ方だった。ポツプコンがフライパン

の上で跳ねているように、飛び出してきたからもベッドの上を飛んでいる。医師でさえ吐

き気を催すほどにおぞましい光景だ。それが一匹ではなく百を超えらるだろう大群が次々と

溢れてくるのだ。それはわき水のようにでもあり、エサに群がる蟻の

ようでもあった。

「なんで……。これ。いつ入った……。どうしてここに……。いる？」
タワシもどきの大群は、すばしっこくベッドの上をはいずり回り、男の子の目玉に吸い

付いた。中に入っていく物と、目の周りで待機する物がいるようだ。すぐに目玉は綺麗に

くり抜かれ、奴らが争うようにしてそれを食していく。男の子の心臓はすでに停止してお

り、あの独特の効果音が部屋中に響く。それが医師を我に返らせるとともに、恐怖を増長

させた。こんな時にまでプライドがあるのか、自分が悲鳴を上げていないことに驚く。抜

けてしまった腰を一生懸命に起こしながら、医師はじりじりと扉のほうへと後さる。その

間にも、タワシもどきらは今度は男の子の耳へと回りこみ、穴の中へ侵入しようとしている。

ただ見ているしかできない医師は、引き攣った顔を向けたまま佇んだ。看護婦たちが

戻ってくる気配は全くない。あんなにも部屋を囲んでいた野次馬は一人残らず消えている。

タワシもどきは、耳の中へと吸い込まれるように消えていく。見た目はゴツゴツしている

ようだったのに、耳かきの綿のように柔軟だ。医師はそこまで見ると、意識を失い床に倒

れた。

ケース三

……。ああたりい。まじ最悪。なんで俺がこんなとこにいなきゃいけないんだよ。

満員電車の中で座れたのはいいものの、男は心の中でばやきなが

ら、寄り掛かってくる隣の中年男を睨んだ。殴りたい。中年男の禿げた頭を見ながら、必死に沸き上がるその思いを押し殺した。男は、この春大学を卒業したばかりの社会人一年生だ。通勤はこの満員電車に揺られ、日中は営業で歩き回り、毎日ストレスの塊だった。日常で起こる些細なことや関わるすべての人に苛立ちを感じるのをどうしても止められず、かといって発散する場所も見付けられなかった。揺れる車内。男は自分の胸ポケットにも振動を感じた。携帯の着信が、恋人の名前を表示している。車内だから出ることはできず、それに話したいとも思えず、留守番電話に切り替わるのをただひたすら待った。それはしばらく振動が続けた後に静かになった。だが、着信履歴を見て啞然とした。今日の昼からの着信だけで、履歴がいっぱいになっている。怒りを通り越して怖くなる。彼女はまだ大学生だ。同じ大学に通っているうちは楽しかったが、社会人になってからは上手くいっていなかった。愛情がなくなっていたわけではない。彼女のことは大切だ。世の中の多くの社会人がそれを経験しているように、生活時間のズレや、理解度不足が原因だろう。環境が変わればかなりの確率で破局すると聞いていた男はこの事態を案外すんなり受け入れている。実際に別れ話をしているわけではない。別れたいかと聞かれるとすぐには頷くことは出来ないだろう。だからといって一緒に遊びに行くことなど今は面倒だったし、泣かれたりして自分の感情まで爆発することを恐れた。そこまでしてもそばにいてくれることに感謝の気持ちもあった。しかし、素直になれぬまま現状に至る。色々きちんと話さなくてはならないと思いつつも、それを説明するのに会うことも電話をすることも、今のこの男には億劫な事項の一つにしかならなかった。そんな彼女のことを考えていると、電車は次の駅に到着したようだ。隣の男は降りるだろうか。この満員の中、自分から立つ元気などない。せめて迷惑であることを伝えなくては。そう思い、肩で隣の男の頭をくいつと上に押し上げサインを与えた。だが、なぜか男の頭は重く、思うようにどいてはくれない。ポケットに戻した携帯が再び振動をする。今度は彼女

からメールのようだ。ため息をつきながらそれを開くと、悪戯メールかと疑うような内容が書かれていた。どう返信をしようかと迷いながら、再び肩に重圧を感じて舌打ちを漏らすと、隣の男が急に低く呻いた。そうだ、邪魔だよ。もう我慢できない。この駅で一度降りよう。男がそう思い、網棚に乗せた鞆を取るために立ち上がるうとすると、何かを感じた。空気が一瞬張りつめたようだ。なぜだ、と周りを確認しようと目を泳がせた時、その悲鳴が空を切り裂いた。「う。うわあああああ！」

今までもすやすやと赤子のような寝息をたてていた中年男が、左頬を押さえ目を剥いていた。満員電車であるのが不幸で、離れたくても身動きがとれない。異常な光景を、至近距離で観察せねばならなくなつた。周りの乗客も皆同じで、少しでも逃げようと押し合いが繰り広げられる。

「うわあああ！ 助けてくれええ」

突如、中年男は両手を前に突き出し、背広にしがみついていた。中年男の頬には大きなイボが出来ていて、不自然な動きを繰り広げている。頬の肉が膨らみ、活発に動いているのだ。それは自らしていることのように思えなかった。気持ち悪さよりも、その異様な動きに目を引き付けられ、男は自分から顔を近づけていった。と、次の瞬間だ。車内には

誰が最初に発したでもなく甲高い悲鳴が連鎖反応していく。中年男の頬の膨れ上がった部分が破れたのだ。その下からは異様なまでの生物が溢れ出てきた。自ら動いているので、生きていることが分かる。しかし、その小さな黒い物体を、男は今までに見た事がなかった。大きな二つの目がぐるぐると回っている。

ちょうど電車は駅のホームに滑り込んだ。同時にドアが開き、人々が雪崩のように外へ流れ出る。車内で異変があつたことは悲鳴により人々の間を伝わっていく。遠くからホームで騒ぐ乗客を諫めるため、車掌が鳴らす警笛が聞こえてきた。そして、徐々に人々の姿が男の乗っている車両から遠ざかっていく。あんなにも身動きが取れ

ないほどに人で埋まっていた電車内に、今彼は中年男と二人きりになっちゃったのだ。男は動揺しながらも車掌に大きく手を振った。男も逃げたかったが、異常な症状だとはいえ病人を見捨てるには良心が痛んだ。それに、心を奪われてしまったようにその場から身体が動かなかった。

車掌は、原因の車両を突き止め手を振り返してくれたものの、中年男の姿を見ると固まっちゃいまい近付いては来てくれなかった。それも頷ける話だ。中年男の身体から生まれたタワシもどきは、床中を這い回ったかと思うと、中年男の口に吸い込まれるように入ってしまったのだ。その光景を見ても、男は逃げるための足が動かなかった。恐怖、その一言だ。自分の靴の足の上をタワシもどきが駆ける。少しでも動けば、奴らに人間だと気づかれて襲われる気がしたのだ。獲物だと認識されなかったためにも、身動きをしないほうがいいと思った。案の定、ホームを駆ける人間を見て、電車から飛び出すものもいたくらいだ。下半身を固定したまま、男は彼女から届いたメールに再び目を落とす。

――街に変な生き物が増殖しているって知っている？ 気をつけてね。メールの内容はそれだけだ。冗談だと思ったが、このことだったのだろう。そう思うとあの着信履歴の数にも理解できた。彼女は冷たい態度を取っていた自分を氣遣ってくれていたのだ。それに気づくと、一気に今までの行動の不甲斐なさとし訳なさが沸き上がる。そして、彼女の身が心配になった。変な生き物。奴らだ。それらは中年男の耳から入ったはずなのに、今度はうつすら開いた口から姿を見せた。いつの間にか中年男の目玉はなくなっており、真っ黒な空洞になっている。その身体から出てきた奴らは、独楽のようにクルクルと回った後にドアから出ていった。あの大きな目で方向を確かめているのだろうか。それとも、匂い、いや触覚だろうか……。小鳥のように小さな手足がついているのも見えたが、それはほぼ使わず腹で滑るように去っていた。もちろん、それを捕まえるものなどない。

「おい！ おじさん！」

目玉もなく頬は破れ、とても生きているとは思えなかった。しかし、男が揺さぶると、

少し動いた。そんな気がした。どうしてそんなことをしたのか、男にも分らない。きつ

とこれが夢であると確かめたかったのだろう。だが、目は覚めない。中年男の顔がだらん

と下がり、目に見えて腹が膨らんできた。背広を着ているというのにそれが見て取れる。

腹の中に風船を入れているとしか思えない膨らみは、最後にどうなるかすぐに予想は出来た。

「なんだよ。これ」

逃げようとしても、金縛りにあつたように全身が動かない。車掌でさえ車内には入って

きてくれない。それも当たり前だろう。その瞬時、想像通り風船の割れる音が響く。その

音は決して大きくはなかったが、男は目を瞑った。ゆっくりと目を開けて、その音の出た

所を探る。見当は付いていた。それでも衝撃は勝る物だった。先程逃げたタワシもどきの

半分ほどしかない物が、何十……いや、何百もが我先にと、皮膚を破って溢れ出してきた

のだ。服の間からすると流れるように這い出てくる。それらは小さな奇声を発しながら、同じ方向へと行く。なんだこれは……。何度心の中で繰り返しても答えが出るはずは

ない。

全てが車内から去った時には、ホームにいたはずの車掌の姿も消えている。男は、自分

の身体に奴らが付着していないかを確認する。どうやら、動かないというのは得策だったようだ。だが、それも一時のことだろう。そこでハツと我に返る。ポケットから携帯を取り出し、その着信履歴を辿った。焦りから震える指でボタンを押すと、相手にはすぐ繋がった。

「もしもし？ お前、今どこにいる？」

「え、どうしたの？ 買い物中だけど。メール見てくれた？」

電話の相手は彼女だ。男が避けていたことを感じてか、その声音は若干控えめである。

しかしそのゆつくりとした話し方は変わらず、それがこの状況にそぐわない。どこから説

明すればいいのか判断出来ずに、大声を出しそうになるのを必死で堪える。それでも、目

の前の死体を見ていると、どうしようもない苛立ちが沸く。そこから目を逸らし、数回深

呼吸して自分を落ち着けようとした。

「ああ。メールも、その生き物もな」

恐怖から声が掠れてしまふ。それを情けないと思う余裕はなかった。一刻も早く安全な

場所へ行きたいのに、それがどこなのか分からない。奴らはどこへ向かったのだ。ホームは人気もなくなり、電車も放置されドアが閉まることもない。後続の電車はどうなっているのだろうと、余計なことに頭が回る。一番大事なことは、何だ。

「お前、なるべく早く家に帰れ。俺の前に生き物が出てきた死体がある。抜け殻のように空っぽだ。これはやばいぞ」

「え？ どういうこと？」

「目玉から、裂かれた腹の中身も。何も残っていないんだ。血さえな」

彼女が息を呑む気配がした。いつも目の前で見ていたあの笑顔を想像する。人よりも少し行動するのが遅い彼女は、どうやって逃げ

るだろうか。人と争うことに究極に弱く、脆くて崩れやすい。泣いて蹲ったら死ぬだけだ。想像すればするほど、プラスのことは思い浮かぶがなかった。とうとう男は声を荒げて叫んだ。

「早く逃げろ！ 街にいたら、あいつらに食われるぞ！」

2 水中生活

二 水中生活

ダリアがこの世に発生してから数百年後……。海は青さを失っては
いなかった。ここの透き通った水は、五十メートル先にいる者の顔
も分かる。この辺りはゴツゴツした岩も少なく、浅いところで立つ
ても痛くない。靴を履けばどこでも痛くなく歩けるが、少女はあの
独特な窮屈さが嫌いだった。つま先からかかとまで、自分以外のもの
に支配され邪魔されている感じ。多少足を傷つけても、怒られる
までは素足だと気付かない振りをしていた。少女はこんなに浅瀬に
来るのは一ヶ月ぶりで、立ち上がるとそこら中を自由に走り回った。
夏という季節は、ほとんど雨が降らないから困る。太陽は必ず顔を
出し、頼んでもいないのに海の中まで光を注ぐ。水温が上がることは
有り難いが、雨が降らなければ陸には近づけない。夏という季節
特有のそれは大昔から変わらないそうだ。これで、反対に雨が降り
続けば異常気象になる。そんな中、今日は久しぶりの雨ゆえに少女
ははしゃいでいた。少女の家の隣の住人も、雨だと分かれると機嫌が
よかった。知り合いは大抵そうだ。雨だと喜ぶ。少女がやって来た
沖の反対側には、見慣れた建物群が見える。ビルだけでなく、家や
車というものも見える。しかし少女が見るのはいつもそれだけの景
色で、砂浜に上がることさえ許されていない。と、足の親指に激痛
が走った。少女は立ったまま、右足だけ上げて浅瀬の水から出して
みると、蟹がぶら下がっている。そいつは、無理矢理離すと機嫌を
損ねるのが常で、優しく頭を撫でてやると気が済んだかのようにポ
チャッと音をたてて海へ帰って行った。

「はあ。血が出ている……。これだとお母さんに怒られちゃう」
少女はため息をつくとき、ポケットから金色のピアスを取り出し両耳
につけた。透明のゴ

ムで出来た山型のマスクで口と鼻を覆うと、一気に海へと潜った。

この少女、名波アイが暮らす場所は砂浜から十キロほど離れた沖合の海中だった。滑らかな泳ぎで沖へ戻ると、珊瑚の岩場にさらに幼い少女が座っていた。雰囲気はアイととて

もよく似て細身だが、少しだけ気の強そうな顔をしている。ショー
トカットの黒髪を海流

に乗せながら、アイの元へ寄って来た。

「お姉ちゃん、やっと帰ってきたね。今日も外に行ったでしょう。
マユも行きたかった」

マユは、アイの周りをクルクルと囲むように泳ぐ。マスクから漏れる酸素が、泡となっ

て海面に浮上していく。このマスクは、二人が生まれた時から装着しているもので、この

生活にはかせない。水中にある二酸化炭素を自動で酸素に変えてくれる。それを吸収し、

再度吐き出された二酸化炭素は、マスクの脇に設置されている穴からうまく吐き出される

ようになっている。両親からの話によれば、人間の身体は過去よりもこの水中で生活する

ようになって大分変化を遂げたらしい。水に強くなり、泳ぎに柔軟になった。水圧や呼吸

に関して補えない点については、独自に発明した機械で対応出来るようになった。そう、

人間は今や地上から水中に居住を変えているのだ。アイが見た建物に、今は人間など住ん

でいないと言う。海ではそれなりの集落があり、ほとんどのことは問題なく暮らせている。だが、時々今も人間は地上に帰りたくなる。生まれた時から海にいて、死ぬまでそのつ

もりであるアイでも、本能とでもいうべき血が騒ぐのだ。土を踏み、空気に触れたい。建

物を見て、昔を知りたい。そう思うことは止められない。

「まだマユは駄目だよ。十歳だからね。砂浜近くはとても危ないのだから」

アイは、妹の頭を撫でながら得意気に言う。しかし、妹の目はごまかせなかったようだ。

少女の足に一瞬視線を投げたマユが、大声で言った。何かを企んでいるように目が輝いている。

「ふうん。だから足から血が出ているんだ。お母さん！ お姉ちゃんに怪我しているよ」

「馬鹿！」

アイは、慌てて妹の口を塞ごうとした。だがその甲斐虚しく、母親がすぐに二人の前に

姿を現した。陰の岩場にいたようで、それは唐突であり、素早かった。どこの母親も目ざ

といものだ。

「こら、アイ。どこを怪我したの。この間のように、ピアスはなくしてないだろうね。靴

を履かないからいけないんだよ、何回言えば分かるの」

小言の始まった母親の脇を、マユがにやつきながら泳いで去っていく。その後ろ姿を恨

めしそうに眺めながら、アイは母親に言った。少しだけ頬を膨らませて。ピアス、とは両耳につけている金色のリングだ。これもマスク同様、海に適応するために作られた一種だ。これこそが身体の水圧を調整し、深く潜っても安全な作用を持つ。それを無くしたのは数週間前。家のある海域まで深く戻ってこられなかったアイは、母親に心配をかけた。その上、父親に新しい物を調達して貰わねばならなかった。この話題は何かと持ち出されて困り果てている。自分が悪いと分かっているが、そのしつこさにアイも辟易していた。

「あ、あるよ！ この怪我だって、蟹に噛まれただけなんだから」

それだけ言って逃げようとすると、服の襟を掴まれた。首が絞められる形になり、息が

一瞬詰まる。身体が後方に引き寄せられたかと思うと、耳元で母親の怒鳴り声が響く。マ

スクを通していても、母親の声は昔から数メートル先までよく響く。それを至近距離でやられると堪らない。

「待ちな。ほら、靴を履きなさい。お姉ちゃんでしょ！ 何回も言いたくないけど、血が

流れているってことは、奴らをおびき寄せるかもしれないのよ」

何度これを言われて育ったのだろ。あいは大人が語る人間の昔話をすでに暗誦できる

ほどだ。そう、奴らについてのことだ。悪いことをした時、叱る言葉に代わってこの話を

聞いた。夜眠る前、童話のように奴らについて教え込まれた。

「分かっている！ だから砂浜には上がっていないし、すぐに帰って来たよ」

「いいえ、ちつとも分かっているわ。お願いだから、なるべく陸地には近付かないで欲しいのよ」

二人がこの話をする時は、いつも堂々巡りだ。自分のことをもう大人だと思っているアイと、それを戒める母親。どちらも正しく、場合によってはどちらも間違っている。

「あたし、もう十九歳だよ。一週間もすれば二十歳になるの。もう陸地だって行っているはずよ」

「それは男の子の話よ。アイは駄目です」

「そんなのは違う。お母さんはいつも嘘つきだよ。大嫌い」

「あら、そう。それなら今度ピアスを無くしても知りません」

ぷいっと顔を背け、母親は家の中へと入って行った。家は石で作られたもので、地上に作られたものとは全く異なる。オシャレでも

ないし、無駄な飾りもない。壁には海草が引つかかっている。それを窺ると、アイのマスクから溜め息が泡となって漏れた。こんなことはなんでもない。ただ主張が合わないだけだ。いつかは母親だって分かってくれるだろうと思う。アイは、自分も陸に近付いてみた
いだけなのだ。

「あーい」

それでも悔しさで少しだけ涙が浮かんできたとき、名前を呼ばて振り返った。アイの隣にいたのは、常に味方をしてくれる祖父だった。

「おじいちゃん……」

祖父はアイの頭を撫でながら、先程までマユが座っていた岩に腰を下ろした。その岩は

人が二人並んで座れる大きさで、岩のくせに座り心地はいい。薄手のスーツを着ているア

イ達人間にとつては、重宝されている種類だ。

「また怪我をしたのかい」

祖父は、涙を流すアイを見つめながら聞いた。こうして慰めてくれるのも変わらない。

母親との争いを聞いていたのだろうか。

「だって、今日は雨でしょ。奴らはいないよ。浅瀬に行きたかったんだ」

アイは両目を擦りながら答えた。母親に言われると聞けないことも、祖父なら納得でき

たし優しく説明できた。それは頭ごなしに叱られ、否定されないと分かっていているからだ。

自分が考えていること、それが間違っていないと認めて欲しいだけなのに。

「アイ。陸地に行きたいのは分かる。かつて人間の住む場所だったのだからな」

「人間は、どうして海へ逃げたのよ。海は好きだけど、あたし、あ

の陸にあるものに触ってみたい。岩と貝殻しか知らない生活なんて面白くないよ」

「魚だっているだろう。それに、今は叶わなくとも、もっと大人になれば色々な事が出来るさ。アイは自分の考えを持てる子だ。ただ、お母さんが心配していることも分かってあげなさい。奴らと遭遇してはいけない」

アイは自分の耳に手をあて、ピアスの位置を確かめた。大人になれば……。このピアスを無くすという行動一つが両親の信用を失ったのだろうか。だが、それだけで子供と決めつけられるのも堪らない。大人だったら失敗はしないとも言いたいのか。そんな思いを抱きながらも、祖父に対抗などできなかった。アイは力無く肩を竦めるしかない。

「ごめんなさい」

「わしはいいんだ、心配だけだな。でもな、これがなければ水に長くいることもできない。水の底を普通に歩くこともできないのだ。実際、お前は浅瀬でお父さんを待つことになったではないか」

「うん」

分かっている。こうして、祖父はいつも正しいことを順番に並べ立てるから言い返せない。悪かったことをゆつくりと訂正されて言うことほど肩身の狭い思いをすることもない。勢いで反論しても、すぐに一から見直されてしまう。だから、頷くよりほかに術はない。

「おじいちゃんも、昔は陸地が好きだったさ。でも、奴らに遭遇した危険もあった。そんな思いを、アイにはして欲しくないんだよ」

「ダリア……」

「そうだ」

二人は海の底から陸地の方向を眺めた。決してそれは見えないが、かつて人間が戦ったというイメージは聞いている話から浮かべることが出来る。そこへ、今日は大事な者達も向かっていた。時々身体が震えるほどの、ダリアへの恐怖。襲われたことはないはずなのに、生まれた時から教え込まれたせいなのだろうか。

「お父さん達、大丈夫かな」

「大丈夫じゃよ。朝、出て行っただけだ。すぐに帰ってくる。ダリアは昔から雨が苦手だ」

「うん。そうだね」

アイは、心なしかスッキリした顔を見ると、一人で家の中へと入った。

西暦三千年、人々を恐怖へ落とし入れる生物が現れた。それは、多くの人間の体内に入り込む、未だかつて存在を認められたことのない生き物だった。生存する一部の人間の間では、しばらく未確認生物として噂されていた。しかし、ある時を境にそれらは急増したのだ。その原因は不明。形が過去に清掃で用いられたタワシと酷似しているため、しばらくはタワシもどき、タワシ野郎などと忌み嫌われた。体全体の三分の一を占めるほど大きな目玉は終始あちこちを見回すが、その視力はとても弱いことが分かっている。ほとんどのものが、人間の血に反応しその位置を把握する。どちらかといえば嗅覚で方向を定めていると思われるが、見える範囲で奴らの身体にそれらしき物はない。捕獲も危険で、確保したからといって研究が進むわけではなかった。なにより小さな怪我による血や、少しでも肉の匂いがするとその生物は獲物だと判断するのだ。一旦そう判断すると、奴らは俊敏な動きで傷口から体内へ入り込む。そして、一日ほどかけて臓器を食い尽くすのだ。最後まで解明できなかったのは、奴らが臓器の中で必ず最後に胃を残すようだったが、それもそこに卵を生み付けるためだと判明した。卵の数は一回につきおよそ五百個。侵入した部位は大きなイボが特徴となる。イボに気付いた時にはすでに手遅れで、数分から数時間で皮膚を破り、親玉となる生物が飛び出してくる。次々に子供も孵り、その彼らが胃を食べることで、最終的に骨と皮だけにされてしまうようだ。その後、一つの大きな集団となって、親の臭いを辿って消え去るようだ。しかし、未だ雄雌は確認できていない。おそらく両性であり、全てが子供を残せる体質にある。子供の成長は目覚ましく、少しの臓器、例えば

目玉二つ食べるだけで、体長は二倍に変化することが分かっている。そのくせある程度大きく育ったとしても、人間の耳のような小さな穴からも侵入する柔軟さを持つ。小さな穴への侵入時の形が、花のダリアのように見えるため、その総称はいっしかダリアとなった。人間は初めこそ敵に立ち向かったものの、その数と凶暴さに白旗をあげたという。そして、逃げるように住処を海へと移したのだ。

「お姉ちゃん」

アイが家に入り、座ってダリアについての書を読んでいると、マユが後ろから姉に抱き

ついてきた。家の中に水が存在するのはアイにとっては当たり前のことだ。ただ、その生

活力は決して高いとは言えない。浮力や腐敗、錆などの関係から人間が陸地から持ち込ん

だものには限界がある。ある程度の家具はピラス同様に、改良されたものがあるが、それ

でもアイにとっては未知である過去の生活のほうに輝いて見えた。

「あんた。さつきは」

「ごめんって。でも、マユだって陸地へ行きたいよ。あ……。またダリアについての本を

読んでいたの？」

マユは、アイが手にした物を覗き込みながら、ため息をついた。それは木から出来た薄

い巻物のようだった。文字はそこに刻まれており、光に当てると反射する。今の時代はこ

うして文字を習った。本を読み、砂に書く。マユは、アイほどそのことに関心はないよう

だ。大人達はダリアから身を守るのが一番大事なことだと思っていた。アイもその考えが

強いといえる。だが、アイは違った。

「うん。昔の人間についても知ることが出来て楽しいよ。マユも読

んでみなよ」

「マユは、お姉ちゃんに聞くからいいの」

「そんなことを言って……。昔はね、人間が砂浜の向こうに住んでいたんだよ？ 信じられる？」

アイは巻物を脇に退けると、マユに向き直り顔を輝かせて話し出した。マユがそんなこ

とに興味がないのが分かっている。だが、マユならなんでも話せる存在だった。

「信じるけどさ。マユ、昔に興味ないもん」

そう言うと、マユはため息をついて立ち上がった。この家は、五十平方ほどの一部屋だ

けだ。その中で家族が暮らしている。マユがいくらアイに呆れようと、家の中にいれば顔

も見える。その小さな背中に、アイはさらに大きな声で話し掛ける。何度家族に言っても、

却って白い目で見られてきた。それでも、なぜか陸に魅力を感じるのだ。

「人間は、ダリアから逃げるために海に来たのよ。あたしは砂浜がなぜだか懐かしいの。」

前に住んでいたことがある、みたいな」

「あーあ。またお姉ちゃんの妄想が始まった。お父さん、早く帰ってこないかなあ」

最近、親を鬱陶しく感じるようになったアイと違って、マユは父親の背中を追いかける

すほどに懐いている。それを可愛いと思う反面、その子供っぽさが何か物足りなかった。

せめて話だけでも聞いて欲しいのに。それが少しの苛立ちとなって声に表れる。

「もう！ マユってば」

「だって、今更水中から出るなんて信じられない。死んでも嫌。安全が一番」

「あんた本当に十歳なの……？」

顔つきもどちらかと言えばマユの方が大人っぽいだろう。しかし、それは中身も同様かもしれない。アイも立ち上がると、その場で肩を竦めた。ダリアについて、あまり話題にしてはいけない雰囲気は大人は出している。危険だということは教えてくれるが、それ以上はほとんど知らないのだ。無理矢理祖父に聞き出したことや、記録での知識しかない。確実なことは、人間が身を守る為に海に逃げると思ったとき、科学は相当進歩していたことだ。だがそれでもダリアを駆除することはできず、水の中で簡単かつ無制限に呼吸ができるマスクと、自在に動けるようになるピアスを開発することで、難を逃れたことだけだった。その際、他の星に移住することや、海外への避難も候補に挙がったというがどれも却下された。いくら大量の人間が死んだとはいえ、地球にはまだかなりの人類が残っていた。だが、確実に安全である他の星を見つけることも、人数に値する移動手段も整ってはいなかった。ほとんどパニック状態になった列島に、そんな余裕がなかったとも言える。日本から発祥されたとするダリアは、体内に潜伏したまま渡航した旅行者により、世界にも蔓延したとされている。その責任問題を解決するより先に、世界の通信手段は破綻した。海外に生存者がいるのかはアイ達になどももちろん分かるわけがない。だが、祖父の話によれば、もし外国に生存者がいるようならば、とつくに助けに来てくれるか、この機会に侵略されているということだ。どちらもありえなかったのだから、同じ状況、さもなくば生存者なしとみて間違いないのだ。よって、日本で生き残ったそれぞれの人間は、独自に生きていくしかなかったのだ。いわば、アイ達は生き残りの子孫だ。その意味では、強いDNAがあるのだと両親にも言われてきた。そのくせ、陸には近付くな、と言う。あまりにも矛盾しているではないか。それを考え始めた時から、アイの中で葛藤は起こったのである。それを、まだマ

ユには分かってもらえない。いや、ずっと分かってくれないかもしれない。そんな彼女は、今もアイに冷たい視線を向けていた。歳の離れた妹の視線に、アイの方が固まってしまう。

「なによ、お姉ちゃんが馬鹿みたいだもの。危ないことばかりして。死んじゃえば？」

「マユ！」

あいは、軽口を叩く妹の言葉に少なからず傷付き、妹に近寄り見下ろした。権力の差を見せつけようとしたのだが、そんなことは彼女に通じなかった。反対に睨むようにアイを見つめ、マユは部屋の奥へと行ってしまう。隠れる場所などない。寝るのさえ、みんな一緒だ。服も最低限しか身につけない身体。今や変温動物へと進化したのも、人間の過去からの進化を見れば不思議なことではない。一つの課程に過ぎないのだ。ゆえに、筆筒などの家具もいらない。

「あら、あんた達いたの？ そういえば、お父さん遅いわねえ。もう夕方だし早くしないと、雨も上がっちゃうわよね……」

母親が夕飯にするであろうタコの、全部の足をまとめて持っている。二人の無言の返事を受け取ると、苦笑いをしたままタコの首を締めた。墨が水中に吐き出され、数メートル四方に黒い液体が流れていく。アイは、それを手で掬うように掴むと口の中へ導いた。案外美味しいのだ。祖父も外を散歩していたようだが、ご飯時には家中へと戻ってきた。

だが、父親が戻って来ない。この日、アイ達の父親は近所の知り合いと陸地に上がっていた。陸地にはダリアがいることを、人間は代々伝えられている。それは、周知の事実だ。ダリアが雨を含む水を嫌うことを把握した人間は、海へ逃げた。しかし、体を流れる血が陸地を忘れられないのか、雨の日だけ陸地へ向かうようになった。それを許されたのは成人、二十歳を越えた大人だけと決められていて、これをアイは心待ちにしているのだ。行ってもいいと言われている者でさえ、ほとんど陸と無関係に過ごす。たとえ行くとしても群れを成していく。襲われた時のためだ。アイは、大人達が連れ立

つて陸地へ行く日は、周りが緊張感に包まれることを知っている。
だが、彼らが何も言わない以上、子供も平静を装っているのだ。

「こんばんは。名波さん」

家のドアを開けて顔を覗かせたのは、隣に住む吉田の奥さんだ。その時、名波家では帰

宅しない父親を待てない家族がテーブルで夕食を囲んでいた。母親は立ち上がりドアの側

に寄ると、ぼそぼそと二人で話し始めた。吉田の奥さんは、顔を食卓へ向けているのでア

イからもよく見えたが、心なしか唇まで真っ青になっているように見えた。

「なんですって」

母親が、突如口元に手を当てながら叫んだ。その悲鳴のような声に、テーブルにいるア

イ達もドアに視線を向けた。慌ててテーブルを振り返った母親は、聞かれたくないのか奥

さんと外へと出て行ってしまう。アイ達三人に残されたのは、微妙に漂う空気だった。

「なに、なによ……。何かあったの？」

マユは、食事の手を止めて呟いた。口の端からタコの足を出しながら、しかめっ面をし

た。幼くとも不気味なものを感じたらしい。アイも同じで言葉を出せなかった。口に出す

と、その不幸が現実になる気がした。一方、祖父は慌てる素振りも見せずに、淡々と手を

動かしている。

「お姉ちゃん、ねえ何？」

不安から苛立っているのだろっ、マユの声音が鋭くなる。だが、アイに分かるはずもな

い。答える代わりに立ち上がると、ドアにへばり付くように耳を当

てた。隔てた壁の向こ

うから聞こえる話し声に耳を澄ませるためだ。先入観ゆえか、ぼそぼそと聞こえる声には

悲しみが含まれているように思える。

「だって、あの人達、大丈夫だって言っていたじゃない。それにまだはつきりと……」

母親がヒステリックな声を上げている。これは、アイを叱るときとはまた違った苛立ち

を表していた。先程のマユの声によく似ている。どうにもならない、苛立ち。悲しみ。

「でも、あの人。主人は言っていたのよ。夕方になっても戻らなかったら、負けたと思
って」

「そんな……。じゃあ、奴らはここまで来るのかしら」

「わからないわ。私は陸地に近付いたこともないから、見に行くのも怖いわ」

「私だってそうよ。でも、何人もの集団で行ったのよ、誰か戻ってくるわよ」

その内容を聞き、アイは父親が陸に何をしに行っていたのかを悟った。負けた。それ

はダリアに、ということだろうか。それしか考えられない。耳を澄ませば、さらに心臓は

高鳴る。この続きが幸せであるはずがない。聞きたくない。それなのに、アイの足は縛ら

れたように動かない。せめて、母親に聞き耳を立てていることを知られた方がマシな気が

した。だが、その願い虚しく二人は会話を続ける。

「ここに来る前に他のお家にも寄ったわ。どこのご主人も覚悟していたみたい」

「そんな……うちの人は何にも。どうしたらいいの……」

ついに声は途切れてしまった。涙ぐんでいるのかもしれない。

「名波さん、とりあえずカレイの広場に集まることになったわ」

カレイの広場は、家の裏にある。昼間にカレイが砂のなかにたくさん隠れている穴場である。

人数が多いときにはそこで集会なども開かれるのだ。ここら

辺一体にはいくつかの

家族が居住している。その家主が全て絶滅だというのか。残ったアイ達は、どうすればいいのだ。

次から次へと浮かぶ疑問で、今度は足が震えてきてしまう。

「わ、わかったわ。子供には言わない方がいいわよね。な、なるべくすぐに行くから……」

「もしかしたら、どこかへ逃げなくちゃいけないわ。荷物も簡単にまとめておいてほしい

ってことよ」

戻って来る……。

アイは、瞬時に身体が反応した。あんなにも母親に気づいて欲しいと思ったのに、いざ

知られるのは怖かった。アイが知ってしまったということを、母親には知られたくなかった。その時の彼女の顔を想像したくなかったのだ。急いでテーブルに走って戻り、口を開いたマユに鋭い視線を向けて黙らせる。何気なくタコをかじったが、味などしなかった。

母親は、ドアから入ってくると、すぐにテーブルまで来て祖父に興味ありげな視線を投げかけた。祖父は黙って少し首を上下に動かすと、つまみに用意されていた珊瑚礁の薫製に手を伸ばした。一方、

母親は様々な小物に手を伸ばし、結局何も持たずにまた飛び出していった。挙動不審である。テーブルには気まずい沈黙が漂い、祖父の薫製を食べる、すりつぶすような音だけが響いた。アイは、そんな祖父に目をやりながらも、箸を置いて言った。

「おじいちゃん。知っているのでしょうか？ 教えて」

祖父は目を瞑ったまま、薫製をしゃぶり続けている。

「お姉ちゃん……。お父さんがどうかしたの？」

マユも涙の膜が張った目をして言う。姉から祖父へと視線を移す。

「おじいちゃん！」

祖父の前から、燻製の入った容器を取り上げると、アイは今まで祖父に発したことのないような、荒い語気で呼び掛けた。すると、祖父はまっすぐにアイ

を見つめ返し、一言だけ

け静かに告げた。

「お前の父さんは、喰われたよ」

それだけ言うと、アイの手から静かに容器を取りかえした。その言葉からは、なんの感情も汲み取ること事は出来なかった。冷静に、しかし確かに祖父は

そう言った。アイの身

体に一瞬で鳥肌が立つ。それは、父を失った恐怖と、それを何でもないかのように話す祖父への怒りからだった。言葉が、出ない。

「おじいちゃん……。本当？　ねえ、お姉ちゃん！」

アイは、マユの言葉で我に返った。マユはテーブルの上に膝立で乗ると、そのままアイ

に向かって来た。テーブルの上の食べ物は踏まれ、床に落ちていく。それに目を留める者

も、注意することもない。

「あたし……。確かめてくる」

確かに、アイは最近の大人達の様子から、何かが起こっていることを感じていた。アイ

が砂浜に近づくことにも、やたらと煩かった。だが、そこにダリアが関係しているかは教

えてくれず、アイも聞かなかった。それは、ここなら絶対に安全だと分かっていたからだ。

「やめなさい」

次に祖父が発した言葉はさらに短く、冷たかった。思わず目を遣るも、祖父はまだ目を瞑っていた。合わせたくないのだろう。それがまた癢に触る。

「どうして……？ あたし、分からないよ。この目でダリアを確かめるんだから」

アイは、祖父に食ってかかった。マユは、いつの間にか涙を流し始め、そんな二人のやり取りをテーブルの上で聞いていた。泣いたって仕方ないじゃない……。自分も泣き出したい思いを押さえ、アイは唇を噛んだ。泣いたら負けだ、心の中で誰かが告げる。今までダリアの存在は聞いていたが身近で死んだ人間はいなかった。だからこそ、アイも危険だと知りながら、砂浜に行くことがあった。そこまで恐怖が現実的ではなかったのだ。それが一気に迫り、突きつけられる。今、こうしてここにいることさえ不安になる。

「実はなあ。しばらく前から、ダリアは海に侵入しようとしていたんだ」

祖父がため息を漏らしながらも告げた内容に、二人は息を飲み、窓の外を確認した。まるで、いまにもダリアがガラスをつき破り襲いかかってくるようだ。それを見たのだろう、祖父は首を軽く左右に振った。孫を安心させるためか。

「大丈夫だ。まだここまでは来ていない。あいつらは肺呼吸しかできないのだろうね。しかし、いつかはここにも来ると分かっていた。人間が進化するように、あいつらもただ生きている訳ではない。獲物は海にいるのだからね」

「お父さんは……なんで」

アイが放った質問に、マユは顔さえ上げようとはしない。信じたくないのか、受け入れられないのか。先程までの勢いは無く、その肩は落ちていく。大丈夫、そんなきれいな事投げかけられるほど、アイも父親の生存は信じられなかった。ダリアはそれほど強大なイメージを持つ。

「随分前、雨の日にも同じように出て行った。だが、その日

雨の中を数匹のダリアが動いていたそうだ」

「えっ！　じゃあ本物を……」

「見たんだよ。お父さん達はな。しばらく眠れなかったらしいぞ。昔は大きくてもメートルくらいだったらしいが、今や人間や他の生物を食べて成長することで、直径三メートルほどらしい」

三メートルと言えば、マユとアイの身長を足しても足りないのだ。先程の震えが復活する。両腕を自分で抱えるようにして押さえても、それは止まらない。

「そんな……そんな」

「だから、お父さん達は駆除しようと計画して、雨の日に少しずつ実行していたんだ。奴らが動けない時を狙ってた」

「知らなかった……。じゃあ今日も？」

「そうだ。だが、今日のは少し大々的な物だったらしい」

「どうすればいいの……。ねえ、おじいちゃん。あたし達に何が出て来ると思う？」

アイは祖父の両肩を掴み、強く揺さぶった。祖父はテーブルの一点を見つめながら俯くと、ただ無言で首を横に振った。そう言われることは分かっていた。それでも、感情が堪えきれない。酸素は循環しているはずなのに、急に息苦しくなってきた。

「あたし……お母さんに言ってくる！」

「待ちなさいっ！」

アイは居たたまれずに、祖父の制止を振り切り、母親が行ったはずのカレイの広場へと向かおうとした。

「お姉ちゃんっ！」

家を飛び出すと後ろから妹も追いかけて来たが、アイは振り返らなかった。広場には、

いつもは綺麗な魚も集まるのに、今日はその姿がない。やはり、どこかおかしいのだ。集

落人間はかなり集められているようで、人だかりが出来ている。他の集落では、どのよう

に生活しているかは定かではない。どう生活しようが興味もなく、連絡をとる手段がなか

ったというのが、実際の話に近いかもしれない。行動範囲は集落で決められて、海の中と

はいえそれほど遠くまで冒険したことなどないのだ。

「お母さん！」

アイが、その中心辺りにいる話し合いで顔を歪めている母親に叫びかけると、彼女は驚いた顔をした。すぐに軽く頷くと、輪を離れてアイの元に近付く。覚悟を決めているようだ。その真剣さがアイに伝わる。海も人の感情を理解しているのか、いつもより濁っているように感じる。

「お母さん。おじいちゃんに全部聞いたよ。お父さん達はどうなるの？」

「アイ。いい？ よく聞きなさい。お母さん達と一緒に逃げるわよ。家に戻って、おじいちゃんとマユに伝えなさい」

母親は、家を飛び出したときの弱々しさもなく、力強い声でそう告げた。父親のことは、もう諦めてしまったのだろうか。アイは、その強さが今は齒がゆかった。どうして、そんなに強くなれるのか。もっと、父親の心配をしたかった。しかし、それは許されない。

「お母さん……」

アイは初めて泣きそうになった。母親に抱きしめて貰おうと、手を伸ばし掛けた時だった。

「名波さん！ もう一度確認するから来て」

隣の奥さんが母親に呼び掛けたのだ。母親も振り返り、戻ろうとする。瞬時にその片腕を掴み、引き寄せる。

「待つてよ！ お父さん達を見殺しにするの？」

甘えたい気持ちが認められず、突き放されている気がした。それが、一瞬の反抗的な態

度に変わる。そうすれば、母親の視線は自分に向けられると思った。

でも、こんなことを

言いたいんじゃないんだ。黙って抱きしめ、頭を撫でて欲しいだけだ。しかし、もう遅か

った。アイの放った言葉が母親の表情を歪めた。

「見殺し……？」

母親は呆然とアイの顔を見つめる。その傷ついた顔が小気味よくてもっと言ってやりたくなる。

「そうじゃない。だって、助けに行かないんでしょ？ お父さん達は、あたし達を守る為に奴らと戦いに行った。それなのに」

アイは最後まで言う前に、頬に衝撃を受けた。顔は横を向き、頬はじんじんと痺れたように痛む。その時、叩かれたのだと分かった。

「お母さん？」

母親は自分の手の平を驚いたように見つめながらも、次の瞬間にはアイを厳しく見返し、続けた。

「馬鹿なこと言わないで頂戴。お父さん達の次には、今度はあたし達母親が家族を守らな

きゃいけない番なのよ。あんたもお姉ちゃんでしょ、しっかりしなさい。早く帰って」

アイは涙ぐみながらも、何も言えなかった。まただ。母親はいつも父親に頼り切りで、

自分から意見を言うことはなかった。ニコニコと笑うだけで、しっかり者とは程遠い女性

だった。それが、時にアイには憎たらしかった。だが、その懐かしい姿はもうない。

「信じられない……」

アイはもう一度母親を睨み付けると、家の方向へと泳ぎだした。身

体が重い。後ろを振

り返らなくとも、彼女がもう自分を見ていないことくらい分かった。それならば自分も同

じ気持ちだ。アイに付いてきた妹だけが、陰から二人のやりとりを見つめて、佇んでいた。

岩陰に隠れていた妹に、アイも気づかなかった。

一度家に戻ったアイは、台所にあるケース入りの刃物を何本か確かめると、再び家を出ようとした。

「アイ、どこへ行く」

祖父の鋭い呼びかけが耳に刺さる。答えることが出来ずに黙っているアイに、祖父はそんな気持ちも分かっているのか、それ以上問いつめることはしなかった。

「きっと今日移動するぞ。すぐに戻るのだ」

祖父も、まさかアイが陸地に行き、一人でダリアに対抗するとは思っていないのだろう。

アイとてそんな気持ちはない。大人が集団でできなかったことを自分一人で行うと思う

ほど子供ではない。ただ、父親を失うかもしれない今、ただ逃げるという選択はとれなかつただけだ。何かをし、どこかへ向かいたかった。それは自分だけの満足のためかもしれない。

後に、何もできなかった自分に後悔しないように。やれることはやったんだと、自分を慰めるために。だから、行くしかない。アイは、祖父に返事をする

こともなく家を後にした。

家を出てから、あいはナイフをぎゅっと握りしめた。とりあえず陸地に向かって黙々と泳ぐ。雨は完全に上がってしまったようで、水

面を打つ雨音も聞こえなかった。アイ達の家のある沖から、陸地向かって半分くらいが過ぎた頃である。アイは、必死で泳いできたので気づかなかったが、背後に気配を感じた。首をひねり後方を見ると、そこには想像していなかった者がいた。

「マユっ！」

妹の姿を発見し、アイは泳ぎを止めて、妹が追いつくのを待った。その小さな身体で、

アイを追いかけてきたのだから相当大変だったはずだ。マスクの中は吐く息の量が多すぎ

て水滴が付着している。それでも、妹と一緒にいることは間違いだと思った。大人といな

いのは危険すぎる。どうして、誰も分かってくれないのだ。自分の気持ちも、行動も。

「あんだ、どうしてこんなところにいるのよ。おじいちゃんと待っていないきや駄目じゃないの」

語気が荒くなるのは仕方がない。アイの隣まで泳いで来たマユは、無言の上に反抗する

ように頬を膨らませ俯いた。

「だってお姉ちゃんが一人で行っちゃうから……」

マユは、我慢することをやめたかのようにまた泣き出した。そしてアイの手首を掴んで

離そうとしない。その時だった。身体に振動が伝わる。地面が揺れているときは、波だけ

でなく、足に揺れがくる。今は、波だけだ。そうになると、どこからか大きい魚が向かって

来るようだ。……何だ。一気に緊張が走る。まだ泣いているマユを、自分の胸の中に引き

寄せ抱きしめながら、アイは身を隠せる場所を目で探した。波の動きは、向かってきてい

る。これが、普通の魚であればそれでいい。ただ、今はそうとも限らない。前だ。陸地の方角から来る。右側に大きめの岩があるのが目に入り、急いでマユを抱いたまま移動した。

水の動きがだんだんと早くなる。かなりのスピードで動いているようだ。マユの掴む力は

増し手首に指が食い込む。胸に顔をうずめているが、泣いているので肩が小刻みに震えて

いた。波には気づいていないのかもしれない。ただ片手で夢中に妹の頭を撫でながら、ア

イは来るものに備えて小型ナイフを取り出した。顔を岩陰から顔を出したとき、それはい

きなり目の前に現れた。あまりの驚きに声を上げそうになるが必死で堪え、マユが見ない

ようにその頭を自分の胸へ押さえつけた。マユはもがいているようだが、今はそんなこと

言っていられない。無意識に腕にも力が入り、少しでも抜けば、自分が倒れてしまいそう

だった。

きつと、あれがダリアだ……。

祖父が言っていたとおり、全長三メートルはあろう茶色の生き物が、もの凄いスピード

で沖を目指して泳いでいく。目の前を通ったのは一瞬で、次に見た時には通り過ぎていた。

初めて見たダリアは、この世に存在するとは思えないほどの様相をしていた。陸上の生

き物を殆ど知らなかったアイには、驚きの一言だった。目玉が……ギョロギョロと動いていた。短い手足が、水をかいていた。それな

のに、なぜあんなに早く進めるのだ。みんなが、家族が危ない。彼らは奴らが向かっていることを知らないのだ。

「マユ。お願い、ここにいて。じつとこの陰に隠れているの、出る？」

理由も伝えず真剣な顔でそれだけ言うが、マユが従うはずもない。ただぎゅっとアイの

胸に顔を埋めたまま、その首を左右に振っている。ダリアが通ったことによる波は静けさ

を取り戻し始め、それが余計に家族の不幸を呼ぶ証となる。アイは、マユをそっと離すと

真正面から見つめ正直に話すことを決意した。自分の妹だ、弱いはずがない。

「マユ、今、ダリアが通ったの。沖に行った」

はっと息をのんだマユは、沖を振り返るとすぐにアイを見上げた。顔に不安と恐怖の色

が浮かぶ。彼女にも予想外なのだ、こんなにも早く。

「お姉ちゃん。でも、本当にそれってダリア……？」

確かにそうだ、初めて見たのだからその質問も頷ける。アイでさえ同じ事を自らに問い

かけた。しかし、伝聞や本に書いてあったことの通りなのだ。その形相が。

「分かるよ。だって、お姉ちゃんはずっとダリアについて本を読んで勉強していたんだよ」

「こわい……。でも、一人も怖い……」

「じゃあ、ゆっくり行こう？」

「待って、勇気がでない。ちょっとだけ待って」

こんなところで迷っている時間はない。アイは、だだをこねている妹の腕を半ば強引に引っ張ると、家の方角へと再び泳ぎ始めた。だが、泳ぎ始めてすぐに、海の水の色が目の前でどんどん変わっていくのを二人は見たのだ。流れる幾筋もの赤い液体が、泳ぐ二人のまわりを漂い、すれ違って流れて行く。それが、何かは気づかない振りだ。

「お姉ちゃん……これ」

マユは、手を伸ばしその液体に触っている。

「やめなさい」

思わずマユを叱咤したアイには、それが何を示すか分かっていた。マユは、身体をびくつと震わせ手を引つ込めた。これから液体の原因となるであろう現場に向かうのは憚られたが、確認しなくてはならない。暴れる心臓を抑え、いつ来るかもわからないダリアを待った。生き延びた人はいるのだろうか。いや、さっきのダリアだけではなく、また陸地から来ることはないのか。海ももはや安全ではない。妹を連れて何が出来るというのだ。考えれば考えるほど困難なことだけを確認することになる。不安になり、全身に鳥肌がたった。家のすぐ側まで戻ってきてから、一度危険がないことを確認するためにも岩陰に隠れた。そこは海草に覆い隠されるほどで、周りからの死角になる。ぎゅつと目を瞑ると、今の状況から少し耐えられる気がした。一時の逃げでも、この不安を取り去れるなら、むしろ誰か自分を食べて殺してくれないかとさえ思えた。

しばらくすると、アイは腕を引つ張られ目を開けた。目の前に真っ青な顔をしたマユの顔がある。マユは姉と目が合うと、すぐに視線を上に向けた。それを追って海草の隙間から上を見ると、ふかふかで流れるような茶色い毛があった。それは動いていて、いくつもの至近距離を通り過ぎていく。身体の上部にあるはずの目玉は見えなかったが、短い手足や体長から、ダリアだとすぐに気づき、アイの身体が一気に硬直した。マユも腕の中でぶるぶると震えていて、安心させるためにきつく抱きしめた。目を開いてから数えただけでも、ダリアは十匹ほどいた。奴らに気付かれないかを恐れたが、奴らはまた何かに突撃するように泳いで行った。ダリアが完全にいなくなったようなので、アイはそれらが消えた方向に目を凝らした。しかし、姿はすでに見えず、かろうじて気泡が漂うだけだった。

「お姉ちゃん。あれが、ダリア？」

アイは頷くと、再び刃物を取り出した。二本持っていたうちのー

つをマユの服のポケットに入れる。この子はあたしが守る。でも、
守りきれないときは、自分の身は自分で身を守りなさい、という思
いをこめて……。

3 絶滅危機

アイとマユが家に着くと、そこはすでに家とは意味を変えていた。二人の石で出来た家は瓦礫と化し、全てが割れ破壊されていた。何軒か並んでいた集落の家も全て同じで、今までは邪魔だと思っていた建物がなくなり、遠くまで見渡せることが、却って薄気味悪かった。また、残酷なことに二人を迎えたのは温かい母の手ではなく、誰のかも分からないような身体の一部だった。アイ達は、特殊なピアスを耳につけていることで、水中を浮力関係なく移動できている。ピアスがあつてこそだ。ピアスの効力を失ったダリアの食べ残しの一部は、楽しみに泳ぐ魚のように水中を浮遊しているだけだ。

「お姉ちゃん……。お母さんは？」

その一言が、アイを現実に取り戻す。確かめ合うことでそれは現実になってしまう。しかし、この状況ではまだ分からない。母の物があるわけではない。だが、奴らから逃れることなど出来たはずがあるか。希望を持たせ、後で突き落とすよりはマシだろう。

「死んだんだよ」

「おじいちゃんは……？」

「分からない」

「分からないの？ 私達どうなるの？ みんな死んじゃったの？」

お母さん、おじいちゃん、お父さん……」

アイは、同じ事を何度も言うマユを隣に頭がおかしくなりそうだった。父親のことを聞き、祖父を置いて家を出た。母親に盾ついたダリアとすれ違った。のこのこ戻って来たら、この有様だ。どこから間違っただ。何をすべきだったのだ。大人しく母親達と逃げべきだったのか。いや、そうしたらアイもマユも死んでいただろう。二人は家族の死体を探す気にもなれなかった。アイはただ立ち竦み、マユはうずくまって泣いている。アイの目の前を、食べ残されたどこかの指が流されていく。足元では、ピアスのついたままの

耳が一つ落ちている。マユが顔を伏せているのは、見たくないからだろう。アイでさえ認めたくない事実。まだ子供のマユには受け入れられなくて当たり前だ。いつもは強気なマユも、かなりの衝撃を受けたことだろう。アイも、立ち上がる気力が水に溶けてしまっているように地面に座り込んだ。

と、そのときだ。視界の隅に二つの銀色の輪が目に入った。近寄って、少し砂に埋もれたそれをはたきながら取り出すと、見覚えのある、プレスレットだった。

「マユ……これ」

アイがそれを目の前に差し出すと、妹はおずおずと顔を上げプレスレットを見た。途端

に、アイの手から引ったくる。

「お母さんのだ！」

それは、母親がいつも身につけている物だった。結婚するときに、父親とペアで手に入

れたらしい。普段アクセサリーをつけたがらない父親の分も、母親が身につけていた。そ

れを付けて笑う母親が、目の前に浮かんでは消える。

「マユ……。お母さんも食べられちゃったんだよ。だけど、これをあかし達に残してくれたんだよ、きつと」

マユはそれを顔の前で握りしめたまま、祈るように動かさない。

「だから、今度は、あかし達が付けていよう。これを付けていれば、お母さん達と一緒にだよ」

マユは、それを離そうとはしない。

「マユ、二人でつければ、あかし達もいつも一緒みたいじゃない？」
そこまで言うと、マユは一つをアイの方へと差し出した。

「一緒？」

アイは、それを受け取り自分の腕にはめながらしっかりと頷いた。
これからは、二人で

やっていかねばならない。母親に見守られているようであり、戒め

て欲しい。ブレスレツ

トが、背中を押してくれる気がする。

「そうだよ、もし何かがあって離れても、お姉ちゃんが探しに行くし、助けに行くから」

「うん……」

マユは、両手でごしごしと目を擦った。そして、無理をしているのだろうが、かろうじ

て微笑もうとした。だが、アイには何をしたらいいのか分からない。戻るべき場所があっ

たからこそ、飛び出せた。そこが無くなった今、どこかへ行くあても勇気もないことに気

づかされる。夜になってきたので、一旦隠れられる場所を探して休むことにした。ただ、

この辺りは危険だし、人肉のかけらも漂っているので、ひとまず砂浜に近い岩場へ出るこ

とにした。沖にダリアが来ているのだ。もうどこにいても変わらない。それならば、海に

いるよりも解決策に繋がりそうなところに行きたかった。マユもアイに黙って従った。母

親を思い出すところにいるのが辛かったのかも知れない。そうして二人は、お互いに涙を

流しながら浅い眠りについた。

目が覚めると、水中は明るくなっていた。浅瀬であることもあり、光は良く入る。アイは周りを見回すが、マユは何事もなかったように安らかに眠っているし、海も平和に見える。ただ、いつもは小魚が泳ぎ珊瑚礁が踊っているのだが、その姿は見えない。それが、昨日の事態を改めて思い出させた。昨日腕にはめたブレスレットを握りしめると、あいはこれからどうするか考えた。マユの頭を撫でながら見つめていると、何かの気配をまた感じる。

ダリアか。一瞬で恐怖が身体を包み、身構える。と、背後に人影

を感じて振り向こうとした瞬間だった。アイは、何者かに口を塞がれたのだ。それは素早い動作で、マスクを外され口を覆われた。ダリアのはずがない。少しでも視界に入る手は間違いなく人間のものだ。温かい。その温かさが、家族を失ったアイには懐かしく傷つけられなかった。歯で噛みつくことも出来たはずなのに。口を押さえられて息が出来ずに苦しい。手で藻掻きながら腕をはずそうとするが、がっしりと捕まれてしまっている。その腕はたくましく、男のものだと感じる。足元にマユが寝ているが絶対に手を触れさせたくない。アイは、自分だけで済むならと全ての抵抗をやめた。すると、男の手力も少しゆるんだが、引きずられるかたちで、アイは後ろへと歩かされる。……殺される。思い出したように、刃物を取り出すそうとすると、それを相手に悟られたようですぐに奪われてしまった。

「静かにするんだ」

耳元で囁かれ、身体に緊張が走る。水中で話せるということは、相手もマスクをしている

ということだ。仲間なのか。海に、まだ生き残りはいたのか。

「う……うっ！」

声を出したいのに、押さえられて出せない。首だけ無理矢理後ろへ向けると、ちらっと

一瞬顔が見えた。と、思った瞬間、お腹に衝撃を感じ、アイの意識は遠退いた。

次に目を覚ました時、アイを覗き込む二つの顔があった。それはよく知っている大事な顔ともう一つ。なぜ二人が仲良く並んでいるのか。マユは何もされていないのか。アイは勢いよく身体を起こすと目の前に座って自分を見下ろす妹の肩を掴んだ。空はよく晴れている。こんな時に陸地にいたら危険である。一番にそう考えてから、それが愚弄であることに自分でも気づかないほど大きく打ちのめされる。どこへ逃げればいい。その答えが出ないまま、昨晩は寝てし

まった。

「大丈夫？ 怪我はない？」

マユの頭から腰にかけて、上から順番に撫で回すように触る。どうやら無事のようなのだ。

それよりも、自分の身体に鈍く残る腹の痛みに意識が行く。そういえば、腹を殴られた。その犯人が誰かに思い当たり、視線が鋭くなる。

「俺は何にもしてねえよ。お前が暴れるからだ。こんな刃物まで出しゃがって」

マユの隣にいる男が、それを証明するように両手を上げた。男は、アイの突きつけよう

とした刃物を自分の頬にぴたぴたとくつつけながら笑っている。切れ長の目には、優しさ

と呆れが含まれているように見える。その顔に見覚えなどなく、アイはマユを守るように

背中に隠した。

「あ…… あんた。誰」

アイは、警戒する目で男を睨みむ。だが、マユはアイの背中から出てこようと身体を動

かしている。アイに阻まれそれが無理だと分かったと、今度は口で意見を述べる。

「お姉ちゃん、大丈夫だよ。この人は助けてくれたんだよ」

マユの言葉を受けても、男はただじっとアイを見つめている。その視線があまりにも真

っ直ぐでアイの方が先に逸らしてしまった。海の中で、アイと同じ年頃の男は集落にはい

なかった。急に目の前の男が異性であることを意識してしまう。それはマユの男が「助け

てくれた」という助太刀の影響もあった。周りを見るとすでに浅瀬からも上がっている。

こんなところにおいては危険なのではないか。今更ながら不安に駆られる。その後で、こんな

な弱い気持ちで、刃物を持って何をするつもりだったのだと自分を呪いたくなる。だが、

頭で判断するより、身体が恐怖を覚えている。あの黒い物体を見てしまった。自分が生き

ていることさえ不思議だ。アイが目泳がせると、男は言った。

「どこに逃げようと同じだ。沖はもう安全じゃない」

まるで、アイの心を読んだような言葉に思わず眉間に皺が寄る。男は軽いため息をつき、

隣から見上げるマユの頭を撫でると、アイに刃物を返す。立ち上がり、男は服についた砂を払い落しながら冷静に続ける。この男が何者か分からない限り、アイは信じるつもりはない。だが、マユは妙に男に懐いているようだ。初めて砂浜に降りたことに感情が高ぶっているのか、それとも他に理由があるのだろうか。

「お前達も見ただろう？ 昨日、ダリアの襲撃を」

「あなた、どうしてそのことを……」

「俺達は、ずっとお前の集落を含めた海人を監視していたんだよ。昔からな」

うみびと……。アイには何のことか理解できなかった。ただ、監視という単語に不快だということだけ以外は。

「なにそれ、気持ち悪い……。いつからそんなことをしているの？ どうして？ あなた

の家はどこなの？ 別の集落？」

どうしても不快さと共に沸き上がる不信感。アイが知らないのに、この男はアイやその家族のことまで把握しているというのか。何のために。どうしても近付きたくない思いか

ら男を睨み付ける。敵か味方を判断するとしても、まだ早い。手の

中に戻されたナイフに

力を込める。

「俺は、幸太。加賀幸太」

「加賀……幸太……？」

アイにはなぜかその名前を知っているような気がした。だが、数少ない親戚や、集落の住民にも加賀という名字を持つものはいないはずだ。ただ、胸の中につかえるものがある。しかし、それが何かは分からずに、黙るしかない。

「なんだよ。珍しいか？」

男は、怪訝そうにアイを見ると、頭を掻いている。今まであんなに上から物を言っていたのに、アイがじっと見つめた途端に落ち着かない。おかしな人だ。

「別に」

分からない。だからこそ、考えるほどのことではないのだろうと自分に言い聞かせ、冷たく吐く。

「で、俺の家は陸地にある。つまり、あっちだ」

「陸地？」

アイは衝撃で開いた口が塞がらなかった。まさかまだ陸地に住んでいる人間がいるとは

思えなかったのだ。人間はみんな海に逃げたのではないのか。怪しい。もしも、陸地に住

んでいるなら、少なからず読んだ本、そして両親が教えてくれたはずだ。周りが間違いを

教えてきた。いいや、そんなはずはない。育ててくれた親が、数分前に会ったこの男。信

じるとすれば、自ずと答えは出ている。

「お兄ちゃん、陸地に住んでいるの？ 本当！ 凄い。陸地ってダリアがいるんですよ。」

食べられないの？」

マユは、驚きで目を丸くしながらの質問攻めだ。幸太は、そんなマ

ユに笑いかけ、その
ぷつくりとした頬を軽く抓むと怖い顔をした。

「普通は怖いんだぞ。でも、お兄ちゃんは毎日戦っているのだ。それに、この通りかっこ

いいから怖い物なんてないのだ」

男の言葉に、マユはきやつきやつと声を上げて笑う。昨日はあんなに消沈していたマユ

が笑っている。実際、アイはマユが起きてからどう元気づけようかと心配していた。ここ

まで笑うことが出来るなら、少しは安心して良いだろう。この男は、マユに何をしたのか

と不思議で仕方がなかった。その役目を担うのは自分だったはずなのに、それを横取りさ

れたことに多少の嫉妬さえ覚える。それが剣呑な言葉となって表れる。

「馬鹿なことを言わないで。陸地になんて住めるわけがないでしょ」
これでは昨日と言っていることが姉妹で真逆である。男はさらに呆れた顔をしながら、

溜め息を吐いてからアイに説明し始めた。

「俺達はある組織で働いている。海には逃げなかった部族なんだ。

未だに水が嫌いな奴も

いる。研究する目的で残った者もいる。海に行った種族と同じくらいが、陸には残ったんだ」

「嘘よ……。そんなこと聞いたこともない……」

アイは疑いの目を向ける。しかし、マユは男に構って欲しそうにその大きな背中におぶ

さるうとしている。そういえば、マユはこうして父親の背中に乗ろうとしていた。しかし、

今はまだこの男にそんな風に甘えて欲しくなかった。

「マユ、ちょっとだけ向こうで遊んでいてくれないかな」

「え？ どうして？」

マユは膨れっ面を作り、アイを恨めしげに見る。自分だって子供じゃないと主張しているようだが、それはさらに子供らしさを際立たせていた。

「マユちゃん、こんな浅瀬に来たことないんだろ。ここら辺は今ほ安全だから、探検しておいでよ。ただ、俺たちの見える範囲でね」

この男、マユには優しい。そして、扱い慣れているようだ。何者だ。

「うん……。分かった」

男の首に巻き付けていた手をゆっくりと離すと、マユは何度か二人の方を振り返りながら離れて行った。

「で、組織って？」

幸太は立ち上がると、あいを見下ろしながら大きく伸びをした。なんだよ、その話が、とばかりの目つきだが、そのこと以外に話すことなど無い。

「だから、簡単に言うたダリア駆除隊かな。あいつらの研究もしているんだ」

うーっとな唸りながら今度は屈伸を始める。立つてみると意外に細身で背も高い。少し離れた場所にいるマユを見て、頭の上で手を振った。その先を見れば、マユを振り返っている。

「研究……？」

もうマユを怒る気力はなかった。諦め半分でそれを眺め、男に言う。

「そう。あいつらもそれなりに進化しているんだ。昨日の奴らを見れば分かるだろう。それに対抗する武器とか、対策とかも講じなければならぬ」

全く重い話をしているように感じられないほど簡単に幸太は言う。だが、マユをじっと見ている目は澄んでいて、守って貰えているという安心感が、アイの疲れた身体を包んだ。話し方に含んでいた嫌

悪感を、意識的に取り除いてアイは言った。

「ダリアに武器で？ それならなんでこんなことに？」

その声の色を聞き取ったのか、男は一旦動きを止めると、少し困ったような顔で顎の下を搔いた。

「最初から話すと長くなるんだけど……」

と前置きして、アイが頷くのを確かめた後、幸太は話し出した。太陽の高さは時間を追って上がっていく。その光は強くなり、アイの身体にじつとりと汗が滲む。水が恋しい気持ちを抑え、アイは額にかかる前髪を掻き上げた。

「そもそも、最初にダリアが現れた時、人間は三つの選択を選ぶように強いられたんだ。一つは、海に逃げる。二つ目は、死だよ、自殺。精神的に耐えられる自信がない。または、ダリアに食べられることを恐れた。もちろんその時は、海に逃げたからといって生き延びる保証もなかったからね」

「一つ目が、あたし達の種類ね。二つ目も有りそうね。それじゃあ三つ目が……？」

「俺達だよ。まあ、俺達の先祖だけど。主に研究者や、自衛隊っていう軍隊の集まりだったらしい。でも他にも、有志で戦おうとした人もいた。それと、水が嫌いな人種。それで陸地に残った」

アイの中では、陸地に残った人間がいること自体信じられなかった。あんなにも行ってみたいと思っていた、まるで魔法の国のようなどころにこの男は住み、他にも住人はいるのだ。それを知らなかったのはアイ達だけだというのか。いつ、海の人間は陸のことを忘れたのだ。いや、本当に忘れたのだろうか。その疑問が頭を過ぎり、アイの口の中が緊張で乾いていく。やはり自分は、周りに騙されていたのか。

「残ったって……戦うにも、ダリアはもの凄く恐ろしいんですよ。」

一瞬でも姿を見せたら食らいつかれるって」

アイが首を傾げて言う。幸太は少し驚きながら、アイの隣に腰掛けた。

「えっ、ダリアが？ ん、まあそうとも言えるけど、戦う方法はあ
るだろう。現に俺たちは戦っている」

「知らない……。あたし陸地に上がったことないし、海しか知らないの」

なぜだか悪いことをしたような、恥ずかしいような気分になり、
アイは俯いた。何も知らないことが落ち度であるようだ。陸地にい
る人間は、海にいた者を笑っていたのだろうか。弱くて逃げた、そ
の上無知だと嘲っているのだろうか。急に、幸太に抗ったことまで
もが馬鹿みたいに思えてきた。

「いや、君達みたいな集団がいるのも知っていたから。ごめん、余
計なこと言つて。それに……」

幸太は、ハツとして口を噤み、その後を続けることに戸惑った。
しかし、アイの頭の中も最大限に混乱していたために、幸太のそん
な些細な行動にも気づかない。次に続けた言葉は、無理矢理つなげ
たものでしかなかった。

「それに……、俺達は陸地で研究や駆除をしながら、海の中の君達
の安全も管理していたんだ。ずっとね」

「安全を？　ずっと……？」

「そうさ。今までだって、何度もダリアは海に行こうとしたさ。そ
れを食い止めたりしていた。君達の親とかが、陸地に必要な物資を
取りに来た時に、提供したりとかね」

「提供？　それじゃあ、お父さん達はあなた達の存在を知っていた
の？」

やはり答えは決まっていた。アイの中でも薄々確信を持ち始めてい
たことだ。驚きよりも、すでに落胆の方が大きい。その理由も今で
は察しが付く。

「まあ、そうかな。でも、危険でも陸地に住めるといって、行きた
がる子供もいるだろう。そうになると、海に逃げた意味もなくなつて
しまう。言わなかったんだろう」

「そんな……。それなら、どうしてあたし達に声をかけたりしたの

よ」

両親はどこまで知っていたのだろうか。いつかアイに話すつもりでいたのだろうか。両親が知っていたのなら、祖父も知っていたのか。そして、隣の家も……。一生知らない人もいるのだろうか。だから、アイが浜辺に行くのを母親はあんなに嫌がったのだろうか。もし浜辺で歩いている人間がいるのを見れば、アイが黙っている訳がない。

「それはさっきも少し話したけど、君達を監視していた。それは悪い意味ではない。何かあった時のためにだ。最近はダリアが急激に進化をしているのは明らかだった。結局、海は安全ではなくなった。生きている者を迎えに行った。それだけさ」

「監視……」

そのおかげで助かったのだ。それは礼を言うべきものであり、責めるに値しない。それなのに、何か小さな欠点を見つけてなじりたかった。どうしてもっと早く来てくれなかったのだ。家族も集落ももつと多くの人間を救えたかもしれないのに。そう思ってから、それさえアイの都合でしかないことに気づく。人に当たることで楽になるのは一瞬で、すぐに後悔する時が来る。アイはそれを学んだばかりだ。幸太は、そんなアイと離れた所にいるマユに交互に視線を走らせながら続ける。

「こうね、海のなかを見られる機械や乗り物がある。移動できるんだ。いわば、君達は海という大きな水槽に住んでいたんだ」

「水槽……」

「ああ。水槽っていうのは、人間が過去に娯楽のために魚を入れて飼っていた透明の箱のことさ。水族館という施設もあったんだ。まあ、家に来れば資料も多くあるから見てみるといい。俺からすれば馬鹿げた話だ。どうして、あんなところに魚を閉じこめておかなければならないんだ。お前達も檻の中で暮らせるのかってね」

「水族館……」

次から次へと聞かされる新しい言葉に、アイは付いていくことが出

来ない。しかし、彼女の中で沸くのは、不思議と先程の知らないこととの恥ずかしさよりも、それがどういう物かの興味へと変わっていた。それが大事な者達を失ったことを、一時でも忘れていたいという心の動きから来るものだということを、アイ自身は分かっていたなかった。

「まあ、すぐに全部分かれとは言わない。無理だろうしね。君以外にそういう子もいる」

「君以外……？」

アイはそれを聞いてハツとした。たった一つの可能性を奪われた訳ではなかったのだ。

海の中に浮いていたあの手は、家族のものとは限らない。それに、家を出たままの父親も

救助されているかもしれないのだ。アイは、男に飛びつくように掴みかかった。髪から水

滴が背中に落ちる。それもすぐに乾いてしまっただけで気温は上がっているようだ。

「誰か！ 誰か他にも助かっているの！」

「あ……、ああ。何人もな。陸地のラボ裏に保護しているよ。君達もそこに来てもらう。」

もしかしたら知り合いがいるかもな」

「ラボ……？」

「ああ、ラボラトリー……研究所だよ。安心だ。ピアスもマスクも必要ないから」

そんなことはどうでもいい。アイは両親が保護されているのではないかと期待した。い

や、そうに違いない。アイはすぐにでもそこへ行きたくなくなる気持ちを抑えられなかった。

だが、そこが安全だとは決まっていなかった。マユを巻き込んでもいいのだろうか。守り抜く自信が完璧にあるわけではない。

「とりあえず、これくらいでいいかな。あとは、ラボに行つて俺の仲間にも会つてみてよ。」

おそらく……もう海には戻らないだろう」

そう言つと、幸太は周りを見ながらマユの姿を探した。マユは岩陰で穴をつつきながら

遊んでいたが、幸太が手を振ると笑顔で駆け寄つてきた。その笑顔を見て、アイは急に進

む事態に焦りを覚えた。このままでは、この男の言うとおりに物事が動いてしまう。どこ

へ行くのかも、陸地が本当に安全なのかも分からない。

「ちよつと待つて。あたし、陸地に行くのを認めた訳じゃない!」

幸太は寄つてきたマユを抱き上げると、澄ました顔でアイを一瞥した。マユも驚いたよ

うに目を見開きアイを見つめている。その手はしっかりと幸太の腕を掴んでいる。妹は本

来アイの側にいるはずなのに、なぜか相手が優勢になっていることにまた嫉妬する。だが、

幸太の言うことはもつともなのだ。

「それじゃあさ、ここでダリアに食われるのを待つ? それとも、一人で戦うの?」

痛いところを突かれ、アイは何も言えなくなつてしまった。最早選択肢など存在しない。

周囲を見渡すも、この男以外に今アイを助けてくれそうな人は見当たらない。この瞬間に

ダリアが現れたとして、戦えというのか……無理だ。マユを抱いたまま歩いて行く幸太を

アイは駆け足で追いかける。こんなにも水から離れたことはアイには初めてだった。少し

歩いたところで、海を振り返る。自分が生まれ育つた場所。今、そこから飛び立たなければ

ばならないのだ。水に触れていない砂は、足に触れても柔らかい。サラサラとして気持ち

のいい感触が、足の裏をくすぐる。昨日の雨が嘘のように空は真っ青に晴れていて、海の

底から見る空とは格段と違う世界が目の前に開けたことに、アイも少なからず興奮する。

「じゃあ、とりあえず車でラボまで行くから。皆に紹介するし」

幸太が海岸脇の駐車場に止めてある車を指差しながらアイ達に言ったが、二人には理解

できない。あー、と大きく自分の額を叩くと、幸太は苦笑いで言った。

「あ、車ね。歩かなくて平気だから。それと、ピアスとか取って。マスクもいらないよ。」

陸地じゃおかしいからね」

二人は、幸太に言われるままにそれを取る。マスクはすでに外されていたが、捨てる事

は出来ない。幸太がマユを下ろすと、彼女はアイにそれらを託した。「後は服だな。濡れているし。まあとりあえずラボで着替えよう。

車は濡らさないように、毛布にくるまって」

言いたいことだけを確認するように述べながら、幸太は二人を車へ導いた。そこから毛

布を二枚取り出して、放り投げるようにして二人に渡す。そして、すぐに幸太は後部座席

のドアを開き、二人の背中を押して中に座らせた。「お姉ちゃん、平気かな」

マユは先程までの元気が嘘のようだ。心配そうにアイの顔を見上げている。この得たい

の知れない乗り物が怖いのだろう。そして未知の世界に行く不安。今はこうするしかない

のだ。アイはその質問に答えずに、マユの手を握りしめると微笑も
うと努力した。幸太は
二人が座ると車のドアを閉め、運転席へと収まる。すぐに車が小さ
な音を出しながら振動
する。

「わ！……わっ！」

アイがその動きに驚き立ち上がったが、頭を天井にぶつけ、悲鳴を
あげてまた元の位置

に戻った。マユは、そんな姉を横目で見ながら、あちこちを触り続
けている。幸太はそん

な二人を振り返り、苦笑いをして言った。

「えーっと、それじゃあ出発ね。とりあえず今日は晴れていて、い
つダリアに襲われるか

分からないから、念のため気を付けてね」

急に身体が浮いたような感覚と共に、後方へ引っ張られる。それで
車が発進したことが

分かり、アイの口からひつと悲鳴が漏れる。

「あ、あとシートベルトつけて。死にたくないならね」

幸太が、後ろをみることなく自分のシートベルトを引っ張りながら
告げる。

「どれ！」

動き出した乗り物への不安感で、アイは益々パニックに陥る。勝手
に動いている物で、

自分が移動しているなど信じられないのだ。冷静でいるマユがすぐ
に自分のを設置しアイ

に手を貸した。幸太がバックミラーでそれを確認し、再びため息を
ついた。これでは、ど

ちらが姉だか分からない。

「二人とも。もう少しスピード上げるから、掴まって」

幸太が言うと同時に、さらにアイの身体はぐんっと後ろに引っ張ら

れる。車の窓から見

える四角い景色はみるみると変わっていく。それを見てみると、額の辺りがクラクラとし

てきた。これでは、歩いた方がマシだ。だが、マユは違ったようである。窓に両手と顔を

くつつけるようにして楽しげに眺めていたかと思うと、突如悲鳴にも似た声を上げた。

「お兄ちゃん！ 左！」

マユの声がアイの耳に入った瞬間だった。ギョルルルと耳をつんざくような音が響いた。

車の下で何かが擦れたようだ。アイは咄嗟に目を瞑った。すぐに、また振動が伝わる。今度は左側に何か液体がぶつかる音がした。

「おい！ 大丈夫か！」

幸太が後ろも見ずに声を張り上げる。アイが両目を薄っすら開くと、猛スピードで進む車のフロントガラスには、正面から突進してくるダリアの姿が目に入った。海で見た時とは少しだけ様子が違う。海の時は、長い体毛が流れるように後ろに向かっていた。しかし、今はそれが地面を這うように体中を覆い、とてつもなく大きな毛だまりのようだ。そして、その上に乗った団子のような目玉。それが、アイたちの乗る車を一点に見据えている。その親玉の脇には、数十匹の子供が群がっている。どれも親玉より小さいが、各々の動きは目で追うのが難しいほど俊敏だ。彼らの毛が、大きいのと違って逆立って見えるのは、興奮しているのかそれとも毛が固いのだろうか。どちらにせよ、決断して可愛いとは言いがたい物である。

アイはそれらを見た途端、押さえきれずに絶叫する。座席の上に両足を抱えて縮こまりながら、なるべく小さくなるうとした。どうしても恐怖が先立つ。隣で、車の中ならば安全と高を括っているのか、騒ぎもしないマユの身体を引き寄せると全身で守ろうと抱きしめた。そして、妹の耳元で悲鳴を上げる。マユは無言でアイの胸の中から出ようと藻掻いている。それを押さえ、またきつく抱き悲鳴

を上げる。その間も、車は右、左と予想もつかない動きを見せるのだ。それに合わせて後部座席の二つの身体が揺れる。

「うるさい！」

ついに幸太が一言怒鳴ると、今度はハンドルを勢いよく右に切った。だが、アイが見る限り前からくるダリアは振り切れそうもない巨体が飛びかかるようにして車に向かって来ているのだ。それは車の倍はある大きさで、奴にぶつかられたら助かるだろうかと不安になる。どうやって喰われるのだ。やはり、陸になど上がらなければよかった。考えただけで身体が震える。死ぬ……。アイが、また目を瞑りかけたときだった。車まで数センチに迫っていたダリアの身体が真つ二つに裂け、四方に飛び散ったのだ。

「なに！　なんで！」

「前！　前見てみる！」

アイの叫び声に、自然と幸太も叫び返す。さらに車のスピードが上がる。次々現れる大

小様々なダリアをかわすのに、車は今や真つ直ぐ進んでいない。道路は大通り、周りを通

る車や人は皆無だが、あわや建物に衝動しそうになる。アイがその激しい動きの中、遠心

力に負けそうになりながら前席を掴み、シートベルトを限界まで伸ばし前を見ると、車の

ライトとボンネットの間に、大きなドリルが回転している。それが見えたと思ったら、ま

た勢いよく後ろに飛ばされ座席に尻餅をつく。マユは座ることを諦めたのか、足下の床に

蹲っている。顔を顎に乗せ平静な顔をしているのだから、アイより楽に思えた。だが、ア

イがそこにはまれるほどもう小さくはない。

「あれは何！」

「ドリルだよ！　奴らは身体を裂けば死ぬんだよ！　だから前に四

つ備え付けてある！」

アイの声に幸太がまた返す。運転に真剣であろう幸太の声は、前より数倍の速さで聞き

逃しそうになる。その名称が分からなかったが、聞き返す度胸はアイになかった。何匹も

のダリアが突進し、ブレーキ音が響く。そして、ドリルによって身体を裂かれたダリアが、

無惨にもある程度の大きさに分裂した固形となって飛び散っていく。

「横から攻められたらどうするのよ！」

自分の座席の窓を確認しながら、アイはまた叫んだ。マユは、二人の声がうるさいのか

今や両手で耳を塞いでしまった。怖がっているのかもしれないが、こう揺れていてはアイが抱きしめてあげることも容易いことではなかった。どこかに掴まっていないと、身体が跳ね上がってしまう。

「それは困るから、こんなに必死に逃げているだろ！ 黙っている！」

あまりの緊迫感に次の言葉が見つからず、せめてもと伸ばした手でマユの手を握りしめた。どうやら震えてはいないようだ。時々、分裂したダリアの破片らしきものが窓ガラスを打ちへばりついた。消化する前だったのだろうか、丸呑みした人間の腕や足が、体内から飛び出してくることもあった。だが、今は車が事故を起こさないことを願うばかりで、人間の手足がおもちゃにさえ見えてしまうことが不思議だった。それに、どうやらダリアはそこまで頭が良くないのかもしれない。何度もダリアは正面からぶつかってきては、ドリルに激突している。脇を攻めるといえるのは思いつかないようだ。

「よし！ 来たぞ！」

不意に幸太は興奮したように叫ぶと、ハンドルの真ん中に付いている赤いボタンを連続で何回も叩いた。それは、怒りをぶつけている、そんな叩き方だ。すると、車内の天井に取り付けられているマイクから男の声が聞こえてきた。どうやらどこか他の場所にいる相

手らしい。

「遅いぞ。幸太。こんなに引き連れてきやがって」

「悪い、色々あったんだ。でも予定通りだろ。早くしてくれ！」

「報酬は？」

「なんでもするから！」

「よし」

その声を最後に、ブツツと通信が切断される音が聞こえた。アイが後ろを見ると、ダリアがそこら中にうごめいている。アイがいた海は、すでに建物に隠れて全く見えなかった。どの建物も、海岸沿いに並んでいた家と同じ形の物が並んでいるが、古びていて人影はない。それもそうだろう。これほどのダリアいるのだ。奴らが暴れ回るからか、建物の壁もあちこちがボロボロに壊されている。と、いきなり車に衝撃が走り横揺れする。車が走り出した時とはまた違った浮遊感に、アイが窓の外を見てまた叫んだ。なんと、車が宙に浮いているのだ。車自体の存在は知っていたが、これが空を飛ぶとは聞いていない。パニックになりかけたアイが窓を叩いていると、すでに落ち着いた様子の幸太が振り返って笑った。

「おい、もう大丈夫だ。お前、やっぱり妹のほうが落ち着いているな」

マユに横目でちらりと見られ、アイはハッと我に返る。マユは幸太と目を合わせ、意地

悪く微笑み合う。またもやどこか二人に馬鹿にされたようで悔しくなる。アイが膨れて窓

の外を見ていると、幸太がハンドルに寄りかかり、全身を後ろに向けて言った。

「まあ、後で出れば分かるけど。今、この車を俺達の仲間が運んでくれているんだ」

幸太はもう全く運転していない。どうやってこの車は飛んでいるのだ。見る限り、何かが接触しているということもない。

「運んでくれている？ どうやって？」

「見えないかもしれないけどさ。この車の天井の両端を金属が掴んでいるんだ。で、安全

な基地、ラボへと運ぶ。昔の人間がやったユーフォーキャッチャーっていう遊びの原理らしい

「なにそれ」

アイが口の中でその単語を繰り返していると、マユが自分で窓を開けた。アイはそれさ

えもどうやったのか分からず呆然と見ていたが、マユがそこから身を乗り出した途端、小

さく悲鳴を上げた。どうやら、マユは幸太の説明に従って天井を見ようとしたらしい。そ

の上半身が外に出たことに驚き、慌ててマユの両足を引っ張り中へ連れ戻す。

「危ないからやめて！」

アイの青白くなる顔とは対照的に、マユは顔を出せないことに不満げに頬を膨らませた。

車はすでに町並みは見えなくなり、森の上空にいる。こんなところで落ちたら、見つけた

せるのかも分からない。マユへも一言文句を言ってやろうと口を開いたが、運転席から漏

れる笑い声に反応し、その矛先を変えた。

「あなたも注意していてよ！ どうして最初……、海の前からこうして運んで貰わないのよ」

ダリアの姿が見えなくなり、ほつと息を吐くと言葉はどんどん口から飛び出していく。怖かった思いを全て消去させるように、アイは幸太に身を乗り出して迫った。

「そこ。原因はそれだ。ラボは、山奥にあるんだよ。人家がある街はダリアに占領されている。そして、このユーフォーキャッチャー

の届く範囲は限られている。ある程度は自力で近付かないと無理なんだ」

自力で近付かなければならないということは、街へも自力で出なければならぬのだ。海の人間の手助けをしてきてくれたと言ったこの男。アイの父親達が、乗り物もなくラボに近づけたはずがない。こうして陸地の人間が出てきたことになる。それだけではない。今朝マユとアイを救うにも、わざわざ出てきてくれたというのか。アイが黙ると、

「お兄ちゃん、命がけでマユたちを助けてくれたんだね」

と、マユが笑顔で引き継ぐ。その一言は地雷でしかない。顔から火が出そうなくらいに恥ずかしくなった。自分の感情が高ぶるとすぐにそれをむき出しにして彼に当たってしまった。アイは、それでもお礼をいうことは出来ず、窓の外に視線を移した。

「お、やっぱりお前、頭いいなあ」

幸太が笑顔で親指を立て、マユに向けて突き出した。その笑顔はダリアと戦っていたのが数分前だとは思えないほど清々しい。そして、押しつけがましくない物だった。この青年はなぜこんなにも色々助けてくれるのだ。もしや父親、いや母親に関わりがあるのだろうか。いや、それならば父親は生きていて、その情報を真つ先にくれるだろう。それとも死んだからこそ、その事実を知らせるために来てくれたのだろうか。そんなはずはない。そこまでは普通しないだろう。

「どうして、そんな目に遭ってまで助けてくれたのよ」

言葉尻がきつくなるのは恥ずかしさの裏返しだ。幸太はそんなことには少しも動じず、

さらりと言ったのけたのだ。

「ああ。これが俺の仕事だからな。それに、冒険がしたかったんだろ。うな、きつと。毎日」

こんな山奥にいても暇なんだぜ」

こんな山奥、と幸太が言う通り、エンジンが切られた車は益々深い

森の中に入っている。

徐々に高度は下げられていき、車内での幸太とマユのふざけた掛け合いがアイの耳にはや

たら大きく響く。自分が何をしているのか、どこに向かっているのか、全く分からなかった。

ただ、目的は分かる。保護されたかもしれない住人を探すのだ。数分後、お尻を突き上げられるような衝撃とともに地面に着地すると、目の前には大き

な建物が存在した。ただでさえ森の中で周りは見えないはずなのに、敷地の周囲をコンクリートの高い壁がぐるりと囲っている。海が少しも見えないことに、アイは不安を覚えた。こんな環境に身を置いたことはないのだ。どれくらいの期間いなければならぬのだろう、と考えてから、海に戻れないかもしれないと言った幸太の言葉を思い出す。急にあの地が恋しくなった。帰り方も全く分からないし、何かあっても逃げられそうもない。この男をどこまで信じればいいのか。お父さん……。家族のことを考え涙が出そうになる。アイは唇を噛みしめると、数秒間息を殺した。うっかり口を開けば、不安と悲しみで泣き出しそうだった。

「おーい！」

車から三人が降りると、赤毛の男が走り寄ってきた。短い髪は全て赤く、背も高い。色

黒の肌は、幸太の白いものよりアイには親近感が沸いた。ただ、首や腰回りにじやらじや

らとついている鎖のような物は、その男の敵ついイメージを醸し出していた。男は笑いな

がら幸太の肩に腕を回すと、アイ達を見て目を丸くした。

「おーいおい。映像よりかわいいじゃないかよ。お前が夢中でダリアと戦うのも分かるわ。」

妹ちゃんもお人形みたいだな」

「馬鹿かお前」

幸太は、赤毛の男の言葉を軽く窘めるとアイの手首を握り歩き始めた。すかさずアイも

マユの手を引く。赤毛は、そんな幸太に慣れているように小走りで追いかけてきた。そし

てアイとマユを交互に眺めている。アイには、どうして自分がこんなに興味を持たれるの

か全く分からなかったし、幸太はそんな赤毛を全く相手にしなかった。ラボは建物全体の

外壁がコンクリートの剥き出しで、その灰色が冷たい雰囲気を持っている。しかし、壁を

伝うようにして何本もの蔓が巻き付いている所もある。窓もほとんど見当たらない。あち

こちに大きい穴があるが、用途は不明だ。入口にある小さな四角いボードに幸太が親指を

押し付けると、両開のドアが自動的に開いた。そのドアも鉄で出来ており頑丈だ。空は、

快晴の一途を辿っているにも関わらず、この建物を囲う空気は重たい。それを、赤毛は必

死で明るくしようとしているようだった。その扉の仕様に驚きマユが目を見つめていると、

幸太が言った。

「嚴重なんだよ」

侵入して来るとすれば、ダリアくらいだ。アイはここまであの生き物が襲ってくるのかと思うと、怖くて海に帰りたくなった。もしもここが安全でないならば、生まれた所で死にたかった。そんなアイの心も読んだかのように幸太が付け加える。

「これはね、人間用なんだ。ダリアに家を襲われた人達は、ラボの後ろにあるマンションに住んでいる。あ、マンションで家が集まった建物ね。疑うわけではないが、念を入れている」

無愛想な幸太に変わって、赤毛が続きを流暢に話す。まるで自慢

するように、胸を張った。細身の身体、筋肉はしつかりついているようだ、動きと話し方で見た目の年齢よりもさらに幼く感じられる。

「いいから。お前、みんなを集めてこいよ」

幸太はそんな赤毛を追い払うかのように背中を押した。幸太は、まだアイと繋いだ手を

離そうとはしない。マユがそのポイントを見ているのが分かったが、アイには何も出来な

かった。自分でも不思議なくらい、今はこの手に支えられている気がした。そんなこと、

あるわけがないのに……。なぜか、掌に汗を掻く。

「おっけー」

すぐに額に手を当て了解のポーズをとると、赤毛は駆け足で去って行く。入り口のドア

を通ると、建物の中は外壁とは正反対に綺麗なものだった。床は上質な石畳が敷かれ、掃除も行き届いているようで光っている。天井も、玄関付近は天井まで吹き抜けになっていて、明るい光が建物中に注いでいる。そして、階段がその中心部にあり螺旋状に上に伸びている。四階ほどの高さで、これだけを見れば全く研究所とは思えないほどだ。

「お姉ちゃん……すごいね……」

「う、うん……」

二人は初めて見る建物に戸惑いながら辺りを見回した。二人が幸太に引かれていくと、目の前にはまたも両開きの大きなドアが現れた。アイの身長など遥に越えているそれは、中に巨人でもいるのかと思うほどだ。幸太が、軽々とそのドアを開けると、中から小さな囁きが耳に入る。

「やば。かわいいってー」

「幸太やるなあ」

かわいい、など言われ慣れていない。たまに言ってくれるのは、祖

父くらいだった。目

線で部屋に入るように指示されたアイが、マユの手を引きながら片足を部屋に入れると、

赤毛を含めた数人が、身を乗り出しながら自分達を見ていた。その視線に思わず逃げたく

なる。水で濡れていた服はほとんど乾いてしまったが、それでも髪の毛など整えていない。

だが、今は、そんな時ではない。そんなアイの気持ちを知ってか、

知らずか。幸太が大き

く咳払いをすると、二人を男達の前に並ばせた。

「えーと、名前」
アイは幸太に肘で突かれ、慌ててお辞儀をしながら答えた。部屋は、

アイの言葉を待つ
ような緊張感で包まれている。マユも車の中の様子が嘘のように姉

の背中に隠れようと必
死だ。この部屋は、外よりもどこか肌寒い。声が震えるのは、その

せい
か。
「名波アイ……です。こっちは、妹のマユ。助けてくれてありがとう」

マユも小声で呟いているが、それはアイにさえ理解できないほど小さい。

「俺、りょう。さつきはどうも」

赤毛が片手を上げながら、にかつと歯を見せて笑った。その人なつつこさに、アイも思

わず笑い返す。りょうは丸いテーブルで、両端を男に挟まれる形で座っている。

「俺は、しゅん。よろしく、人魚ちゃん」

人魚ちゃんと言ったとき、幸太がしゅんの頭を叩いた。しゅんは、ひひつと舌を出して

笑う。しゅんはりょうと同じくらいに日に焼けて真っ黒だ。だが、

その髪の色は赤ではな

く、茶色で肩よりも長い。アイは、からかわれている気がした。三人目の男は、名乗らず

に軽く会釈だけした。背も小柄で眼鏡をかけている。繊細そうだ。

「こいつは、たけし。さつき、ユーフォーキャッチャーで車を運んでくれた。主にメカ専

門。機会を見て説明するよ。りょうとしゅんは、体育会系。ダリア駆除のエキスパートね」

幸太はいちいち一人ずつ指をさしながら説明した。しかし、メカだ体育会系だと言われ

ても、アイにはよく分からないまま頷くしかない。そして一番理解できないことを口にする。

「でも、どうしてあたし達がここに……？」

アイは、他の保護された人と同じように自分もマンションに行くと思った。すぐにで

も知人を探したかったこともある。仲間を紹介などされている場合ではない。

「人魚ちゃんは、ここでいいんだよ」

赤毛のりょうが、しゅんを真似たようにふざけて言う。それを、たけしが冷めた横目で

眺めている。どうしてこの人たちがこんなにも友好的なのかも謎だ。「もう、お前らうるさい。俺ら親父のところ行くから。また後でなアイ、来いよ」

今度、幸太はアイの手を引こうとはしなかった。しかし、その代わりに強い視線を向け

る。りょう達が飛ばすヤジを無視して幸太が部屋を出ていくので、慌ててアイもマユを連

れてそこを後にする。ドアの脇で待っていた幸太は、それを締めた途端肩を竦めて苦笑い

した。だが、仲間達にからかわれたことを嫌がっているようには少なくとも見えなかった。幸太に導かれるまま、姉妹は螺旋の階段で二階に上がる。階段には絨毯が敷かれ、それ

がまた一層ラボをホテルのように感じさせる。この、どこで研究が行われているというの

だろうか。二階まで来ると、部屋は階段の前から四つ見える。幸太は、親父のところ、と

言っていた。アイはそれとなく廊下を歩きながら、自分の肩ほどまである髪を撫で整える。

ついで、マユの服の皺を伸ばす。マユの服も乾いているようで、アイが見る限りおかしい

ところはない。ふかふかの毛で覆われた床を歩き、一番奥の扉の前に行く。幸太がおもむ

ろにノックをした。数秒後、中から噎れた男の声が聞こえた。それは命令でも、歓迎でも

なく、ただ平坦なものだ。
「入りなさい」

鷲の形をした金色のドアノブを回して幸太がドアを開けると、戸惑い無く室内へと入っ

て行く。アイは迷ったが、すぐに続いた。中の広さは圧倒的で、アイの住んでいた家の倍

はあるだろうか。目の前には来客用だろう、大きなテーブルがあり、その回りに四つの椅

子が向かい合わせに置かれている。その奥にはさらに大きな机があり、その上に所狭しと

本が積み上げられている。その後ろは窓になっているが、今はカーテンが閉められており

外は窺い知ることが出来ない。奥の机の両脇を飾るように、本棚がある。壁を右から左、

上から下まで覆いつくすまでぎっしりと本が並べられている。そこ

に隙間はなく、それぞ

れの分厚さもアイの興味を引いた。圧迫感がもの凄いのだ。他の部屋がどうなっているの

か興味が湧く。やはり本がたくさんあるのだろうか。

「いらっしやい」

アイが、身体を三六〇度回しながら部屋を眺めていると、奥の机で座っていた老人が、

立ち上がり三人に向かって歩いてきた。その声はノックに返答したものと同じで、アイの

心をきゅつと締め付ける。年齢から言っても同じくらいだ。祖父の声と似ていた。

だが、見た目は全く似ていない。髪の毛が一本も残っていなかったアイの祖父とは違い、

幸太の父親はまだ豊かな髪を持っていた。真つ白に変化していたが、それが老人の雰囲気柔らかく見せている。顎の下に生えた髭を撫でながら近寄ってくる老人を、アイは緊張した面もちで待った。アイの前に来ると、彼は顔に似合わず小さな丸い眼鏡の奥からじつと姉妹を見つめた。顔には皺が刻まれ、その年齢を感じる。だが、眼鏡の奥の瞳は微かに光っていた。静かに片手を差し出され、アイも慌てて右手を出す。その体温が合わさった時、老人はゆっくりと微笑んだ。老人の身体から懐かしい匂いを感じ、アイはその手を離したくない衝動にかられ、さらに強く握りしめる。

「あの、名波です。助けてくれてありがとう」

先程の言葉を繰り返すと、横で幸太が肩を竦める。それしか言えないのか、というように。ただ、アイの声が涙混じりなのを分かってか何も言わなかった。

「いや、噂通りの綺麗な子だね。幸太」

「親父。それより、こいつは海の生き残りだ。しばらく置いてやってほしい」

幸太は、父親の言葉には答えずに、真顔で訴えた。彼の回りの空気

は出会った時から同じだ。冷めた顔をして、決して優しい言葉をかけて貰える訳ではないのにどこか温かい。真剣になっしてくれているのが分かる。

「チビちゃん、お姉ちゃんとお話がある。後ろの本棚の一番下に絵本がある、読んでいてごらん」

父親も、また返事をせずにマユに話し掛けた。マユは、頬を膨らませ上目遣いで老人を見上げた。徐々に下唇が突き出てくる。それは彼女なりの不満の表し方だ。アイには、その原因がおチビちゃんという名称と、いつも話に加えて貰えないことへの悔しさだと分かった。だが、その背中をそっと押し出してやると、マユは言い返すこともなく本棚へと歩いて行く。脇から、幸太がそっとアイの耳元に囁く。

「マユ、字を読めるのか？」

それに対して幸太に頷き返すと、それを確認したかのように老人も微笑んだ。マユが膨れたことなど気にしていないようだ。この老人にしてみれば、マユなど孫の年齢だ。幸太は遅い子供だったのだろうか。見比べるように二人に視線を移すと、父親はゆっくりと言った。

「ではとりあえず、名波さん。座って下さい」

アイのような年頃の少女に話すとは思えないくらい丁寧な口調で言うと、老人は椅子へ

導く。椅子を引くと、見た目よりも重さのあるそれが床を擦るような音を出す。傷が付か

なかったかと床を確認したが、どうやら大丈夫のようだ。アイと幸太が並んで座り、父親

が向かって奥になる。アイの視界の隅には、しゃがみ込んで本を探すマユがいる。カーテ

ンは閉じているのに、部屋は明るい。何があるわけでもないのに、建物全体が明るいようだ。

「君の親はどうしたんだね？」

老人は、唐突に尋ねた。アイがどういう経過をもってここにいるのかを知らないのだろう

か。親……海を流れていた身体の部位を思い出す。老人を見ていた視線が、自分の膝へと

下がった。その上で固く握りしめた両手を見つめる。知らぬ間に頬を涙が伝って落ちる。

それが、自分の拳に落ちてやっと、アイは涙を零したことに気づいた。

「親父、言っただろ。ダリアが海に入ったとき、こいつの集落は全滅した。ビデオを見て

いた俺が言っているのだから確かだよ」

アイが口を開きかけると、横で幸太が答えていた。多少の怒気を孕んでいることが感じ

られ、アイの方が驚いた。しかし、そんな幸太に関係なく、老人は落ち着いてアイを見つ

めている。それは迷いのないもので、座っていても腰が落ち着かなくなる。なぜか隣で幸

太が舌打ちを漏らす。空気が重くなる。アイは頬の水滴を手の甲で拭くと、一度幸太の横

顔に視線を投げてから老人に頷き返す。幸太の答えが正しいのだと、意味を込めて。

「君は、陸地に来たいのかい？」

「来たいんじゃないって。海は危ない、来るしかないだろう」

またもや、アイが返事をする前に幸太が横から口を出す。アイも幸太の余りの熱さに驚き隣を見る。幸太もそれに気付いたのか、バツが悪そうに下を向いた。父親も、そんな息子を軽く一瞥すると、再び言葉を発した。

「では、もう一度聞く。君は、陸地に来たいのかい？」

アイは迷った。ここまで手を引かれるままに、やみくもについて来

ただ。海が怖くな

ったのも、死んだかもしれない親の遺体を目にするのも嫌だっただけかもしれない。でも

何より、一番の理由はがあつたはずだ。

「妹を、守りたいんです」

そう、マユを救うことだった。

「私は、偶然陸地に行った父親を探しに家を離れました。妹もついて来ていたようで、途中二人でダリアとすれ違いました。昨日です。今日、幸太さんに連れられてここへ来ました。何が正しいのかわかりません。ただ、マユを救う手段が陸地にしかないのなら、ここに居させてください」

一気にそこまでを話すと、アイは座つたまま、額がテーブルにつきほかに頭を下げた。老人が返事をするまでの数秒が永遠にも感じられる。幸太がじつと息を潜め、部屋に響くのはなにやら面白いものを見つけたのかページを捲る音のみだ。

「顔をあげなさい。いいだろう。置いてあげよう。ただ、君もここにいないからには色々と協力してもらおう」

アイは顔を上げ何度も頷いた。断られるかもしれない。出て行けと言われても文句は言えなかった。それなのに、どうやら寝床は確保できるようだ。今度は、安心感からの涙が襲う。

「それでは早速。君は、何か知っているのかね？ それか、何か覚えてるかい？」

老人は、そう言うつと椅子から立ち上がり、机から紙とペンを持ってきた。質問の目的語

はダリアについて、ということだろう。アイにとって、奴らについて知っていることなど

ほとんどない。姿さえ、昨日初めて見たくらいだ。どうして、そんなことを聞くのかと問

いかけたくなり口を開くと、老人は再び質問した。

「何もないかね。じゃあ、君に特殊な能力は？」

「特殊？ 特にないです……」

「ダリアと戦ったことは？ ないかね？」

「…… ないです」

「…… もういい。下がちなさい」

老人は、急に興味を失ったようにペンをテーブルに放り出した。眼鏡を外して、アイが

ら視線を外す。老人の口の辺りには、顎にかけて髭で覆われている。そこがモソモソ動く

ので、まだ何かを言われるかと言葉を待ったが考え過ぎだったようだ。会釈だけして立ち上がる。

「親父、また来るから」

幸太はすぐにそう言っていると、同じように椅子から立ち上がりマユを呼んだ。マユは、可愛

らしいお菓子の書かれた本を抱えるようにして読んでいた。名前を呼ばれても、躊躇うよ

うに幸太と本を交互に見た。まるで、もう少し見せると訴えるように。しかし、諦めたよ

うにそれを本棚へと戻すと、アイの元へと駆け寄ってきた。三人は老人の部屋を出ると、

一階から続いている螺旋階段をさらに登り三階へと移動した。すぐ目の前の部屋へと、今

度はノックもせずに入。部屋のドアも、先程の父親の部屋と違って質素な物だ。

しかし代わりに、中には二つのベッドが置かれていた。

「ここ客室。といっても、客なんていたことはない。好きに使ってさっきの熱が嘘のように冷めた声で幸太が言った。マユが喜びで叫びながらベッドに飛

び乗った。だが、すぐにアイに怒られることを恐れたのか、ふかふかのそこから降りると

窓へ駆け寄る。父親の部屋と同じようにカーテンは閉まっていたが、その隙間から外を覗

いている。父親との対面に思わぬ神経を使い、アイは溜め息を吐く。「着替えがいくつかそこの棚に入っているから。それと、……部屋の案内をするから」

幸太は、はしゃいでいるマユの後ろ姿を眺めながら言った。アイのほうを少しも見ることはない。先程なぜあそこまで庇ってくれたのか、聞きたいのに言葉にならない。ごまかすように部屋の中によく目を走らせる。全体はピンクで基調されており、部屋のいたるところに人形も置かれている。どこか懐かしい匂いに、アイはきゅつと心臓が縮まった。幸太は未だにマユの後ろ姿を見ている。この男とマユは、なぜか絆のようなものを感じる。マユがあそこまで誰かに懐くことなど滅多にない。一階で挨拶をした時、あれが普段の他人へのマユの行動だ。なぜだ。マユとこの男の間には何かあるというのか。がっしりとした肩から伸びた、すらりとした腕。その半袖の腕は、筋肉で引き締まっている。綺麗な指先。思わずその手に触れたくなり、自分を押し止める。耳に髪をかけると、幸太に言われた棚に近付く。

「ありがとう。色々して貰いすぎて悪いな」

「それは……あれだ。お前達は、海に生きていた人種の大事な生き残りだから。まあ、後でいい物を見せてやるから」

そう言い残すと部屋を出ていった。いい物、が何か分からないまま、アイはマユを呼ぶ。マユは海を上がってから色んな物に興味を示す。おかげで次の作業に入ることに苦労するが、アイには少しだけ嬉しくもあった。棚を開けてみると、そこにはアイとマユ、それぞれの大きさに合った物が入っていた。それも上下数種類が並べられている。これを入れたのは幸太なのだろうか。それよりも、なぜこんなにもぴったりのサイズがあるのか不審になる。これでは、まるで二人がここに来ることは仕組まれていたようだ。ここに來ることが決まっていたのなら、ダリアが襲撃をすることも分かっていた

のだろうか。家族が傷つけられるということも……？ 様々な疑問がアイの頭の中を巡る。首を傾げるマユに、余計な心配をさせないようにアイはすぐに着替えさせる。部屋を出ると、廊下で待っていた幸太がにやりと笑った。

「普通に似合うもんだ」

アイたちが着ていたのは水着のような物だ。それに違和感も不満も持ったことはない。

だが、アイは初めて着る服もなぜか気に入った。まるで自分が着ることが決まっていたよ

うに身体にフィットし動きやすかった。満足そうに上から下までを見ると、幸太がマユに手を差し出した。

絶滅危機（2）

「マユ、これからまた姉ちゃんと話しがあるんだわ。さっきの赤毛の兄ちゃんと遊んでいてくれよ？」

マユは老人に言われると怒ったが、幸太だと笑って頷いた。これだ。これがおかしいの

だ。アイがそれを怪訝そうに眺める。吹き抜けを見下ろすと、一階の廊下でアイたちを見

上げ、手を振っている赤毛のりょうがいた。

「じゃあ、後で迎えに行くから」

幸太が背中を軽く押すと、マユは後ろを振り返ることもなく駆け足で下りていく。アイ

は妹と離れるのが心配だったが、幸太に腕を引かれるまま階段を再び昇った。

三階から四階へと続く階段数は、他の階との間より長くある。何かから守られているよ

うだ。四階には部屋のドアが一つしかないようだ。その分、この部屋の広さが想像出来る。何があるのだろう、と訝しむ気持ちと、これならマユにも見せてあげたかったという想いが錯綜する。幸太はすぐにドアを開けた。中あるのは、一瞬で分かるほど多くの機械だった。アイが見るのは初めてだが、本では読んでいた。機械が置かれた机の向こうには

窓ガラスになっていて遠くまでが見渡せる。こんなに森の中だというのが嘘だというようにそこから海が見えた。その綺麗な青を見て、アイが喜びの一声を上げようとした時だった。

「もう来たのか」

幸太ではない声にアイが辺りを見回すと、陰から姿を現したのは、あのテーブルで無言

だった背の低い男だった。見ればアイよりも目線は下だ。部屋の中は、どうやら三百六十

度見渡せるようになっていようだ。アイ達がいる部分をドーナツ型の真ん中として、

周りにはぐるりと窓になっている。

「たけし」

幸太が呼びかけると、たけしは机の前に置いてある大きな肘掛け付きの椅子に身体を沈

めた。よく見ると、彼の足は座ると床に着いていない。うっかり笑みを漏らしそうになり、

慌てて気を引き締める。只でさえ、他の二人とは違い態度が硬いのだ。アイが何かをした

はずはないのだが、それでもこれ以上嫌な想いをさせたくはない。

「悪いな。映像を見せてくれよ」

幸太が話し掛けながらその椅子に向かっていくと、たけしは軽く頷きいくつも並んでい

るカメラを指さした。アイのことはちらりとも見ない。それが良いのか、悪いのか。

「それじゃあ、とりあえず海の方角。南三番でいいかな」

左から三番目にあるカメラを指さすと、瞬時に海周辺の映像がたけしの前に置かれたモ

ニターに現れた。その他にも画面はいくつもあるが、たけしの前にある物が一番大きい。

その上、画像が鮮明だ。髪の毛一本さえ見逃さないだろうそのカメラは、映った画の倍率

まで調節出来るようだ。そしてそれは終始左右に動き、周辺を見回している。まるで自分

がその場にいるのではと錯覚するくらいにリアルな映像だ。その映像は、自分が出てきた

海を写し、すぐにでも水の中に帰りたくなってきた。

「すげえだろ」

隣でアイを見下ろしながら、幸太は得意気に笑っている。今はそれに楯突く気持ちにもなれず素直に感嘆の声が漏れる。

「すっごい、海！」

そこは波もない静かな物で、勿論ダリアなどいない。全てが平穏そのもので、見れば見るほど身体が疼いた。もしかすると、幸太はこのためにマユを連れてこなかったのではな

いかと思った。アイでさえ、海に帰りたいと口から出そうになった。マユなら海を、すべ

てを思い出して泣くかもしれない。アイは機械に近づくと、大きなや色が様々なボタンを

見つめ、自然と手を伸ばした。

「ストップ」

初めてたけしが声を発したかと思うと、いきなりアイの手を掴んだ。身体をびくつと震

わせ、座ったままのたけしを見下ろす。彼は眼鏡の奥にある目を光らせながら、アイを窺

めるように見ている。その目は明らかに嫌悪感を示している。やばい、やってしまった。

アイがそう思った時、幸太が数回咳払いをした。そつとたけしの手首を掴み、アイの手が

ら離してくれる。

「アイ。これはたけしの宝物。いわば、ここは皆なんだ。機械は触らないで。たけしに言っ

て見せてもらって」

「……ごめんなさい」
その視線以上に、身体から出る気配がアイの身体を竦めた。謝ろうとした声も掠れてし

まった。たけしはニコリともせず

に再び機械に向かうと、鼻に下が

った眼鏡を神経質に持ち上げた。また空気が重くなる。

「あの……。街中とかも見られるんですか？」

アイがおずおずと問い掛けると、たけしは無言で真ん中にあるボタンを押し、映像が切

り替わる。聞いてくれたということは許してくれたのだろうか。だが、それも顔が見えないので分からない。幸太の横顔を、助けを求めるように見上げた。

幸太は背が高いので、

アイが見上げても顎のラインに目線が行った。その時、後頭部に痛みが走る。一瞬目を瞑

つてから、どこかにぶつけただろうか、と考えてみるも思い当たらない。すぐにそれは消

え失せ、さらに幸太の声で意識が逸れる。

「たけしは、大抵ここで監視しているから。気が向いたらいつでも見せてもらえよ」

この男と二人で、ということだろうか。アイは、自分の頼みを幸太がいないのに聞いてもらえるとは思えなかった。というよりも、同じ空気を吸っている自信がない。息が詰まりそうだ。とりあえず曖昧に頷くと、画面には瓦礫と化した家と、その下へもぐろうと必死に身体を左右に揺らしているダリアが映った。その姿を見るだけで、アイの身体には鳥肌が立つ。

「俺達、……厳密にはたけしが、昨日もこうやってあちこちを監視していたんだよ。そ

うしたら、雨なのにダリアがいた。一気に海に入って行ったんだよ」

「見ていたの？」

「ああ」

「海の中も……？」

「そう」

アイは下を向くと、必死で涙を押しとどめようとした。この感情は、忘れなければなら

ないだろう。マユもいるのに、海の中での出来事思い出すたびに涙ぐんでいたら支障が出る。

まず、自分も恥ずかしいし、情けないではないか。たけしは、あの襲撃を目撃したのだ。

画面では、瓦礫の下に潜ることに成功したダリアがその姿を暗闇の中へと消していった。

目的があるのだろうか。人間の匂いがしたのだろうか。ああして、いつか自分もまた襲われるのだろうか。

「俺は仕事だ。お前は趣味で見ていただろう」

たけしがいきなり言ったことに、幸太が反応した。素早く腕を振り下ろし、たけしの脳

天に勢いよく振り下ろす。壁を殴ったような大きな音と、たけしの上げた低い悲鳴が重なる。その音が頭から出たのだと気づいたのは、たけしが頭を抱えて幸太を振り返った時だった。たけしはまだ口を開こうとしたが、幸太の一睨みで黙る。また机に向かい、ボタンの操作を始める。

「ダリアはどうして海に？」

もちろん、アイは幸太に向けた質問だった。たけしには迷いがあったのか、ちらりと視線を投げる。だが、幸太が話し始めるのを聞いて、画面を切り替える。

「ん、多分水に対して抗体ができたか、だんだん恐怖心がなくなっただか。それでもいきなり入るわけがない。俺達が見逃しただけで、海に何回か入る奴らはいたのかもしれない」

「気づかなかった。おじいちゃんは、なんとなく知っていたみたいだけ……」

その会話に入りたかったのか、たけしがそこで割り込んで来た。この男は、幼い風貌に加えて声も高い。話し方のつつけんどさを直せ

ば、可愛いものである。

「海人も知っていたのか？」

アイは、たけしを見ると頷いた。恐らく、画像で見たのだろうから、祖父が襲撃で死ん

だことは知っているのだろう。敢えてそこに触れないことが、事実だというのを色濃く映し出していた。

「そう思う。でも、おじいちゃんは昨日のダリアの襲撃で死んじゃったの。助かったのは、あたしとマユだけ」

「え？」

たけしの返答は、場の空気を変えた。アイは、たけしが知っているものだと思ったが違

うのか。幸太が隣で舌打ちをしたのが聞こえ、アイが見上げる。たけしまでもが振り返り、幸太を睨んでいた。なんだ。

「おい。あのマンションの住人にはいないの？ 海からも助けただら？」

迷いながらの話し方に、アイも戸惑う。どういうことだ。一気に変わっていくアイの顔

色に気づき、そこでたけしは言葉を切った。そうだ。マンションに助けたのはいると言っ

ていた。アイも、視線をたけしから幸太にぐりりと向けると、騙されたのかと言葉がでなかった。

「確かに、助かった人はいる。でも、あいの集落は確実に全滅した。嘘じゃないんだ」

疑ったわけではない。なぜか幸太に寄せる信頼感は、自分でも意外なほど膨らんでいる

と感じる。幸太の目は力強く、嘘はついていないと語っていた。それでも、数ある疑問は

残ったままだ。それをいつ問えばいいのか分からない。一つずつ紐解いていくしかないのか。

「じゃあ、どうして……」

「俺は、アイ達がここにいればいいと思っている。それだけだ。だからマンションに行く必要はない」

「なんでそこまで？」

アイが思い切って問いかけたことに、幸太は黙ってしまった。それを、たけしが冷めた目で見上げている。眼鏡を直そうとしたその手が、宙で止まった。どうしたのだろう、とアイが思った時には、たけしの鋭い声が響いた。無口の上に、声を発してもボソボソと話す男が出したものとは思えないほど大きなものだった。

「おい！ 見てみる」

その声に、アイもカメラの映像に釘付けになる。吸い込まれるように画面に顔を寄せると、机に両手をつけて凝視した。映像は今、街の中だ。先程消えたダリアがいた場所から、おそらく数メートルほどしか離れていないはずだ。そこに、数人の人影があるのだ。おそらくダリアに襲撃されたのだろう。瓦礫となった建物の下に隠れている顔がいくつか見えるのだ。それが潜り込んだのか、下敷きになったのかは分からない。だが、ダリアに見つかるのは時間の問題だろう。

「これ、どこ！ ねえ、これ！ どこよ」

アイは幸太に振り向くと、次の瞬間にはたけしの胸倉を掴んだ。唾を飛ばしながら喚くアイの肩を、幸太が押さえ、たけしから引きはがす。幸太に触れられたところが妙に熱い。そのおかげで、自分がいつのまにかたけしの首を締めかけていることに気づく。

「くるしっ……」

たけしの眼鏡は床に落ち、身体は宙に浮きそうな勢いだ。映像からは音が出ていない

め、部屋の中は至って静かだ。だが、アイの耳元ではどくん、どく

んと脈打った音が響く。

体中が熱くなり、目眩がする。

「アイ！」

幸太の掴む手に力が入り、そこでやっと我に返る。たけしも、アイに締められた首に自

分の手を当てながら、眼鏡をかけ直している。文句を言おうと思つたのか、彼は口を開い

たかと思うと、すぐに咽せた。声を出そうとして、また咽せる。咳払いをして、また咽せる。

「どうしたんだよ！」

それは、アイに向けられたものだ。幸太が咽せているたけしの背中を撫でながら、また

画面にかじりつくアイに叫ぶ。やっとたけしの席が収まった時、アイも声が出るようにな

っていた。しばらくは、その映像が信じられず我を失っていたのだ。そんな時にも、窓の

外には呑気に雲が浮かんでいる。すぐ側を一羽の鳥が飛び去ったのを境に、アイは画面を指さした。

「これ！ お父さんよ！」

男二人が慌ててアイの指差す場所を見て、そこで初めて人の顔に気づいたようだ。たけ

しが息を呑み、機械を操作し始める。当時に幸太が一気に走り出す。「くそ。なんであんなところに！ たけし、車だ！ 頼む！」

そう叫び消えて行つた。たけしはその呼びかけを皮切りに、部屋の一番端まで椅子を滑

らせ移動させた。どうやら椅子の足にローラーがついているようだ。「じゃあー！」

叫び声と共に、たけしが設置されたレバーを手前に引くと、頭上で

ういーいと換気扇の

回るような音がする。アイに出来ることなど無く、必死で机に両手を置き身体を支えたが、足はがくがく震えるし、喉は恐怖で干上がってしまっていた。

「お父さん……」

画面を見ると、ダリアはいないが人間も動いていない。奴らは、大きい身体だからこそ

小さな隙間には上手く入れない。だが、その下に獲物がいると分かっていたからこそ、ず

っと潜ろうとしていたのだろう。やっと入ったあの穴から、今は瓦礫の間を突き進み彼ら

の元に近付いているかも知れない。奴らに短い手足はついてはいるが、全く意味をなして

いない。ただ身体を動かすことしかできないダリアは、水への抗体は作り上げて、知能

は成長しないことが窺える。だからこそ厄介な生き物だとも言えるが、アイはそんなこと

よりも、今は父親が助かることだけを願った。両手を祈るように握りしめる。すると、数

分もしないうちに、アイが乗った車が現れる。ひゅーっとたけしが口笛を吹いたが、それ

は決して上手いといえるものではない。

安心したのもつかの間、不幸にも次の瞬間に陰からダリアが現れたのだ。車を見て、攻

撃本能を刺激したのだろうか。やはり正面に突っ込んでいく奴の姿が見え、すぐにドリルにより大破した。アイは思わず悲鳴を上げ、両手で口を覆う。車の中にいるときはここまで鮮明に見えなかった。それが、丁度よかったのかもしれない。設置されたカメラの向こうに張り付いたのだろう、ダリアの肉片が大きく映し出された。ほぼ半分以上の画面が死肉で覆われたが、残りの見えるスペースに幸太

が車から降りてくるのが見えた。だが、そのあとが隠されてしまう。たけしが無言でいくつかの視点を切り替えてくれたが、そのどれも現場を得るものはなかった。どうなったのだろう。アイは、ついに両手で顔を覆い、すすり泣き始めた。

そんな彼女を慰めることも出来ず、たけしは仕方なく画面に目を戻す。すると、幸太が再び車に乗り込むところだった。横目でアイを見て変化はない。とりあえず幸太を再び回収しなければならないわけで、たけしは次々にカメラを移動していく車を追った。そして、あるポイントまでたどり着いた車を確認すると、再び右端に行き、レバーを奥へと押した。自由に街を移動している時は、ずっと画面を見ているわけではないので車の中に設置してあるマイクを通して呼んで貰う。しかし、今のような場合には幸太が呼びかけることもないし、たけしも通常の業務をこなすだけだ。それで失敗したこともない。お互いの息など目を瞑っても把握できるだろう。それほど長年コンビを組んでいる。巨大クレーンが幸太の車を引き上げるのを見届け、これで大丈夫だとたけしは思った。安堵感から眼鏡に手が伸びる。とりあえず無事だ、幸太は。だが、数分の間にこの部屋の空気は淀んでしまい、早く幸太が戻ってくるのをたけしは願った。部屋にはアイのすすり泣きが響く。いつの間にも移動したのか、部屋の隅の壁に寄りかかるようにしゃがみ込み、顔を伏せている。たけしは、こういう女は苦手だ。目の間にある壁をどう乗り越え、そして緻密に作戦を立てることを好む。泣いていたって始まらない。堪えられないな。そうたけしが思った時、ノックもなくドアを開き血相を変えたりようが飛び込んできた。

「アイちゃん早く！ お父さんが」

りようが最後まで言うのを待たずに、アイは一目散に飛び出して行っていた。りようも、その後を追う。だが、たけしは任務があった理由もあるが、この後は見たくない場面が待っているようで追いかけなかった。とりあえず、幸太は帰還したようだ。このメカが正

常に働き、駆除を支えるのが自分の役割だ。それ以外に必要なことなどない。たけしは、乱れそうになった心を改めるように、眼鏡の位置を直す。そして、ため息を吐くと、再び監視のため画面へと向き直った。

アイは階段を飛ぶように駆け下りると、玄関ホールの石畳に父親の姿があつた。だが、アイの記憶の中にいる父親とは異なる。父親はいつも元気で笑っていた。逞しい身体が誇りで、遠泳が得意だった。それは今、横になっているだけだ。

「お父さん！」

衝撃が胸を駆け抜け、アイが父親の胸元に寄り添うと、マユはすでにりょうに抱き上げられて泣いていた。挨拶をする時はあんなにも内気だったのに、遊んで貰って少しはうち解けたのだろうか。いや、今はそんな心配をしている場合ではない。父親の下半身には毛布がかけられ、その下からは夥しい量の赤い液体が流れ出ている。石畳の白さにその赤色が妙に強調されて気味が悪いくらいだ。だが、その毛布はなぜかひらべったく、人間の厚さを感じさせない。アイがそれを取ろうとすると、いつの間にか隣にいた幸太に手首を掴まれた。

「アイ。見ない方がいい。ドリルが少し間に合わなくて、下半身は喰われてしまったんだ。腰から下がない」

父親は目も閉じ、身動きもしていない。もうすでに死んでしまっているのだろう。アイが諦めかけた時だった。父親の口元が微かに動き、それにマユが一番に反応した。その場にいた全員が、ただ耳を澄ませ、息を呑んだ。

「あ……」

父親は、見えているのかも疑問なほど薄く目を開き、声を発す。それは掠れていて、耳を近づけなければ分らない。自然とアイがそれをする事となった。アイ……そう名前を呼んで貰えると思つた。もう少しだけ生きる勇気を、幸太やこの研究所を信じる勇気が

欲しかった。大事な物が周りから消えていく。少しでも力になるものを残して欲しかった。だが、父親の目はアイを見ていなかったのだ。

「ありがとう……」

その目は、確かに幸太を見ていた。ただ、立っているしかない幸太にもそれは届いたのか、アイが見上げると驚いた顔をしている。もしもここへ運んで貰えなければ、そのうちダリアに全身を食べられていたことだろう。生殖場所に臓器を使用されたかも知れない。その危険から身を守ってくれた。たとえ死ぬ運命にあるとしても、それを救ってもらったことが父親のせめてものプライドだったのだろう。アイが見上げる幸太の顔に、微かな変化が表れた。その視線を辿って、アイが父親の顔を見ると、彼はもう静かに目を閉じていた。ありがとう……。幸太へ向けられたその言葉があったからこそ、アイの目から涙は零れなかった。代わりに、廊下には静かにマユの鼻水を啜る音だけが響いた。

「大丈夫か？」

アイが目を開けると、そこは三階の客室にあるベッドの上だった。どうして自分がここにいいのか思い出せないアイの真上に、心配そうに覗き込む幸太の顔があった。額に手をやると、濡れたタオルが置かれている。すぐに幸太が手を伸ばしそのタオルを取ると、近くにあった洗面器の水ですすぎ直し、再度額に乗せてくれる。見渡す限り、部屋にマユの姿はない。赤毛のりょうがまた遊んでいてくれるのだろう。それがなぜか、今は安堵となって押し寄せた。マユの前では気を張っていたのだろう。小さな命をせめて守りたい、守らなければいけないと決意することは、思ったよりも大変なことだった。こうしてくれる幸太に甘えなくなっても普通のことだろう。アイは、そんな幸太の顔を見上げながら、父親の顔を思い出した。死ぬずっと前の、元気な頃の姿を。

「ありがとう」

アイは動かない表情で一言呟いた。動かせなかった。一言言うだけで精一杯だ。これ以上顔の筋肉を動かせば、また一人家族を失った悲しみに負け、顔中が歪みそうだった。自分で思う限り、声が掠れることもなかった。

「ああ、気にするな。もっと冷たい方がよかつたら言えよ」

幸太はさりげなく言った。だが、アイはそのまま首を横に振る。そのせいで、目から自

然に溢れた涙が、一筋の線となって耳に入りそうな位置まで流れ落ちる。違う。これでは伝わっていない。

「違うの。お父さんのこと。ありがとう、連れて来てくれて。きつとあそこにいたら、お

母さん達みたいに、全身食べられていたと思う」

それが限界だった。涙は止まらずに溢れ、終いには顔がくしゃくしゃになっていく。泣

くことは恥ずかしいことではない。しかし、もう自分は大人なのだといい聞かせる。全てを我慢することが大人なのではない。それでも、ここで一步気を緩めればもう立ち上がれない気がした。我慢、我慢、我慢だ。今は、まだ……。その決意を表すように、声をあげまいと唇を噛んだ。だが幸太は、そんな彼女の頭を大きな掌で包むように撫でると、優しい声で囁いた。

「いいんだ。泣いていいんだよ」

もう、無理だ。アイはそれを聞くと、咳を切ったように泣き始めた。それは、建物中に

聞こえるような大きさだった。アイは止められなかったし、幸太もそれでいいと思った。

アイの手を探し当てると、優しく握る。顔も隠さず、口も押さえず、あらん限りの力で泣

き叫んだ。どうしてこの男はこんなに優しいのだ。どうしてみんな、

自分を置いて死んでいくのだ。どうやって生きていけばいいのだ。頭の中を、そんな心の叫びが浮かんでは消えていく。言葉を泣き声に代えて押し出す。どれだけ遠くまで自分の声が響くか試しているようだった。一度その線を越えて仕舞えば、あとは自由だった。思う存分泣き続けてしばらくすると、水分が全部出てしまったのではないかと思うほど喉が渴いた。やっと幸太を見ると、彼もアイを見ていた。無性に恥ずかしくなりアイが苦笑いすると、彼は何事もなかったようにそつと手を離し、再びタオルを代えてくれた。その一瞬、アイのこめかみの辺りに痛みが走る。泣きすぎたせいだろうかと少し顔をしかめたが、次の瞬間にそれは消えていた。

4 秘話告白

「マユは、りょうが見てくれているから」

幸太は、一言だけ言うのと黙ってしまった。ゆっくり気持ちを整理しろということなん

だろう。泣いたせいで少しだけ痒い瞼を擦ると、アイは背中をベツドにずりあげるようにして上半身を起こした。

「りょうって、幸太の友達？」

紹介してもらった他の三人は、みんな同じ歳くらいに見え仲も良さそうだった。自分に

あんな仲間がいないからこそ、羨ましい。父親を助けに行く時、耳に入ったたけしとの連

携も見事だった。

「そうだよ。でも、俺達もみんな親なしだから。それで余計に気が合うのかな」

幸太は肩を竦めて答えた。凝っているのか、肩を何度か回す。それが話から気を逸らそ

うとしているのかは判断しかねた。だが、みんな親がいない、というのは間違いではないか。

「幸太には、親がいるじゃない」

おじいちゃんくらいの歳に見える……と続く言葉を飲み込んだ。誰でも親のことは悪く

言われたくないものだ。それでなくとも外見に関しては。

「あ、あの人は俺の本当の親じゃないんだ。俺も成長したから、今は違和感もなくなった

けどさ。親父にここへ連れて来られたんだ。施設からな。親父はダリアのことを研究して

いる」

「ダリアのこと？ 奴らについて分かっていることはあるのね」

アイがベッドから飛び上がらんばかりに言うと、幸太は座っていた脇の椅子からゆっく

りと立ち上がり、さらに遅い動作で両腕を組んだ。母親と同じに、

幸太もアイにダリアに

ついて教えたがらないのだろうか。疑う視線を向けた瞬間、幸太は口を開いた。どうやら

違ったらしい。

「それが、恥ずかしながらほとんど。奴らの死体を集め、生体を調べたくらいだな。それでも殺傷方法はドリルくらいしかないんだ。薬品、化学、今の研究所で手に入る物ではどれもあいつらには効かないんだ」

「ダリアがいなくなる世の中は来ないってことね」

それが悲しいとは思わない。生まれた時から、アイにはダリアがいて当たり前だったのだ。どう逃げるか、を重要視していたのが、どう戦っていくか、に変化しただけだ。自分で出来ることをやるのみだ。それは一人では駄目だ。隣で弱音を聞いてくれた人がいれば嬉しいと思う。心臓がまた一つ、とくん、と跳ねた。アイの頭脳に上手く結びついているこいつは、ことある事にアイを動揺させる。側で、まだ腕を組んでいる幸太の横顔を見上げ、またそれに反応するように心臓が、とくん、と話し掛けてきた。今日だけで何度助けて貰えたのだろう。それよりも前から、幸太は海の中にいるアイを見てくれていたという。それがたとえ警備の一環だったとしても、素直に今、嬉しいと思えた。そう気づいてから、慌てて否定するように一人かぶりを振った。何を考えているのだ。家族を失った今、気持ちが悪くなっているに違いない。その時ふと、幸太はアイに戻して言った。

「でも、親父は他に予言をしているんだよ」

「予言？」

アイは今まで考えていたことを隠そうと大きく息を吸ったところだったが、初めて聞く言葉にそれを吐くのも忘れて首を傾げた。幸太が頷く。

「まあ、予言ていうか。天文学なんだけど。例えば、何年の何月に何が起こるっていうのを考えるっていうのかな」

ほとんど日付の計算さえしなかったアイにとつては、そんなことは考えたこともない。返答にさえ困り、また曖昧に首を傾げた。

「俺もそうさ。だけど、俺はその予言のおかげで親父に貰われたんだ」

アイがその先を促すように見ると、幸太は組んでいた腕をほどきドアの方へと歩いて行く。昔を思い出すように天井を見上げると、ゆっくりと話し出した。本当にこの世にダリアがいるのかと思うほど、この建物内は静かである。部屋に幸太の声だけが流れる。それを心地よく思うのは、洗脳か。

「俺は赤ん坊……っていつても、二歳くらいの頃に親に捨てられたんだ。ある日突然」

思い出したくないことなのだろう、わざとアイから顔を背けるようにして立つ。止めようかと思ったが、話してくれているのなら聞くべきなのだろう。ただ、言葉は見つからずにごくりと唾だけを飲み込む。

「実は、俺、過去の記憶があるんだ」

過去……。ぷつと吹き出してしまってから、苦笑いが漏れる。幸太は隠していた顔をくると向けると、真剣な顔でアイを見つめる。時間が止まってしまいそうだ。緊張がどつと沸き上がり心拍数が上がる。また、こめかみが痛む。笑った自分を責めなくなった。だが、幸太はそんなアイを責めることなく続ける。

「信じてもらえるか分からないけど、前世の記憶だ」

「前世って……」

幸太は、もう見慣れた仕草で肩を竦める。

「だから前世だって。今、生きている俺。前の時代に生きていたと

きの記憶ね」

「まさか」

あまりに予想外の発言に、苦笑いが本格的笑いへと変化していく。だが、その途中で幸

太の真剣な目と合い、今度は真顔になる。信じろ、と言われて信じられるものではない。アイは、幸太が元気を分けようとこんな話をしているのではないかと思った。アイが信

じたところで、うそだよ、と笑われ馬鹿にされるかもしれない。舌でも出されていたら最

悪だ。そんな想像をしていると、幸太が構わず話し続ける。

「施設に入れられたんだ。町中をふらふらしているのを拾われてね。ダリアに食われなか

ったのが不思議なくらいだ。まあ、信じられないだろうけど」

「それって……凄いな」

諦めたように溜め息を吐く幸太に、アイは思った通りの言葉を投げかける。幸太の態度

からして、彼なりに真実を話しているのだろう。その上でアイに何を求めているのかは分

からない。だが、それが事実だとすれば興味もある。

「だって、普通はそんなこと分らないよ。いつの時代でも、もしかすると今何か役に立

つかもしれない」

興奮してきたアイがベッドの上に勢いよく立ち上がると、その柔らかい弾力に足下がよろめき、床に転げ落ちそうになった。その瞬間視界が反転する。

「ばかっ！」

首に強い衝撃を受けて目を瞑る。だが、痛みがない。ゆっくりと目を開くと、自分と床

の間に、幸太の体があった。慌ててその上から退き、幸太の脇に膝をついてその顔を覗き

込む。幸太は、そんなアイの顔を床の上からじっと見る。そしてむつくりと床から半身を

起こすと、彼は後頭部を撫でながら片目を瞑り、胡座を掻く。

「いつて」

自分が痛くなかったことに感謝しながら、どうしたらいいのかとアイは幸太の隣に腰を

下ろす。幸太の視線に耐えられなくなり、アイが立ち上がろうとした時だった。彼はアイ

の方へ手を伸ばしたのだ。触れたい。吸い寄せられるように、自然とアイの手も伸びる。

その手が触れ合うと、人間の温もりが解け合う。少しアイよりも太い指が、一本一本絡め

られる。守られているのかもしれない。またそう感じる瞬間だった。凝り固まった心が、

どんどん溶けていく。ダリアへの恐怖も、これからの不安も、この手があれば乗り越えら

れる気がした。だが、これを失ったらどうなるだろう……。そんな考えが脳裏を過ぎり、

思わず握った手を離れた。幸太はそんなアイに驚いた視線を向けた。右手を宙に浮かせた

まま、頭に当てていた左手がだらんと落ちる。

「あ……今、バチって」

アイが自分の掌を見ながら言うと、幸太は苦笑いに代える。なぜ離されたかの理由を知

って安心したのだろうか。それはアイの本心ではない。だが、それでいいのだ。

「あー、静電気？　俺は分からなかったけど」

そう言って、両方の手を自分の服に軽く擦りつけている。得た物を失った時、もう今度

こそ立っている自信はない。幸太は、アイが家族を失って困ってい

た時に救ってくれた。

それと分らないほど上手に、優しく。辛いことに代わりはない。だが、そこにいてくれ

るのだという確固たる安心感は、アイにとって巨大な要塞だった。

それが崩れたら、と想

像しないわけにはいかない。それなら初めから手に入れないほうがマシだ。ただ仲間とし

て、それで充分だ。

「で、どこまで話したっけ？」

流れを変えるように幸太が言う。もう一度伸びてこない手に少しだけ寂しくなり、幸太の手を見つめてしまう。だが、離れたのはアイ自身だ。身を奮い立たせるように床から立ち上がり、ベッドに戻り腰掛けた。そして、まだ床にいる幸太に言う。

「施設にいて、過去の記憶があるって」

幸太が拳で胡座を掻いた足を叩く。

「そうだ、そうだ。つまり、親は気持ち悪かったんだろうな。その頃すでに、前世につい

て話していたらしいから。まあ分からなくもない。今となってはどうでもいいんだけど、

俺は当時話題になった時があっただよ」

「前世を覚えているなら、みんな聞きたいだろうしね」

「そうだなあ。というよりも、陸地にいた人間はいつもダリアに追われいてたから、奴ら

の情報が少しでも欲しかったのだろうな」

幸太の年齢を確かめた訳ではない。だが、ほとんど変わらないだろうこの青年は、アイ

が海の中で幸せに生きていた間に、こんなにも辛い目にあっていたのだ。それでも、過去

の記憶があるからこそ、ここに来ることが出来たのだ。恵まれていたのだろう。アイは、もし自分の親だったらどうかと考えた。自分に過去の記憶があり、それを生まれて少し

たら話し出す。気味悪いと思われたらどうか。いや、違うと思ったかった。あの家族が、

絶対そんな些細なことで自分を捨てたりするはずがない。

「それでな、親父がその噂を聞き付けて施設に会いに来たんだ」

「お父さんが……」

アイはあの口ひげを生やした初老の男性を思い浮かべる。噂を聞きつけた、ということ

はダリアの研究に役立てるため、ということだろうか。それを聞くと、幸太は人差し指を突き出した。

「一つ目に、ダリアの研究目的が理由だ。でもそれだけじゃない」
そう言つて人差し指を足す。

「二つ目に、俺が親父の予言の中に現れたからさ。俺が生まれた年に、過去の記憶を持つ

男の子が現れるって。だから、親父は俺を見つけるまで結構必死に探していたらしいんだ

よ。その間二年。根性がいっていうか、学者的っていうか。その男の子が大人になると

き、計算上、つまり今年らしいんだけど……。ダリアは滅びるって」
「ええええー？」

目玉が飛び出るほどに開き、アイは叫んだ。生まれた時から恐れる生物と教えられ、子

供にもそう教えると思っていた。数日前までは、両親をこんなに早く失うことや陸地に上

がることも考えていなかった。それが、初めてダリアを目にしたと思つたら襲われかけ、

必死で逃げた。その憎らしき生き物が、この世界から消えるというのか。声が萎んだ後、

それは自然と疑いの眼差しに変わる。そんなことあり得るのか。

「本当に？」

「そうだ。天文学だとね」

「そのことは、誰が知っているの？」

「仲間は、みんなある程度はな。でも、過去の詳細までは知らない。親父だけかな」

どうしてそれが自分に教えて貰えるのだろうか。何度頭の中で繰り返しただろう。どうして、どうして、数分前に握った、幸太の手の温もりを思い出しながら、アイは見つめ返した。本当のことを教えて欲しいと言えば、聞かせてくれるだろうか。ここへ来た時から感じている、アイだけが特別に扱われているという違和感の理由を。その決意が固まりかけた時、幸太が再び言った。

「そこでだ。俺は、陸地には詳しいが、海のこととはよく知らない。モニターでは見ていたが、そんなものは役に立たないだろう。アイは海に詳しい。だから色々教えて欲しいんだ」

「でも、海のことなんて……」

「ダリアが水に抗体を持ちはじめた今、俺たちは知る必要があるんだ。アイにダリアと戦えとは言わない。だけど、みんなを……俺と救ってみないか？ それはマユだって含むことになるんだ。分かるか？」

「マユを……」

「怖いかな？」

幸太は、アイの顔を見つめる。幸太に救って貰った命だ。アイは、幸太を含めたこの研

究所に恩返しをしたかったが、なにより最後の一言が胸に響いた。

マユを救う。自分の手

で助けられるのだろうか。その力になれるのか。それならば、持っているものなどいくら

でも差しだそう。また海で生活できるかは分からない。だが生きていけば、ダリアが絶滅

するようなことが本当に起こるのならば、そんな世界に住んでみたいと思えた。そのため

なら、怖い物などない。アイは、大きくかぶりを振った。幸太は小さく息を吐きながら、

満足そうに頷く。そして右手を差し出した。アイは一瞬それを取ることを躊躇い、そつと

握り返すとすぐに離れた。また離したくなくなりそうで怖いのだ。幸太は、そんなアイの

様子に気づくこともなく話を再び予言へと戻す。

「肝心なことは、親父もダリアがどうやって消滅するかまでは知らないんだ。ただ、さっきの続きも存在はする」

ここまで物事の続きを知りたくなったのは初めてだ。アイは、両手を膝につくと、ベツ

ドの上から身を乗り出した。それは、子供が絵本の続きをせかす顔ととてもよく似ていた。

「男の子が成長したとき、地球には多大なダメージが起こり、衝撃で滅する。だが、生の

道には悪が存在し、それを防がねば叶わぬ」

「……悪って？」

背筋に嫌な汗を一気に感じる。アイが口を挟もうとしたところ、幸太がそれを手で止めた。

「続きた。悪は常に生の近くにあり身を紡ぐ」

「それって……」

「最後だ」

だが、それきり幸太は黙ってしまう。しばらく思案気に顔を伏せていたが、ついに痺れを切らしてアイが先を促した。目の前に広げられた手をそつと退けると、幸太の顔を見る。

「続きは？」

「……いや、これは気分が悪くなるかもしれないから、やめておこう」

急に口ごもる幸太を、アイもそれ以上は追求しなかった。ただ、続きは別としても最後の内容は引つかかる。悪、とは何なのだろう。それについての見解は示されているのだろうか。常に生の近くにある。ダリアのことか。いや、これはダリアを元にしての予言。そもそもこれ事態が悪についてなのだ。悪についての悪。悪の中に有る悪。生の側に存在する悪。もしも、生がこの研究所であり、生きている人間であるのなら。もっと限定をして幸太だと言うことならば。「それって、幸太の近くに悪があるってこと？」

そういうことになる。アイは、先程会ったばかりの幸太の仲間を思い出した。みんな優しく、いい人に見えた。たけしは冷たそうだったが、しゅんもりよりもマユに優しくしてくれているようだ。幸太の父親でさえ、厳格とはいえ悪には見えない。自分に人を見る目があるかなど分らないが、それでもアイ達を救ってくれた人たちだ。

「そうは思いたくないけど……。親父はそれを疑っているんだ」

「そんな……」

「あいつら、あの赤毛のりょうは施設で一緒だったんだ。俺とはなぜか馬があって一番仲がよかった。それで親父は一緒に引き取った」「養子には……」

「なつてないよ。実際には、しゅんも施設にいた奴なんだ。世代が同じだから、少し後になって、また引き取った。でも、養子になったのは、予言の中にあつた俺だけだった」

しゅん、と呼んだ時、幸太の瞳が一瞬揺れた。それは本人が意識していなかったことのように幸太は話し続ける。しかし、その目があまりにも攻撃的に満ちていたのが気にかかる。そう言えば、初めにみんなに挨拶をした時、りょうは幸太に絡んだがしゅんはそんなことがなかった。展望の部屋では、たけしがという人物かという

のが少し分かったし、あの二人のチームプレーは見物だった。それゆえ、しゅんとの間にある線のようなものが気になってしまう。

「勿論、あいつらはそんなことなど知らないよ。俺も「悪」だと思えないし、言えるわけない。ずっと一緒に育ったんだ」

その言葉は、幸太の心からのものに聞こえる。まっすぐにアイを見つめるその瞳からも分かる。それならば、悪など今度は見つからない。他にもいるのだろうか。裏に住むというマンションにもいるのか。そこまで考えて、アイは幸太の父親が言っていたことを思い出す。アイやマユへの執着。これまでダリアと戦ったことがあるか。そして、特殊能力についてまで聞いてきた。それは……もしかして、アイを悪だという選択をしているのではないか。予言にあったのだろうか。映像を見て気づいたのだろうか。いつからだ。いつから見られていた。いや、たとえ映像を見ていなくとも、予言に出ているなら関係ないだろうか。急に、アイの心臓が大きく脈打った。ここまで連れてこられたのは、もしかして捕まえるためだったのではないだろうか。甘い顔をして安心させたところで、一気に殺されたりしないだろうか。

「アイ？」

考えに夢中になり、アイはつい真剣な顔で俯いていた。掌には、急激に襲った焦りでじわりと汗が滲んでいる。そんなことを知らない幸太は、ただアイの顔を見上げている。ハッとして目を合わせる、それは思ったよりも心配の色を孕んでいた。それで少しだけ嬉しくなる。やはり、幸太がアイを悪と考え、ここに連れてきたはずがない。今はそう思いたい。

「ああ、ごめんなさい。そうだ。……たけしは？」

その質問に、幸太は口を噤む。アイの目を数秒穴が開くほど見つめたあと、諦めたように言った。表情も元に戻る。意外にこの男は鋭いかもしれない。アイの少しだけ動く表情で簡単に心の奥にずりりと進入する。核心についているくせに、わざと素知らぬ振りをする。正直に話さない自分が、悪いことをしてしまっている気分に

なる。それが引っかかり目を逸らすと、幸太が普通の声音で答えた。
なんだかずるい。

「あいつは最初マンションにいたんだ。街でダリアに襲われているところを保護されたんだよ。でも、歳が近いからいつの間にか俺達と仲良くなった。メカ好きっていうのがわかって、仲間になってくれたんだよ。親もダリアにやられた」

「……彼かもしれないんでしょ？」

「まあな」

そういう幸太の顔は、その言葉をアイが口にする勇気が必要だったと感じさせないほど平静そのものだった。まさか、幸太ということはないだろう。自分だとしたらどうしよう。幸太にこれ以上迷惑をかけたくなかった。アイに予言を少し重荷に感じた。誰を信じればいいのか分からない。

「難しいかもしれないけど、普通にしていってくれ。仲間俺が見ているし、アイたちには危害を加えないように努力するから」

最後に絞り出すように言った幸太の言葉で、アイはごくり、と唾を飲み込んだ。マユを守ることばかり考えていたアイにとって、それは新鮮であり胸を焦がすものだった。顔を動かすことが出来ずに幸太を見つめていると、彼のほうが先に視線を逸らす。その耳は微かに赤らんでいるようだ。頼れる人がいること、何よりもそれが嬉しかった。

「幸太。今度は過去のことを話して」

そんな些細な心の動きを読まれるのが恥ずかしくて、アイはわざとぶっきらぼうに言い

放つ。こういう時にお礼を返せないのは、まだ子供だと認めるようで悔しい。思っている

ことを言葉に出来るようになれば、大人なのだろうか。この自分でも分からない感情を、

どう説明すればいいのだろう。今も幸太を目の前にして、少しずつ鼓動が早くなっていく。

研究の一環でも悪を見つげるためでもなく、純粹に幸太を知りたいと思うのは間違いないの

だろうか。数分前に自分に歯止めをかけたはずの心が言うことを聞かない。これでは、自分が傷つくことは目に見えている。

幸太は立ち上がると、今度はアイの隣に腰掛けた。両手を後ろ手にしてベッドにつき、

上半身を後ろに傾け、天井を見上げる。幸太は、昔のことを聞くと天井を見上げる。こん

な彼の仕草を一つずつ覚えていく自分に気づき、また大きくかぶりを振る。そんなアイの隣で幸太は言った。

「俺の記憶は、定かではない。確認出来る人間もいない。それでいいな。俺は、多分数百

年前に生きていた。この世界とは全然違う、それなりに住みやすい街だった。家族も……、

つまり幸せだった」

「ダリアはいたの？」

「いたよ。むしろ、出現し始めた時代だったと思う」

ダリアの出現。どうして奴らは現れたのだ。やはり予言の通り、

幸太は重要な人物に違いない。

「ダリアは初め、このくらいの大きさだったんだ」

幸太はそう言っ、親指と人差し指で五センチほどの距離を作った。今では想像もつか

ないほどに小さい。昨日と今日見た奴らには数百集まっても足りないだろう大きさだ。アイの驚きは、声にならないものの顔に表れた。幸太がその真似をするように、わざと一度目を大きく開いて頷く。もう一度、五センチの幅をアイの顔の前でちょこちょこ動かす。

「俺は、そのときまだ二十歳くらいだったと思う。とにかく青年で

「感じた」

「ダリアはどうやって現れたの？」

これは、おそらくほとんどの人間が知らないであろう。うーん、と唸ってから幸太が言う。

「実際にあいつらがどう生まれたのかは、未だに謎だ。俺の記憶にもない。俺が気づいた

時には、奴らはすでに町中に溢れていた。今の資料を見ると、過去で奴らは憎しみから生まれた獣だと言われたようだ」

憎しみから生まれた獣。アイは、もう一度あの姿を思い出す。しかし、同時に憎しみが胸に沸いたので止めた。

「現代にもあるかもしれないが、ある家で虐待が行われていたんだ。あくまでもこれは一つの仮説だ。その対象は動物に向けられた。人間は、自分の楽しみや癒しを求めて動物を飼っていたんだよ。犬とか猫とか。残念ながら、ダリアによって今は全滅している。だが、虐めるやつがいたんだよな。弱い者虐めだ」

「どうして……？」

「どうして……か。難しいな。自分が辛いから、可愛いから、怒りが沸いたから。そのどれかかもしれないし、どれでもないかもしれない。たとえどれだとしても、これが事実ならばそいつは最低なことをした。精神的におかしかったんだろ」

「何をしたの？」

残酷な話だ。聞きたくない。だが、これ以上楽な思いばかりしてられない。幸太にはどうってことのない話なのだろうか。淡々と話すその顔に戸惑いも焦りもない。

「犬にタワシを食べさせたんだよ。無理矢理な。何個も何個も何個も。あ、タワシっていうのは、昔掃除するときに使っていた道具だ。ゴツゴツした形の……とにかくダリアと同じ形をしている。タワシ

を知っている輩の戯言ともいえるな。なんにせよ確かな証拠はない。他にも科学者が最強の動物を作ろうとしたというのもある。俺の記憶では、ダリアが現れたのは一瞬だった。そしてあつという間に広まった。そして俺も……死んだ」

ダリアが現れた世界。その時、幸太もその時代にいた。自分の前で見知らぬ生物が広まり、自分も死んだ。迫りくる恐怖。生まれた時から生きていて、注意して生きているのと、いきなり発生すること。どちらがより怖いだろう。いや、同じ事だろうか。結局死ぬのだ。その時、彼には大切なものがどれほどあったのだろう。それも覚えているのだろうか。アイは、思わず俯いた。反対に幸太は、恥じるものがないとでも主張するようにまっすぐと視線を前に向けた。

「俺は、目の前で何人も死んでいくのを見た。大切な家族や友達。いろんな人間が消えたんだと思う。自分が死んだことでその確認さえ出来ない。今は成長して巨大化したダリアは、丸ごと人を飲み込んだり、くいちぎったりする。でも、昔は違った」

「……違うって？」

「俺の覚えているのは特にそうだ。奴らは小さかったから、人間の至る所、特に傷口から体内に侵入した。そして内蔵から目に至るまですべてを食い尽くした」

ダリアは人を襲う。本でも読んでいたが、そのあまりにも具体的方法を想像することで少し気分が悪くなる。目、そこまで食べられるのか。アイの家族も巨大なダリアにそんなことをされたというのか。許せない思いが体中から溢れそうになる。悔しくて涙が出そうになる。だが、それも想像上の怒りでしかない。目の前でそんなことをされたら、さらに傷つくのは当然だ。もしかしたら、幸太はその怒りがあまりにも大きくて記憶を忘れられなかったのではないか。だが、アイの隣で話し続ける幸太の顔は、怒りよりもさらに大きな感情が占めているように見える。どうしてそんなに悲しそうなのだろうか。

「それを俺は目撃したよ。目の前で助けを求められても、何も出来

なかった。助けられない」

「そんなの、当然よ」

「それでも何も出来ないのは辛かったよ。いや、その瞬間は自分の身を守るうとして必死で逃げた。すぐに死んだと思うけど。あいつらは、人間の腹に卵を産んで増殖していった。あいつらの子供が腹から飛び出してきた映像は、今でも忘れられないんだよ」

アイは、幸太の背中を精いっぱいの優しさを込めてさすることくらいしか出来なかった。大丈夫、大丈夫と何度も心の中で繰り返し口に出すことは勝手すぎる気がして、ただそう願うしかなかった。「でも、親父に色々と話して多分研究に役立てただろうし、良いことも少しは覚えているよ」

良いこと。アイが幸太を覗き込むと、彼はにんまりと笑っている。震えも治まってきた

ようだ。微かに震えていたことを、おそらく彼自身は分かっている。い。

「なあに？ 教えてよ」

冗談っぽく言っていると、彼は笑っているだけで教えてはくれなかった。

「よっし。そろそろ晩飯ができただろうから、下に降りようぜ」

幸太はそう言っているとベッドから立ち上がった。アイもそれに倣い、元気を振り絞ると、ま

だ頭に残る父の残像と新しく思い描いた過去の恐怖を振り払おうと笑った。

5 精神崩壊

「お前、あの子にどこまで話したんだ」

低い声と共に、男の口元にある長い髭が揺れるように動く。広い部屋の中の窓際で、二人の男が肩を並べながら外を眺めていた。暗闇になりつつあるその世界に、光などない。町中に月の明かりしか存在しなくなったのはいつのことだろうか。それは、そこに人がいないことを示している。いつかここが眩い光に包まれることを、二人は望んでいる。だが、今日は雨が降りそうな雲で、月さえも見えない。

「親父。ダリアのことと予言については話したよ。納得もしてくれと思う」

そこは二階にある幸太の父親の部屋だ。幸太は、アイと別れてから一人ここへ来た。アイに予言について話すことを、父親に言われていたのだ。

「そうか。これからどうするつもりだ」

父親は、幸太の顔を見ることなく真っ直前を見て言った。本当の親子ではない。それでも長年一緒に生活をし、ダリアという人類に多大な影響を与える化け物とも一緒に戦ってきた。幸太の過去を見つめ、二人で打開策についても話し合った。顔色など確かめなくともその鼓動さえ読みとれる。父親は、恐らく幸太の意見に反対しないだろうと感じ、その口を開く。

「アイには海について教えて欲しいと頼んだよ。お父さんのこともまだショックみたいだ」

父親は溜め息を吐くと、両手を強く握りしめた。そのあまりの力に手が白く変化していく。幸太はそれを横目で見ながら、気づかない振りをした。

「本当のことを知ったらあの子は苦しむと思わないのか？ それなら庇ったりしないほうが後々……」

「親父」

父親が反対している訳ではないのは分かっている。心配してくれているのだ。それは、幸太可愛さゆえだということに、彼自身気づいている。アイが全てを知った時、幸太が傷つくことを恐れているのだ。だが、結果はまだ明確ではない。幸太は今、自分がしたいと思う行動を取るだけだった。それでたとえ自分が傷ついたとしても、過去の重さには勝てないことも覚悟している。幸太はついに、父親を鋭い目つきで睨んだ。

「そうだな。それは言わない約束だった。すまない」

父親の萎んだ声に、幸太の目付きも和らいだ。感情で先走りすることとはよくないと、い

くら学んでも生かすことが出来ない。その場になると、つい自分を優先してしまったことに後で気づく。その時謝っても、相手を傷つけた事実は変わらない。幸太が無言でいると、父親が先に言葉を発した。こんなところも、まだ自分が子供だと思い知らされる。父親の声に、もう先程の色はなかった。ただ、今度はさらに重いものに変化している。

「それはそうと、お前。あつちは確認してくれているのか？」

あつち……。アイにも話したばかりの悪についてだ。幸太は身边を調査することも命ぜ

られていた。アイの前では強気な発言をしたものの、幸太は周りの誰も調べることなど出

来なかった。少しでも疑いを持てば、ダリアの駆除作業における連携プレーにも乱れが出

るだろう。そうなれば、勘の鋭い奴らだ。何かがあると気づかれるに決まっている。その

時、この波長が壊れることを恐れていた。

「ああ。でも、俺は仲間内に悪と予言されている奴はいないと思う」

父親は、さらに大きな溜め息を吐き、かぶりを振る。これは先程の心配とは違う。失望

か、呆れか。それでも、肯定をする気にはなれない。

「そんなことはないんだよ、幸太。そう思いたいのが分かる。だが、必ずいるはずだ。その証拠に名波アイも、予言通りお前の前に現れたではないか」

「あれは……」

「そうだ。お前が助けに行った。だが、現れたことに変わりはない。そうだろうか？」

「親父……、でも俺……」

幸太は目を瞑ると、自分の頭を両手で抱えた。遠くの方で雷鳴が轟いている。空には厚

い黒い雲が占領している。それがほとんど崩壊している街を飲み込もうとしているかのよ

うに低い位置まで降りてきている。数秒経ってから、また稲妻が光る。その光は、暗闇の

陰に隠れようとする幸太の弱さを、わざと見つけたような意地悪なものに見える。すぐ

に雨の音がし始め、それは一気に窓を打ち付けるほどの強さに変わる。顔の前に水滴がつ

き、下へ流れ落ちていく。暗闇に閉ざされた街が、一定の時間をおいて稲妻に映し出され

る。今やもう、この光と水でさえ奴らには驚異でなくなってしまうのだ。自分の心に負

けている場合ではない。父親の言葉が、さらに追い打ちを掛けるように幸太に響いた。

「逃げるのではない。そいつを逃したら運命は狂う。ダリアが滅亡しないかもしれない」

そんなことは承知している。自分の頭の中で何度考えを巡らせたことだろう。だが、こ

の予言はあまりにも重すぎるではないか。どうして昔のことなど覚えていたのだ。どうし

て仲間を疑わなければならぬのだ。どうして、どうして。どうして、アイがいるんだ。

「でも、なんで……俺が」

幸太は、まだ頭を抱えていた。答えを出すことは簡単ではない。それでも、自らそれを

出せた時、人は必ず強くなれる。弱かったことが悪いのではない。大事なのは、弱かった

自分にうち勝つことだ。それを教えてくれたのは、父親だ。幸太は両手を離し、顔を上げ

た。悩みながら噛んだ唇を舐めると、血の味が口の中に広がる。

「幸太。一言でまとめるならば、運命だ。でも、決して他人にない幸せも、お前は持って

生まれたはずだ。それを成し遂げようとしたことは、後悔してないだろう。まあ私も色々

探ってはみるから、気をつける。油断はするな」

「……分かったよ。じゃあ、ご飯食べてくる」

幸太は小さく肩を竦めると、父親の顔を見ることがなく部屋を出た。父親とこの話をする、いつもこうだ。堂々巡りである。結果は出ることもなく最後は息苦しくなってしまう。逃げる事が出来ないの分かつている。部屋を出た幸太は、しばらく階段の手摺りに身体を預けると荒い呼吸を繰り返した。覚悟を決めてもすぐに揺らぐ。それは、一度失敗をしていることを知っているから。あの悲劇を繰り返したくない。……誰なんだ。どいつが悪だ。幸太は、本当は予言を聞いた昔から彼らを心の隅では疑っていた気がした。だからこそ、そんなにも息苦しくなるのだということに、彼自身気づいてはいなかった。

*

「マユ。これおいしいよ？」

一階にある部屋では、長テーブルを使用して今、彼らは食事をし

イには最早想定内だった。マユは目の辺りを擦りながら、嗚咽を始めた。食事どころではなくなりアイが席を立とうとした時だった。食堂のドアが開き、幸太が現れたのだ。部屋での話を終えた幸太は、アイに食堂へ行くよう言った。その時よりも、彼の顔が疲れて見えるのは気のせいではない。それなのに、幸太は一度アイと視線を合わせてから、マユに目を向けて言った。

「遅れたな。あ、おい！ マユを泣かせたのは誰だよ。りょうか？」幸太はここでどんな掛け合いがあったのか知らない。そのため、その口調は些かからか

いを含んでいるものだった。テーブルに近付いてくると、マユの頭を一回撫でてから空

いているアイの隣の椅子を引いた。と、マユが椅子を降り、幸太の元に寄る。幸太も抵抗

することなくマユを抱き上げると、自然と自分の膝に乗せた。マユは幸太の胸に顔を押し

つけるようにしてしがみついた。アイの幸太へ対する安心感がマユに伝染しているのだろ

うか。アイの方がその行動に驚きながらも、幸太と目を合わせ困ったように笑った。一度

和んだかに見えたテーブルに、りょうの声が響く。

「俺じゃねえよ！ たけしだよ」

りょうはそれだけ言うと、憤慨したようにわざと足音を立てて部屋を後にした。それで

もたけしは素知らぬ顔だ。りょうの大声で、マユが幸太の服の袖をさらに強く握ったのが

分かり、アイがその頭を撫でてやる。

「ごめんなさい。マユが」

謝ろうとすると、幸太がそれを遮るように言う。

「いいんだよ。あいつは、ちょっと勝手なところがあるから」

「じゃあ、俺はちよつと部屋で休むから」

しゅんが、そんな二人に気を遣うように席を立つ。幸太は片手を上げたが、たけしは無

言のままだ。スプーンを口に運ぶ手を緩めない。アイがお礼を言おうと振り返った時には、

すでに食堂のドアが揺れていた。しゅんが出ていってしまったのだ。マユが幸太の胸元から顔を出した時、部屋の奥に隣接されているらしい調理場から女性

が出てきた。アイたちよりは随分年齢も上のような。母親くらいだろうか。その白髪交じりの長髪が年齢を感じさせる。滑るように歩いてくると、両手に持っていた皿を幸太の前に置く。どこかこの部屋を見ているのだろうか。皿からは湯気の上がっており、幸太は彼女を見上げて言った。

「ありがとう、渡辺さん」

彼女は先程もアイ達のために料理を運んでくれた。その後によりょうに聞いた話によれば、

彼女も今はマンションの住人らしい。だが、そこに来る以前から研究所の食事を担当して

いる家政婦のような。渡辺と呼ばれたその女は、幸太の礼に答えることなく黙々と空にな

った皿をまとめる。だが、マユの皿を見ると急に顔をしかめ、片づけようとはしなかった。アイが視線を下げたが、幸太は気にしていない様子で再び言う。

「あと親父にも部屋に運んであげて下さい」

それに対しては軽く会釈をすると、彼女はまた滑るように調理場へと向かった。マユが

そんな渡辺の後ろ姿をじっと見つめている。アイがその視線が気になりマユの目の先を追

つたが、渡辺におかしなところはないように見えた。

「たけし、それよりダリアはどうだ？」

幸太が貝の穴から身をほじくり出しながら尋ねた。やっと全て食べ終わったようだ。眼

鏡を正しい位置に戻し、レンズの向こうから上目遣いで幸太を見る。

「ああ。だんだん海に向かう奴らの量が増えているね。水はもう平気かもな。ドリル作業

での駆除を地道に続けるしかない」

「そうか。ほら、これうまいぞ」

幸太が返事をしながら、まだ少し涙ぐんでいるマユの口元に切り身を近づける。あれほ

どアイが何を言っても泣いていたのに、マユはそれを口に含みながらはにかんだ。と、ア

イの方を見てさらに大きく笑顔を作る。やるせない想いが胸を過ぎつたが、曖昧に笑い返

す。

「それより、隣のマンションの方が問題かもしれないな」

「隣が？ そんなにやばいか？」

幸太の手が止まり、アイも何かあったのかと二人を交互に見る。幸太とたけしはそんな

アイには構わずに話を続ける。マンションで何があったのだろうか。研究所の裏にあると

いうその建物を、アイはまだ目にしていない。たけしは口の周りを手の甲で拭うと言った。

神経質のようで、案外雑なところもあるようだ。

「いや、精神的にな。助けたのはいいが、なかなか外に出られないで敷地の中にいるだけ

だ。ダリアへの恐怖心も拭えていない。襲われた経験から発狂し続けている人もいるぞ」

「でもここにいれば安全だし、食べ物も分けている。これ以上は無

理だ」

「無理だけどさ。不満とかではなく、彼らは不安定になっているんだよ」

たけしはそのまま調理場に目を向ける。渡辺もその一人だ、と言いたいのだろうか。ア

イが幸太の顔を見ると、それには不服そうだ。

「じゃあ、俺も監視に戻るわ」

たけしもそう言うのと席を立つ。マユに視線を向け、その手が微かに動いたのが分かる。

マユも大人しくたけしを見上げたが、彼はそのまま部屋を出て行った。アイに対しても一

言も発しない。どう対応すればいいのかさえ分からない。

「マユ、幸太から降りて早く食べなさい」

たけしが席をはずしたことで、アイの中で妙に緊張感が生まれた。それを隠すようにマ

ユを急かす。実際に、空腹を後で訴えられても困るし、甘え癖をつけるわけにもいかない。マユは唇を突き出すと、幸太に負けない不服を顔に出した。そして幸太の胸に再び顔を

うずめる。馬鹿にしたようなその態度に、アイもマユの手を引いた。力を入れていないの

に、マユは小さく悲鳴を漏らす。

「やめろ。別にいいから。かわいそうだろう？」

幸太がマユの顔を覗き込み笑いかけると、マユも声をあげて喜んだ。それがまた癪に障

る。つい声が大きくなるのを抑えられない。

「だって、ご飯を残したらマンションの人たちに悪いわ。今だって言っていたでしょう。それに彼女、マユの残り物を見て嫌な顔していたの。当然よ」

アイは俯きながら、なぜか悪者にされそうな自分の立場に泣きそうになる。悲鳴を上げたいのはこっちだ。

「まあさ、マユも今日は色々あったんだ。仕方ないよ。な？ それにマンシヨンの住人のことは気にしなくて良い」

幸太は再び箸を動かし、横目でアイの様子を窺いながら言う。

「……分かった。マユ、ごめんね」

その時だった。再びアイの後頭部に痛みが走る。一瞬顔をしかめるも、マユが小さく笑った顔を見た途端、それは跡形無く消えていた。何度と無くやってくる原因の分からない頭痛に首を傾げると、幸太が食べ続けながら言った。箸で掴んだものを口に入れる瞬間にテーブルに落とし、それを慌てて手で拾い口の中へ放り込む。また、頭痛が走る。

「アイ、あんまり気にするな。昼間はりょうとしゅんはほとんど駆除に出るけど、俺とたけしはいるよ。ここも玄関にセンサーがあっただろう。マンシヨンの住人も渡辺さんしか入れないようになっているからさ。危害を加えられることはないから」

「うん」

頭痛の原因が気になるアイは曖昧に頷いたが、幸太は何も言わなかった。そのあとも、しばらく食堂で三人は話し、夜は更けていった。

*

暗闇の中、男の歌声が響く。それに混じり時折金属のぶつかり合う音がする。妙なラッ

プ調で決して上手いとはいえないが、男が誰かにそれを聞かせたことはない。

「食べましようー食べましよう。育ちましよう」

何度も繰り返されるそのフレーズが永遠と続くかと思われたが、突如止まる。男が手元

から視線を離し後ろを振り向くと、部屋のドアが微かに開いている。聞く音はしなかった。

誰かが、この部屋を見ようと確信的に開けたのだろうか。慌ててド

アまで走り廊下を窺う

が、そこには誰の姿もなかった。ここで行われていることを知っている人間がいるはずが

ない。男は苛立ちを吐き出すように床に唾を吐くと、気を取り直して同じ作業を始めた。

*

部屋に差し込む朝日で、たけしはいつものように目が覚めた。研究所の最上階にあるこ

の部屋で朝一番にやることは、まずはダリアの確認だ。数が大量に増えている今、全てを把握するのはもちろん不可能だ。だが、ラボ付近にいないことを確認するのだ。もし近くをうろついているようなら、直ちに壁に何箇所も設置されているドリルを回さなければならぬ。常に塀には電流が流れているため、ダリアが近づいても侵入されることはないはずだが、確認は必要だ。現在の状況を見た後に、昨晚のテープを流す。海にもいつの間にか侵略していたのだ。少しの事態にも油断はならない。そちらに異常がないことを確認した後、通常の画面に映像が切り替わると、いきなり目の前に巨大な二匹のダリアが現れ、思わずたけしは後ずさった。

「びびった！」

ダリアなど見慣れている。だが、その目玉はいつ見ても不快だ。今など、奇妙な二つのそれに睨まれた気がしたのである。だがそれは単なる思い違いだったようで、二匹はすぐにお互いの身体を攻撃し合う。人間を襲う際にも、ダリアは短い手足を使わずに、ただ噛み付いたり飲み込んだりする。今見える二つのダリアも、お互いの身体を食いちぎりながら、体積を減らしていく。その中からは、消化しきれない人間の欠片がこぼれ落ち、血液と見られる赤い液体が地面を濡らしていく。人間が研究所で保護されているため、ダリアは食料にありつけないうちに共食いするようになったのは随分前からだ。これを見るのも初めてではなかったが、たけしは胸元に

沸き上がる不快感を抑えられなかった。そのカメラの映像を切り替えると、昨夜幸太に話した、それなりの大きさの建物がうつった。研究所ほどの広さはないが、高さは十階と優に超えている。外壁は剥がれてみすばらしいが、中は整っていると思う。一度たけしは使用したことがあったが、寂れた街の家より住みやすかった。といっても、それも随分前の話だ。あの建物を見ても懐かしいなどという感情が湧くこともない。マンションの監視カメラは一つしかなく、それは高低に移動している。ダリアが進入してくることが考えられない上に、マンションで問題が起きたこともないのでそれほど重要視もしていなかった。敵は、外にいるのだ。だけしの見ている監視カメラは最小の物で、数人の住人が見られていることも気づかずにカメラの前を通り過ぎて行く。勿論、彼らもカメラのことは承知で、むしろ問題事の際には助けに来てくれるのだ、と安心しているようだ。

「あ、渡辺さん」

食堂に朝食を作りに来るのである。彼女は、夏なのに体中を布で覆いながら隠れるように建物の脇をそそくさと歩く。彼女は、以前はあんな不審な動作をしなかった。まるで何かから逃げるようではないか。手には大きな紙袋を持っている。その中身が分からないまま、渡辺は玄関の方へと姿を消した。玄関が開いた音がこの監視室まで聞こえることはないが、彼女は朝食の支度を始めることだろう。もうすぐ下に降りる時間だ。再度、画面に目を走らせたたけしは、思わず息をのんだ。先程、渡辺がマンションから出てきて玄関まで辿った道のりだ。そこに、落ちているのだ。点々と、鮮明な赤い液体。たけしは、心臓に驚掴みされたような痛みを感じながらも、すぐに服に着替えると監視室を飛び出した。螺旋階段を足が絡まりそうなほどの速さで駆け降り、そのままホルのドアに突っ込んだ。自分でも気づかぬうちに焦っていたようで、すでに席に座っていたアイ達と、りょう、しゅんが一瞬で顔をドアへと向けた。荒い息を続けるたけしを、怪訝そうな目で見ている。

「おつす。どうしたんだ。何を慌てているんだよ。心配しなくてもお前の分は食べねえよ。この間、勝手にデザートを食べたことまだ根に持っているんじゃないだろうな」

しゅんは、目を擦りながら言う。たけしが最後というのも珍しいしゅんは大抵朝が苦手だ。その上、ご飯までに顔も歯も洗わないため、時たま涎の跡がある。

「いや……。おい、幸太は？」

たけしが食堂を見回した限り、その姿は見えない。幸太は所在不明の時間のほうが長い。

監視室にいる時もあれば、父親と何やら話し合っている時もある。駆除の手伝いをしてい

るかと思えば、マンションにいる。アイ達を海まで助けに行った時間でさえ、たけしにはそ

のことは知らされていなかった。二人を連れてくる直前、いきなり車の無線で報告された

時には信じられなかった。アイの存在を、幸太が見る映像でたけしも知っていた。何か繋

がりがあるのも感じていたが、接触をするとは予想外だったのだ。所詮は幸太が見つけた

好みの女くらいにしか思っていなかった。それも勘違いだと分かったのは、実際にアイを

目の前にしてからだ。いや、幸太とアイが二人でいるところを見てからだ。言葉で言い表

せないほど二人の息が合っていた。無くしていたパズルのピースがきちんと型にはまった

ようにしっくりとしたのだ。今まで幸太が自分の手で誰かを助けたことはなかった。もっ

ぱら駆除に出てもダリアを破壊するだけだった。そう、誰も口にしないがそれは取り憑か

れたように。しゅんとりょうも何かを感じているに違いない。だか

らこそ、アイが研究所

に寝泊まりをしても反論しないのだ。だが、それが何かはたけにしも分からなかった。

「まだ寝ているんじゃない？ 毎朝のことだし」

りょうは昨夜のこともあつてだろう、たけしに対して少し冷めた目を向けながら答えた。アイ達も、真顔のまま首を傾げている。昨日はたけしがここを離れてから随分三人で残

っていたようだ。それもまた気にかかる。彼女は何者なのだ。そんなたけしの考えを無視するよう調理場からは何かを炒める音がしており、食欲をそそる匂いが食堂にたちこめる。

「俺、飯いらねえから」

たけしは誰にともなくそう叫ぶと、二階の幸太の部屋を目指して食堂を出た。

普段大人しいたけしのその姿は、仲間達にはあまりに異様なものとして映った。

「おい。あいつ、変じゃねえ？」

しゅんが隣に座るりょうに問いかける。だが、りょうは自慢の赤毛を撫でながら、ドアをひと睨みして答えた。

「知らねえ。いいよ、別に。幸太にべったりなのは今に始まったことでもないしね」

その時、調理場から朝食の皿を乗せたワゴン引いて渡辺がやって来た。昨夜の雷雨が嘘

のように外は晴れていて、部屋には小さな窓から光が差し込む。割と明るいそのホールと

は対照的に彼女の顔は暗い。そして、そそくさと全てを並べ終えると、誰と視線を合わせ

ることもなく、また隠れるようになくなった。

「なんだか最近肉が多いよなあ。大丈夫なのかな」

しゅんは不思議そうだったが、りょうは目の前におかれた食事にくぐに食いついた。一

欠片を口に運んでは、感嘆の声を漏らす。アイ達もりょうに釣られたように、食事を始めた。

一方ホールを後にしたたけしは、真っ直ぐに幸太の部屋に駆け込んだ。そこは彼の父親の隣に位置する部屋で、鍵もつけられていない。一度起きてしまえば、幸太がどこにいるのか把握するのは監視カメラを辿っても難しい。だが、食事前の朝となればここしか考えられなかった。

「おい、幸太。起きろよ」

窓際にあるベッドでまだ気持ちよさそうに寝ている幸太の脇に立つと、たけしは呼び掛けた。だが、彼の目覚めは四人の中で最悪だ。誰が起こしても普段は効き目がない。自力で起きて来るのを待つのだが、今のたけしにそれは通用しなかった。

「起きろってば！」

幸太の頬を平手打ちすると、襟元をつかみ上下に激しく揺さ振る。幸太は片目をうつすらと開けたが、すぐにまたゆっくりと閉じていく。

「低血圧なんて糞くらえ！」

自分の眼鏡が布団の上に転がったのも気づかずに、たけしは再び幸太の首を揺らす。何度かそれを繰り返すうちに幸太は両目を開けたが、その頃には両頬が真っ赤に染まり、痛みで目覚めたといってもおかしくなかった。もう少し続ければどこかの血管が切れていたかもしれない。幸太は、自室にたけしがいることに気づくと、徐々にその目玉を大きく開いていった。珍しい事態に目を丸くし、遂にベッドに起きあがる。たけしの髪は振り乱れ、眼鏡は落ち、目が血走っていたのだから当然の反応だ。

「たけし？」

「幸太！ 遅い！ ちょっと来てくれ」

幸太の意識がしつかりした途端、たけしは幸太の腕を引っ張り無理矢理立たせた。

「なんだよ、朝っぱらから！」

幸太は捕まれた手を振りほどき、そのまま連れていかれそうになるのを、全身に力を入れて踏み止まった。頭もまだ正常に動いていない眠りモードだ。

「説明しろ！」

幸太が睨みつけると、たけしは我に返りベッドに落ちている自分の眼鏡を拾うと素直に謝った。

「ごめん、いきなり。でも、やばいもの見ちゃって早く知らせたかったんだ」

「やばいもの？　なんだよそれ」

ダリアについてか。恐怖に駆られたというのが正しいかもしれないが、幸太はすぐに服

を着替えると、たけしに言われるまま四階に駆け上がった。部屋を出ると、一階から朝食

のいい匂いが鼻をくすぐる。腹の虫が唸り声を上げたが、幸太は文句を言うのをやめた。監視室は、たけしが飛び出したままカメラが作動したままだった。ダリアが共食いしている映像はなるべく見たくない。

「なんだよ。ダリアでも大量に接近していたか？」

幸太は一通りカメラを見回すが、ダリアの姿は今のところ近くにいないようだ。だが、先程のたけしの慌てぶりは尋常ではなかった。

幸太の頭に、たけしが昨夜心配していたことが蘇る。マンションの住人か？

「幸太。最近、お前いつ肉食ったか覚えてるか？」

たけしは真っ正面から幸太を見ると、胃の辺りを手でさすっている。気分でも悪いのだろうか。それにしては元気だ。

「肉？　なんだよ、いきなり。昨日の夜は、アイ達が食べやすいように貝と魚だったよな。でも朝に肉食べたし、その前の晩も少し食

べなかったか？」

たけしは悔しそうにため息をついて首を振る。映像では、数人の住人が洗濯物を持って通り過ぎる。裏にある物干し竿に行くのだろう。幸太達の分は、常に渡辺が処理してくれているので滅多に行くことはない。肉、と聞いて腹の虫がもう一度鳴いた。幸太は空腹を訴えるように、たけしの真似をして腹をさする。だが、そんなことなどお構いなしにたけしが言った。

「そうだよ。肉ばかりだ。どうしてこんなになって不思議じゃないか」

「……いや。なんでだ？」

幸太は嫌な想像を振り払うかのように、わざと明るく言った。それでも、たけしの顔色は変わらない。髪の毛をわしわしとかき混ぜながら、苛ついた声を出す。回転椅子に座つ

たかと思うと、足で机の角を蹴る。機材の衝突音が響くが、駆除隊の幸太がそれくらいで

弱腰になることはない。だが、たけしがそこまで感情を出すことは少ないので驚いた。た

けしは、頭を掻きむしった手をテーブルに移し、何度となくそこを叩きながら言う。

「幸太。考えてみるよ。最近マンションの住人が消えている。精神的に不安定になって外に出ちゃう人がいるって噂だよ。でも、全員そうとは限らないんじゃないか？」

初め幸太は、たけしの言っている意味が分からなかった。次に、肉料理が多いことに不満があるのかと思った。この肉も、研究所の建物内で飼っている物だ。あまり使用すると

何かあった時に困る。緻密な計画を欲するたけしの言い分ではあり得る物だ。だが、最後

の発言で、すべては間違いだと気づいた。たけしの言いたいことは、一つ。あり得なくて、

残酷な物だ。

「まさかお前。渡辺さんがマンションの住人を殺して、俺達の飯に出しているって言い出したのか？」

あまりな意見に幸太の声も低くなる。朝食中で誰もここに来るはずはない。それでも、

誰かに聞かれないようにと小声になる。

「たけし。それは、ない」

幸太の答えなどたけしには分かっていたに違いない。だからこそ、あんなにも苛立ちを露わにしたのだ。分かってくれないと分かっている。それでも自分の意見の間違っているとは思えない。一度浮かんだ疑惑は、それを目の前で確かめれば納得がいけないのだ。たけしのそんな小さな葛藤だったのだ。だが、あからさまに否定され、たけしの中の苛立ちが懇願に変わる。

「だから、この際マンションに行って確認してみないか？俺はこの画像で、彼女が紙袋に血のついた物を入れているのを見たんだ。確かにあれは血痕だ」

幸太はしばらく黙り込み悩んだ。それはほんの数分だったが、たけしは永遠と続くかと思われた。一人で調べることは怖かった。その結果を一人で受け入れることがどうかも分からなかったし、実際にたけしは自分が戦闘に向いていないのが分かっていた。ダリアの共食いだけでさえ気分は最悪に悪くなる。人間の何かが出てくれば、そしてそれをもし自分が食べていたとするならば、生きた心地がないだろう。幸太に、この問題を忘れてくれと言われたらお終いだ。たけしは祈るような気持ちで待った。それでも幸太が何も言おうとしないため、再度たけしが口を開く。

「俺だってそうは思いたくないよ。俺は親をダリアに殺された。最初にマンションに保護されたとき、優しくしてくれたのが渡辺さん

だ。今やお前たちと仲良くなって、メカ担当までさせて貰っている。だからこそわかるけど、最近の渡辺さんの様子はおかしいだろう」

幸太の視線が宙を彷徨う。それは、彼もその疑惑をもっていることを肯定しているようだった。たけしは、少し声を大きくして訴える。

「そうだろう？ 目はうつろだし、こそこそ隠れるように動くようになったよ。それに、

ご飯の準備の時、俺たちに話し掛けてもこなくなった」

それは、幸太の心も代弁していた。幸太には、たけしの否定したいくせに疑ってしまう

気持ちが分かった。悲しそうに俯くたけしに、幸太がやっと言葉を紡ぐ。

「よし、分かったよ。今日、マンションに行ってみよう。りょうとしゅんは駆除に行くだ

ろう。たけしはメカの補佐をするだろう？ 俺がまずは一人で行って見てみるよ」

*

「マユ、今日はちゃんと食べて偉かったね」

アイは朝食を食べ終わると、すぐにマユと食堂を出た。昨夜はベツドの上で二人はくつついて寝た。家族の話題には触れずに、ここ出会った人間の話などして夜を明かした。明け方近くになると、マユは浅い眠りに入ったようだったが、アイは全く眠れていなかった。だが、マユはアイが思っていたほど子供でないようだ。心配になるほど弱音を吐かず、涙を流すこともなかった。却って、幸太の前で大泣きをした自分が恥ずかしくなるくらいだ。マユの手をしっかりと握りしめて部屋に戻ろうとすると、階段を走って降りてきた幸太にすれ違う。

「おはよう」

アイは笑って声を掛けたが、幸太の顔は妙に青白く目は笑ってい

ない。昨晚、ホールで別れた時には、元気に笑っていた。何かがあったのだろうかと思っただが、尋ねる勇氣はない。差し出がましいのではないかと遠慮が生まれた。アイは決して駆除隊の一員ではないのだ。それでも、マユが幸太の腰に両腕で抱きついたので、彼の頬も緩んだかに見える。

「おお。飯、食ったか？」

「おいしかったあ！」

マユが笑顔で幸太を見上げ答える。すると、なぜか幸太は顔を引き攣らせながらマユの

頭を撫でた。ちらりとアイに視線を投げるも、もう一度マユを見下ろして口を噤む。ホー

ルを一瞥してから、幸太はがらりと声を変えて言った。無理に元気を絞り出した声、そんな雰囲気を目を合わせる。

「そっか。よかったな。あ、おい。今日さ、暇ならお前の隣の部屋に入ってみるよ」

アイは首を傾げ、隣の部屋のドアを思い出した。確か、自分達の部屋と何も変わらなかった気がするが。

「なんで？」

幸太は迷う事なく答えた。

「あそこ、本とかいっぱいある部屋だから。昔のこととか分かるぞ」

「ああ、そうなんだ。マユ、入ってみようか。……幸太は何するの？」

「お兄ちゃんも一緒に見ようよオ！」

マユは幸太の手を取りながら、階段を上がっていくように促している。

「ごめんな、マユ。ちょっと用事足して来なくちゃ行けないから、それが終わったらすぐに行くからよ」

アイ達は、幸太の方を何度も振り返りながら階段を上がっていつ

た。

幸太は、アイ達が部屋に向かったのを確かめると、血痕を確認するために玄関の扉を開いた。ドアを出ると、すでにその地面には点々と赤い物がマンションへと続いている。これは今日だけの偶然だったのだろうか。いつも地面だけを見ているわけではないが、これだけの量があれば気づかないわけがない。ただ、昨日アイの負傷した父親を運んだので、その時に垂れた恐れもある。しかし、それも小さな言い訳でしかない。点の先を辿ると、それはマンションへ続いているのだ。間違いない。幸太は自分を戒めるように深呼吸をするとマンションへ向かった。

建物の入口に着くと、幼い子供が陰から飛び出して来た。驚き飛び退いた瞬間、それを追うように母親も現れた。幸太を見つけ、彼女も驚いたように目を見張る。それほど会う機会はないのだ。

「どうしたんですか。こんなところで」

こんな所。研究所の敷地だと言ってやろうかと思ったが、幸太はそれをぐつと堪え、最近のマンションの様子を尋ねてみた。

「最近……。そうね。変わったことは特にないかしら。あんまり人と関わるのも得意じゃなくて」

そう言っ、彼女は子供が離れないように腕を引っ張っている。

「そうですか。ありがとう」

こいつではわからない。親子はそのまま建物の裏へ歩いて行つた。幸太は丁度上から降りてきたカメラに向かってピースサインを出すと、次にマンションの中を指差した。カメラの向こうでは、たけしが見ているだろうと確信していた。マンションとはいつでも設備はほとんどなく、ただのコンクリートの個室が集まった箱だ。住人はそれでも感謝してくれる。それが当たり前だとは思わないが、今出来る最低限のことではあった。幸太は外からも見える階段をまずは二階に上がり、一番奥のドアを叩いた。中から中年女性の声が聞こえるや、すぐにその住人が顔をだした。

「はい。あら、幸太くん。いらつしゃい」

出てきたのは、髪を短くカットした小太りな女だった。それは巻か
れているようだが、

あまり上手いとは言えない。明らかに左右がバラバラで、あらぬ方
向へ飛んでいる。だが、

この明るさは今の時代には貴重な物であると思える。

「久しぶり。元気？」

幸太は軽く手をあげ、笑いかけた。

「元気よ。でもやっぱり、子供が恋しいわね」

彼女が視線を移したその先にあるのは、玄関先に飾られた男の子の
写真である。彼女は

しゅんが助けた女性だ。研究所に戻ってきてから色々説明をしたの
は幸太の役目で、それ

以降、形式的に見回りをするのが常になっている。といつてもその
頻度は曖昧で、最後に

マンションの住人と顔を合わせたのがいつだかはつきりしない。そ
の間、この女性が一人

でこの写真と向き合っていたのかと思うと申し訳なくなる。だが、
それは全員に当てはま

ることでもある。全ての人間は、周りの誰かを失う機会を持ってい
る。それが他人に埋め

られるかと思うと、決してそうではない。幸太は、その痛みに他人
を使つて蓋をしてしま

うよりは、向き合うことのほうが大切だと思っている。心がその人
を懐かしみ、涙をもた

らせてくれることは、その時には気づかないかもしれないが幸せな
ことだ。時が経てば、

いつしか薄らいでいくことは否めない。その痛みが消えることはな
くても、同じ心の悲鳴

を取り出せるかと問われれば頷くことは出来ない。そして、それは

必ずしも幸せではない。

「あ、でも幸太くん達に、ダリアから助けて貰ったことは感謝している。あの子はダメだ

ったけど。たまにこうして様子見に来てくれるのも嬉しいし。入って？」

彼女は、救助された時よりも顔色が良くなった。たとえ半歩ずつでも進んでいる証拠だ。

以前は、こうして誰かを引き入れようとさえしなかった。そのことに安心する。

「いや、今日はあんまり時間がないんだ。あのさ、最近マンションで変わったこととか、気づいたこととかない？」

この女性はかなり長くここにいる。聞くならばこの女性だ。たとえば他人との交わりがなくとも、新しい人間が来れば顔を覚えるし、消えれば疑問に思うはずだ。

「変わったこと？」

幸太を引く手を緩めると、彼女は斜め上に視線を泳がせ考える様子を示した。

「なんでもいいんだけど。変なものを見たとか。誰か最近見ないとか」

さりげなく核心に近づきたい幸太は、言葉を促しながらもゆっくりと彼女の答えを待っていた。

「ここでは仲良くし合う人もいないからね。あ、そうだ。誰かが、六階の山本さんの姿が見えなくなっただって言っていたわねえ」

「わかった。じゃあ用事足して、そのあとまた来るから」

そう言い残すと、残念そうに眉を下げる女を残し、幸太は六階への階段を昇ることにした。もう昼に近づき、太陽も高い位置まで上っているのに外を歩いている人間はほとんどいない。階段で誰とす

れ違うことも、足音が聞こえることもない。いつから人間同士、こんなに係わり合うのをやめてしまったのだろうと、幸太の心は少し重たくなった。ダリアのせいもある。日々襲われることや生活に抱く不安から、他人に興味を持つ余裕もなくなり、みんなが引きこもるようになった。どうしてその傷を癒し合うことが出来ないのだろう、と溜め息を漏らしそうになって、自分にも当てはまることを認めざる得なかった。幸太でさえ、自分の傷を仲間には見せていない。それが秘密だと言うわけではなく、言っても分かって貰えないと諦めているのだ。みんなそうなのだろうか。このマンションを見るといつも思う。人間は孤独で戦っている。心の中では寂しさと恐怖でいっぱいにくせに、それを表に出すことが出来ず藻掻いている。

六階に着くと、そこにも人影はない。こんなにも希薄な関係である建物の中で名前が上がったからには、山本は相当姿を見せていないのだろう。幸太は、半年ほど前に来た山本の部屋の前へとやって来た。その間、山本とは数回さえ会った記憶はない。顔を思い出そうとしてもぼんやりと浮かぶだけだ。姿を見かけたのは、たけしの隣で監視カメラを見ていた際でしかない。山本は一人暮らしの初老の男性だ。この生活に痺れを切らせて外へと逃げ出す若者とは訳が違う。それでも、姿を見せないからといって誰も訪ねてはいかないのだ。それが上辺だけの付き合い、人間関係の希薄さを表していて余計に悲しくなる。

もしかしたら隣の住人の人数や構成を全く知らない人も少なくないかもしれない。だが、幸太自身も、住人に興味を持つことも、心配することもなかったので、同罪と言われても仕方なく、誰を責める気にもならなかった。

ドアの前に立ち、耳を澄ます。期待はしていなかったが、中からは物音一つ聞こえない。

「山本さん。幸太です」

幸太のことを忘れるはずはない。出掛けているのかと思うが、この敷地の中で行く場所もない。住人は娯楽などすでに忘れてしまっ

ている。寝ているのだろうか。だが、ふと目にした隣の部屋に、幸太は胸がざわついた。

「隣、渡辺さん？」

一瞬不吉な想像が頭の中を駆け巡る。いつもおいしい料理を作ってくれ、優しく話し掛けてくれていた彼女が、部屋で静かに人を殺す情景。そして、手足や頭部に至るまでの身体を全てばらばらに切断し、どう処分しようかと部屋で思案している姿。その後、彼女ならどうするだろう。たけしは紙袋から血が漏れていたと言っていた。それを持って玄関に現れ、食事の支度をしたということか。そうすると、やはり食事に使われたのか。たとえそうだとしても、もし料理に使用したとなれば、必要なのは肉だけだ。骨があると却って怪しまれる上に、場所をとる。どういうことだ。

幸太は視線を山本の部屋から、渡辺の部屋のドアへと移した。すでに幸太の中で精神異常者的な性格を持つ殺人鬼に変貌した渡辺は、今は昼食の準備をしている頃だろう。部屋

に鍵はかかっているだろうか。ドアノブを回してはみたが、当然開かなかった。一旦戻っ

てたけしに報告しなければならない。幸太の脳裏に、マユの笑顔も浮かぶ。ここに来る前

に、マユのところへ行く約束もしたのだ。マユの隣で笑っているアイの顔を想像し、ふっ

と頬が緩む。今日は忙しい。幸太はため息をつく。階段を下った。

と、その時だ。階段の上は高台になっているので、森の向こうも見える。普段は落ち着

いている森で、鳥の鳴き声がした。ふと目をやると、ダリアだ。奴らだ。普段は森に人間

がいないと知ってか近付かない奴らの姿が見えた。そのダリアは、幸太の言葉を吸い取る

に充分に値した。街で見かける奴らは今まで滑るように猛突進していたが、今視界に入っ

た奴は浮いているようだった。驚きで目を瞬き、もう一度同じ所を見るとそこに奴らの姿

はない。見間違いだろうか。これもたけしに報告しなければならぬ。なぜこんなにダリ

アは進化し続けるのだろうか。

研究所までの道を辿ると、まだ血痕は残っている。アイ達が見た時に動揺するのを恐れ、

幸太は地面の砂をかけて消す。幸太の中で、アイを守りたい気持ちが膨らんでいく。何年

もカメラでその姿を追い見守ってきた。海という大きなケースの中で笑う、泳ぐ、走るア

イを。だが今は違う。アイは手の届くところにいて、自分が守る役割を担えている。アイ

を見ると、すべてを投げ出してもその手を掴みたい衝動にかられた。おととい、海にダリ

アがついに侵入したとき、仲間止められるのは分かっていた。危険なのは幸太も承知だ

った。だが、身体を止めることはできなかった。それとも心だろうか。

全ては、あの時に始まった。あの時と同じ過ちを繰り返さないために、幸太は全力を尽

くしたかった。彼女が生きていてくれるのなら後悔はしない。あの約束を守るために、幸太は自分が生きているのだと確信していた。

その決意を胸に、再び玄関の扉を開けた。

*

アイは幸太と別れた後、そのまま自室に戻ることなく隣の部屋に来ていた。マユがつま

らなそうにしていたこともあるが、書物に興味があった。ドアに鍵はなく、そのまま入ることが出来た。幸太の言うとおり、そこには

昨日訪れた幸太の父親の部屋よりもさらに多くの書物が並んでいた。部屋は薄暗いが、カーテンを開けると光が差し込んだ。マユはすぐに本棚から一冊取り出すと、目を輝かせてアイのところへ戻ってきた。

「マユ、一人で読めるよね。お姉ちゃんも色々見たいの」

アイの言葉に多少不服そうに頬を膨らませたものの、まゆは頷き部屋の真ん中に置かれた椅子とテーブルに向かった。ここにいれば安全だろう。アイは、とりあえず部屋中の本棚の前を一周した。目につくものが数冊ある。ファンタジーや推理小説。アイは水中で地面に字を書きながら文字を習った。読み書きに問題はないが、本にはほぼ触れたことがない。思えば大人は、外の世界を知ってほしくなかったのだろう。遠い世界を想像させるような、空想やファンタジーを一番嫌っていた。昨日日本を見たとき、マユもかなり興奮していた。今も妹と一緒に、アイもお伽話を選んで夢中で読み耽りたい気分だ。だが、それ以上に、ダリアや天文学、そして歴史に関する書物が多いのは一目瞭然である。

だが、周りが教えてくれる学習能力には限界があった。アイは自分がどれほど無知かを思い知らされたようで全てを呪いたくなった。色々知りたい、学びたい。今はそれしかない。一番分かりやすそうな物を選ぶ。それは分厚くて棚から出すのにも落としてしまいそうに重かった。表紙には大きく絵が描いてあるが、それが何を表しているのかはよく分からない。大きな丸く青い球に、緑の形のものはいくつか書かれている。アイにはそれが地球だという知識さえない。厚い表紙を捲るとそこには目次が書かれていた。人間の発生から、進化の仕方、そして現在に至るまでの歴史についての説明書きと、その写真が載っている。アイは高まる胸の鼓動を抑えられなかった。自分が生きる前に、こんなにも長い歴史があったのだ。それだけではない。世界はこんなにも広いのだ。アイはそれから一時間ほど、周りに目を配ることも忘れ夢中でページを捲り続けた。視線を下げていることに疲れた時だった。また後頭部に何度か味わ

つた一瞬の痛みが走る。それが数回のうちで一番強く、小さな悲鳴を漏らす。痛みが走った所を手で押さえたが、マユは気づかなかつたようである。悲鳴を漏らしたことが嘘のように、すでに痛みも消えている。これは何だろう。何かの前兆なのだろうか。首を傾げ再び本に目を戻そうとすると、突然部屋のドアが開く音がした。マユが、幸太だと思ったのか素早く腰を上げる。

だが、アイがドアに目をやると、そこに立っていたのは幸太の父親だった。なんと呼べばいいのか判断もつかず、アイはとりあえず会釈をする。マユはすぐに視線を本に戻していた。

「名波さん、こんにちは」

父親は静かに、そしてゆっくりと杖をつきながら部屋に入ってきた。昨日、彼は杖を持っていただろうか。アイは杖に気を取られていたが、父親はそのことに触れようとはしなかった。だが、アイが持っていた本を急いで閉じると、父親はまた静かにそれを抑止した。「あ、いや。そのままでもいいよ。読んでいなさい。楽しいでしょう」父親がアイのいる窓際まで来ると、マユが自分と同じほどの大きさである椅子を持ってくる。頭を撫でてやると、マユは澄ましたような顔で戻っていった。父親の杖を受け取り、椅子に座るのを手伝う。「ありがとう」

椅子に深く座ると、父親はアイに微笑みながら言う。杖をアイから受け取り、数回右足の膝を撫でる。そして静かな声で話し始めた。「これは昔ダリアに襲われたんだよ。喰われはしなかったが、この様だ。部屋ではいいんだが、長くは歩けない。だから部屋からあまりでないようにしているんだ」

そういえば、父親が食事に降りてくる姿も見たことはない。杖では階段も不便なのだ。だが、なぜ彼がこうしてこの部屋に来て、こんな話を始めたのか不明だ。父親は、アイの持っている本を一瞥すると、口元の髭を撫でる。

「名波さん。その本の表紙の絵はなんだかわかりますか？」

あいは首を横に振って、少し困った顔をした。

「分からなくても不思議ではない。むしろ当然だ。それは地球と呼ばれる星だ。君が今いるこの世界がその青い物体なのだ。青く広がるのが海だ。君が住んでいただろう」

アイの住んでいた海は、広がった。そして澄んでいた。だが、それもここまでとは信じられない。

「こんなに広がったの？」

アイの感嘆とも呼べる溜め息に、父親が頷く。

「そうだ、これが、アメリカ、イギリス、ロシア。そして中国。ここにも昔は人がいっぱい住んでいたんだ」

「アメリカ。さっきこの中に少し」

あいは本を見下ろし、再び適当にページを広げる。

「そうだ。いろいろ書いてあっただろう」

「その他の場所はどうなったの？」

「今はアメリカでも戦っている人も少なからずいることだろう。恐らくは、だ。だが、連絡を取ることも、助けに行くこともお互い出来ないのだ。それは君にも知識としてあるはずだが、昔……」

父親は、話しながらはつと息を飲み込み、何かに気が付いたように口を噤む。アイは写真に夢中になっていたが、不自然な言葉尻に顔を上げる。

「昔？」

父親はアイから顔を背けると、それまでの流暢さが嘘のように黙り込んだ。何度か離そ

うとしているのか口を開く度にかぶりを振り、最後にやっと言った。

「いや、時期にわかる。私からは話せないのだ。それよりも、気になったところはないか」

父親は話を逸らすためか、本を数ページ捲る。昔。アイが生まれてから、海の中で何か

あったのだろうか。もしかして、やはり自分は海で生まれたのではないだろうか。アイは

少し不安になり、知りたい衝動に駆られた。父親の態度は昨夜の幸

太に少し似ているのだ。

二人は何を隠しているのだろうか。

「あ、そういえば……。昨日幸太に話を聞いたからかもしれないんですけど、このダリアが現れたっていう時代は気になります。ここ、読んでいたんですけど」

そう言い、あいはページを最後の方に合わせる。ダリアが現れてからの記事事項は少なく、それが研究者の減少と、本を読むなんていうゆとりのなさが窺

えた。

「そうか。分からないことがあったらいつでも聞きに來なさい。分かる範囲で教えよう」

「はい。でも、なぜかここら辺を読むと頭が痛くて」

父親は、突如杖も持たずに立ち上がると、気色ばんでアイに迫った。その異常な迫力に、

思わずアイも飛び退く。マユでさえ、何事かと顔を上げているのが視界に入った。張りつ

めた空気の中、父親はまた口元を撫でる。アイの視線から逃れるように、身体の向きを変

える。そして何も言わずにドアへと歩き始めた。

「あたしになにか関係があるんですか？」

アイの問いかけには、杖が床を突く音だけが虚しく返ってくる。追いかけてよと思った

が、その背中が拒絶しているようで動けなかった。アイは、地球の描かれた本を抱え、、呆然と佇むしかなかった。

*

「おい、たけし！ 行ってきたぞ」

幸太はマンションから戻ると、すぐに四階の監視室に飛び込んだ。

たけしは画面の前で

はなく、UFOキャッチャーの作業でレバーの前に陣取っていた。

「おう！ ちょっと待て」

軽快にそう言うと、レバーを思いきり手前に引く。車を上手く捕らえたのを確認し、幸

太の方を振り返った。これはたけしの一番好きな作業で、どうやら機嫌もいいようだ。キ

ヤッチャーの画面では、車の中にりょうとしゅんが座っていて、バンパーにはダリアの肉

片がへばりついている。今日も激しくやり合ったことが窺えるその車は、なるべくなら乗

りたくないと思ってしまう。車の中の音声通信は切られているようで、二人の声は聞こえ

ない。だが、何か揉めているような空気が感じられるのは間違いだろうか。たけしは一休

止したいのか、椅子の上で全身を伸ばしている。うう、とうめき声を漏らした後、幸太に

向き直る。朝よりも若干良くなった顔色が、幸太の気を少し落ち着かせる。だが、それも

つかの間の休息でしかなかった。車の映像では、二人がさらに熱く言い合う様子が見て取

れる。

「で。どうだった？ 変わったことあったか？」

たけしが話しかけてきたことで、車への注意が逸れる。マンションの光景を思い出すと、

気が滅入る。だが、どうにか解決しなければならぬのだ。

「おお。とりあえず血の原因は分からない。ただ、気になることが一点。渡辺さんの部屋

の隣、山本さんの姿が最近見えならしい。みんな付き合いが少な

いから、他にも消えた

人はいるかもしれない」

たけしは立ち上がると、カメラが並んだ前の椅子にどっかりと身体を沈める。じっと画

面を見つめながら右手で顎の下に手を置き考え込んだ。

「そうか。とりあえず、誰が消えたか把握するか。それから渡辺さんに聞いてみよう」

「でも、たけし。渡辺さんが……山本さんを、殺害したとは限らないだろう？ 山本さん

も少しすれば戻ってくるかもしれない」

幸太はそれを信じたくない気持ちの方が強かった。彼女は、そんなことをする人間だと

信じられない。たけしはいつも冷静沈着だ。感情よりも理論で動く。だからこそダリアの

攻めてきた群れの中から、幼い子供ながらに逃げ出せたのだ。もしその場で泣いていれば、

おそらく先代の駆除隊の助けは間に合わなかっただろう。必死で取り繕う努力をしてみる

も、たけしには通用しなかった。

「だから、とりあえずは調べるだけだって。把握しないと始まらないだろう。それに、幸

太だって、あの血を見ただろう。マンションの前まであるし、量も半端ではない。住人か

ら何も言われなかったのが不思議なくらいさ」

結局は答えを出すしかないのだ。臆病になりかけた自分を戒めるように深呼吸をすると、幸太ははつきり頷いた。いけるとこまで行くしかない。

「そうだな。わかった。じゃあ、後で行こう」

「よし。じゃあ、夕飯が終わったらにしよう。夕飯も見てみたいしな」

二人が今後の調査について相談していると、一階の玄関から怒鳴

り声が聞こえてきた。ここは四階だ。ドアを開けている上に、いくら吹き抜けになっているとはいえ、相当の声で話しているに違いない。幸太はたけしと驚いて目を合わせる。

「あれ、りよう達か？」

やはり車の中で揉めていたのだ。その内容までは聞こえないが、アイ達には聞かせたくない。幸太は急いで部屋を出ると、階段を下りていく。期待もしていなかったが、たけしが追ってくる気配はない。途中、幸太が一階に着く前にしゅんはホールの方へ走っていつてしまった。

「おおーい。りよう！」

階段の途中で呼びかけると、見上げたりようの顔は意外にも笑顔だった。

「おう。幸太！ 今日もやったぜ」

何を話していたのだろう。ガッツポーズまでしている。普段通りのりようだが、二人の間であつたことは隠したいということか。こういう時、彼は問いつめても話すはずがない。

幸太はりようの肩に腕を回すと、同じように笑顔を作つて言う。おそらく、それは今りようが浮かべているのと同じくらい不自然なものに違いない。

「よくやったよ。それより、お前ら今揉めていなかったか？」

間違いではなかった。それが一瞬だけ向けられたりようの冷めた目が物語つていた。次

に掛ける言葉を探しているうちに、りようの顔に笑顔が戻る。こんな時、幸太は全てを疑

いたくなる。人が感情を隠すのは当然だ。見せたくない物があつて然るべきだ。だが、何

かがあるなら聞かせて欲しいと思うのは、自分よがりの我が儘なのだろうか。幸太自身、

話していないことがあるのだ。だからこそ、余計に彼らの話題に踏

み込む勇氣もない。りようはするりと幸太の腕から抜け出ると、両手を降参するように小さく上げた。

「しゅんね。あいつ頭おかしいんだよ。ダリアのことでちょっと、な」

「ああ。そういうえば、今日俺マンションから戻ってくる途中に、ダリアが空中に浮いていた気がするんだけど。気のせいかな？」

すると、りようは顔から笑顔を消し真顔で頷いた。ふざける様子が一切無くなる。その真剣な眼差しが、幸太を信じ込ませるのだ。こいつは、仲間だと。幸太の中では、こうして疑う人間が一人ずつ抹消されていく。疑っては信じる。疑問を持つてはうち消す。結局誰だか分らない。

「幸太はもう見ていたか。それだ。しゅんと揉めた原因だ。俺たちも今日見たんだよ。奴らは水にも慣れたし、空も飛ぶ。完全な兵器と化してきている。これからの対策を話すうちにお互い熱くなつて」
「ああ、そういうことか。しかし、事実ならばドリルで戦うのも難しくなるな」

幸太は腕を組みながら、顎でホールを指す。しゅんはそこへ向かったはずだ。ダリアが実際にこんなにも急激に進化しているならば揉めている場合ではない。少しでも早く駆除隊にも動きが必要だ。なぜ、奴らは今頃進化しているのだ。何か原因があるのだろうか。予言が当たらない可能性もある。アイが現れたとはいえ、それも確信ではない。彼女を助けたのは、確かに幸太の本能だった。だが、それは何も証明出来るものがない。事実は、今起こっていることでしか確かめられないのだ。今は、横でりようが頷いていること、それが真実だ。

「そうだな。空まで侵略されたらもう人間には何も出来ない。少しでも戦闘機が残っていたり、それを操作できる人間がいればいいが、そんなの今の世界では皆無だ。そう多くは原料だって作れない。車だって、俺たちのがやっとだ」

「どうするか。人を増やすか……。それでも限られるな」

「地下やこの研究所でさえ、そのうちダリアには簡単に侵入されるだろうな。どうしようもないさ」

幸太は、りょうの言葉に絶望を覚え目眩がした。だが、ここで諦めて分裂するわけにはいかない。ホールの扉を開け、しゅんの姿を探す。たけしも呼んで今後を相談するべきだ。

部屋を見回すと、しゅんはホールの一隅で膝を抱えて座りこんでいる。顔を伏せてうずくまっているのを見て、彼の動揺が伝わる。ダリアが飛んだと分かれば、誰でもショックを受けて当たり前だ。幸太はホールに踏み込むと、声を上げて歩み寄る。

「しゅん。そんなに絶望するなつて。何か打つ手はあるはずだから。今までやってきたんだ。頑張ればいいんだよ」

なるべく明るい声を出しながらしゅんの元へ来ると、そのツンツンとセツトされた黒髪を幸太は軽く叩いた。それに反応し、ゆつくりと顔を上げたしゅんの表情は泣きそうだった。しゅんは、比較的にょうと一緒に行動している。おかげで幸太とは深い話をする仲ではない。眉毛の下がった、こんなしゅんを見たのは初めてで、表情に出さないまでも一瞬うろたえる。彼は、こんなに弱かっただろうか。

「幸太。俺、どうしたらいいんだよ」

その声も覇気はない。しゅんも、幸太と一緒に施設からやって来た。歳も同じだったことで幸太としゅんは喧嘩ばかりしていた。それが未だにライバル意識を生み、弱味を見せないようにしてきたこともある。しゅんには負けたくない、そんな気持ちの底にある。こんなにも泣きそうなところを出来れば見たくはない。

「何を言っているんだよ。大丈夫だから元気だせ。俺達みんなが付いているんだから」

「幸太は……知っているのか？」

ダリアが飛んでいるところを、実際に幸太はその目で見たのだ。ごまかす必要はないだろう。ここで自分が弱気になったら、落ちるだけだ。今はしゅんをやる気にさせなければならない。

「ああ……。今、りょうにも聞いた」

「……りょう、に？」

「ああ。でも、あいつも一緒に戦ってくれるよ。大丈夫だ」

「ああ。そんなことか。幸太、お前は何も分かっている」

しゅんは、驚いたように目を見張ったかと思うと、すぐに力が抜けたようにまた顔を伏せてしまった。そして、今度は鼻水を啜り上げる音までが聞こえてくる。しゅんはそれから何も話そうとはしなかった。ただ最後には生気のない顔で部屋から消えていった。

6 輪廻転生

アイは、幸太の父親が部屋を出ていった後も、そのまま本を読み続けていた。空腹を感じた時には、外は夕日が差し始めていて驚いた。マユはテーブルに突っ伏したまま居眠りをしている。

「マユ。マユ？」

何度か小刻みに揺さぶると、うつすらと目を開いたマユは部屋の中を見回した。目を擦りながら、拗ねたように言う。

「お兄ちゃんは？」

幸太が来るのを待っていたのだろう。だが、彼はまだ来ていない。幸太が約束を忘れるとは思えない。何かがあったのだろうか。

「お兄ちゃん忙しいみたい。まだ来ていないの。マユ、部屋に帰ろうよ。本は借りていこう。」

アイはマユを抱き上げると、反対側に自分も読み途中の分厚い本も脇に抱える。廊下に出ると、ラボ中が静まりかえっていた。本を読んでいる時は、この静けさが心地よかったが、こうなると不気味だ。

「マユ、お兄ちゃん探してくる」

部屋に戻った途端、マユは今まで寝ていたのが嘘のように元気な声を出した。止めよう

かとも思ったが、アイは本の続きが読みたいのと、建物の中ならば安全だと分かっていた

ので行かせることにした。マユが自分から行動するのは、地上に上がって滅多にない。少

しずつ元気になっていって欲しい気持ちは変わらない。

「早めに戻ってきてね」

アイが言くと、マユは笑いながら手を振って出ていった。

*

マユは部屋を出ると、すぐに階段を降りることにした。たけしは面白いことも言わないし、睨むように見つめてくるから苦手だ。四階にいるのは知っているの、なるべく近付きたくなかった。だが、どこでたけしは寝ているのだろ。どこかに自分の部屋があるに違いない。姿を見かけたら、すぐに逃げようと心に誓う。ホールを覗いてみようかと思ったが、その前に他の部屋を見てみたかった。さっきの本があった部屋はとても魅力的だった。あんな量を見たこともない。海でアイが見ていたのはダリアについての本で興味もなかった。だが、あそこにあるのは様々で、少しも飽きなかった。半ば探険気分でホールとは反対に足を向ける。一番手前にある部屋の前に立ち、ノブを回すと鍵がかかっているようだ。ドキドキしながら次の部屋の前に立つ。緊張で口の中が乾き、唾を飲みこむ。この静けさと、一人きりだということが緊張に拍車をかける。ノブに手をかけ、そっと回してみると、隣の部屋とは違う感触だ。回ったのだ。そのまま引いてみると、中の暗がり人影が少し見えた。その後ろ姿は、マユの良く知る優しい人物のように見えた。

「お兄ちゃん！」

マユは一気に駆け寄り、その背中に抱き着いた。

「離せ！！」

叫び声と共にマユは振り飛ばされ、頭を壁に打ち付けた。その衝撃は思いの外強く、マ

ユは床に倒れたまま動かなくなった。

*

外には明るさが皆無となり、窓を開けると食堂からの夕ごはんを告げる匂いが漂ってい

た。こんなにもいい匂いが、ダリアには関係ないというのだから不思議だ。彼らはなぜ血に反応するのだ。

「おい！ アイ！」

外を眺めていたアイが呼び声に振り返ると、幸太が部屋に飛び込んで来たところだった。

そして、その手にはぐったりとしたマユが抱えられている。

「マユ！」

驚いて幸太に駆け寄ると、アイは幸太の手から妹を奪おうとした。それは乱暴ともいえ

る仕草だったが、今はなぜマユがこんな状態になってしまったのかとパニックを起こして

いた。廊下からも入ってくる夕飯の匂いが、一気に不快なものへと変わる。

「ちよつと！ 何をしたの」

マユを抱いてみると、それは温かい。気を失っているだけの様子に安心する。マユは幸

太を捜しにいったのだ。なぜこんな姿になったのだ。幸太は、アイの奪い方に異を唱える

ことはなかった。だが、呆れたように溜め息を吐く。

「何もしていない。マユは階段で倒れていたんだ。どうして一人にしたんだ。転んだんじゃないか？」

アイはマユをそつとベッドに寝かせると、興奮して幸太に掴み掛かった。

「階段で？ 誰かが何かした訳じゃないでしょうね。マユは幸太を探しに行ったんだから」

「おい、ちよつと待てよ。誰もなんもしねえよ。何を言ってるの？」

「だって、幸太も……幸太のお父さんも何か隠しているでしょう！話してくれないじゃない。あたし達で何か実験するつもり？」

アイはマユを失ったらもう生きていけないと思った。その瞬間だ。

突如、またあの頭痛が襲った。いつもはそれも一瞬で治まるが、今回は耐えられる痛みではなかった。後頭部に突き刺されるような痛みがあつたかと思うと、それはすぐに前部、側頭部にも回っていく。

終いには目を開けていられないほどの目眩が襲い、アイは頭を抱えてたまま床に倒れ込み意識を失った。

*

幸太は、たけしと二人でマンションの一階の入口まで来ていた。アイが頭を抱えて意識を失った時、病気かと思いい時慌てたが、その後はただ安らかに眠っているように見えた。マユを見ても同様だ。声を掛けても起きないので、しばらく寝かせることにした。ホールへ降りても案の定誰の姿もない。監視室に足を向けると、たけしはダリアのことよりもマンションの映像に夢中になっていた。どうしても調べたいという彼の希望を願い入れ、幸太はこんな時間にここへ来ていた。たけしは運動神経があまりないので一人で何かをさせるのは避けたかった。幸太が先頭になり、階段を一段ずつ昇っている。後ろを振り返ると、想像通りにたけしの顔は青ざめていた。二階まで来た時に、昼間の出来事を思い出す。

「あ、俺今日あのおばさんに誘われたんだ。やべえ、色々あつて忘れていた。明日謝らなきゃ」

幸太が忙しいのは分かっているはずだ。だが、彼女が玄関先のあの写真を持ちながら泣いていないことを祈る。たけしにはその言葉さえ聞こえてはいなかったようで、必死で幸太の後を追いつけてくる。数分もしないうちに、再び問題の場所に辿り着いた。たけしの息が上がり、額に汗が浮かんでいる。早まる胸の鼓動を抑え、幸太は山本の部屋のドアを叩いた。小さな音が廊下に響く。事を大袈裟にしたいくないので、他の住人が廊下に出てこないことを期待した。と、同時に山本が出てこないことに焦りが生じる。

「おい、開けてみようぜ」

たけしが幸太に鍵を開けるように指示をする。なるべく勝手に入りたくはないが、緊急事態としていいだろう。研究所から持ってきた鍵を取り出すと、それは簡単に開いた。ドアを開けたというのに中からの反応はない。だが、確かに異常はあった。開けた途端に、

中から溢れ出る異臭に、幸太は鼻をつまんだ。ダリアの駆除や人命の救助に参加しているため、少しは物が腐る臭いの経験はあった。反対に、幼少に保護されてからほぼその腐敗臭を嗅いでいないたけしにとっては強烈だったようだ。唸り声とも言える奇妙な音を発したかと思うと、幸太が部屋に一步踏み込んだのをチャンスとしてか、背後にいたはずのあたけし自身は入らずにドアを閉めてしまったのだ。

「おい！ ふざけるな！」

ドアを振り返りノブを回したが、たけしが外側から押さえているように一向に開かない。

「くそ。調子がいい奴め」

鼻をつまんでいても、刺激臭が脳天から爪先までを麻痺させるように襲ってくる。やば

い、吐く。そう思ったのもつかの間、次の瞬間には、その吐き気が吹っ飛ぶくらいの衝撃

が待ち受けていた。

「や、……山本さん？」

部屋は一つしかない。靴を脱ぐとすぐにその唯一の部屋だ。左脇に小さな台所、右側に洗面所がある。彼は、部屋の中央にいた。とはいえ、返事の出来ない状態となっていた。

幸太は靴を脱がずに一步步それに近付いていく。呼びかけたのは、それが山本だという

推定でしかない。なんと彼の原形はすでないのだ。一気に襲ってきた恐怖からの震えと、

無惨な殺人への怒りでドアへ走って戻る。そしてまだ外から抑えているたけしに対して、

ここぞとばかりにドアを蹴った。何度目かに蹴った時、ドアが開き、その身体が前に転が

るのが見えた。幸太は廊下に出ると、急いでドアを閉める。たけし

はどうやら押さえつけ

ていたのではなく、ドアに倒れかかっていたようだ。真っ青な顔と
涙混じりの目で、焦る

幸太を見上げて訴える。

「こうた……俺」

「なに泣いているんだよ。お前が調べるって言ったんだろ。いいか、
大きく息を吸って、
止める。よし、来い！」

幸太は再び山本の部屋のドアを開けると、拒絶するように踏ん張る
たけしの頭を一発殴り半ば無理矢理引きずりこんだ。たけしは抵抗
することが自分の酸素を減らすことだと諦めたのか、入ってしまう
と大人しくなる。部屋に踏み込むと、幸太の隣で、たけしは大きく
息を吐き出した。それほどの衝撃だったのだろう。

「……これは、なんだ？」

「おそらく、山本さんだよ」

たけしが息を呑んだ。言うなれば、たけしの勘は間違いではなかつ
たのだ。そうしなけ

れば、この発見は未だに出来ていなかっただろう。そこにあったの
は、切断された頭部と

手足だった。綺麗に肉が削られ、残った骨が一行に並べられている。
一番破損がひどいの

は頭部だ。短い白髪が気味の悪いほど綺麗に残されている。頬の肉
は削ぎ落とされ骨があ

らわになっている。こんなにも肉が必要だった理由はなんだ。幸太
が考えていると、隣で

たけしが再びうめき声を上げる。両手で口を覆っているために、そ
の声は妙にくぐもって
いて聞き取りづらい。

「おい。もしかしてこれ……俺達が喰ったのか？ あのご飯に出る
肉……」

たけしは吐き気を再び催しているようだが、さらにそれに近付いていく。

「渡辺さんに聞いてみよう。たけし、触るな」

あんなにも嫌がったくせに手を伸ばしているたけしに、幸太が怒鳴る。すつと差し込む

だ月の光で、山本の頭部がライトアップされ余計に恐怖が身体を蝕む。何が起こっている

のかが、把握できない。もし渡辺がこんなことをしていたのならば、いつからだ。その時、

たけしが眼鏡をずり上げながら言った。

「でもこれ、おい。幸太、見てみるよ！」

幸太は、もう一度その欠片を見るなどご免だった。仕方なく、足はその場に残したまま

上半身だけ乗り出す。たけしが指を差しているのは、一番見たくない頭部だ。今までの怯えた姿が嘘のように平気でそれを覗き込むたけしに、駆除隊の戦闘を勧めたくなる。

「これさ、目玉がくり抜かれているぞ。渡辺さん、目玉も俺達に食わせたっていうのか。

不思議じゃないか？」

「目玉……？　そういえば」

金縛りが解けたように幸太も両足を動かしてそれを覗き込む。すると、たけしの言う通

り目玉が二つともなくなっている。もし何かの理由で喧嘩の末に殺してしまったとする。

死体を隠すことも、捨てに行くことも不可能だと考えた。丁度いいから、駆除隊に食べさ

せたのだろうか。それとも、精神的に異常をきたし殺すことに楽しみを覚えた。または、

何か意図的に食べさせられた。どれも実際にはあり得ないと思えた。それならば、この山

本は誰に殺されたのだ。もしダリアならば、更に大きな被害が出ているはずだ。

「たけし、隣に行くぞ」

幸太は立ち上がると、ポケットからさらにもう一つ鍵を出した。隣は渡辺の部屋だ。そ

こへ行けば、何か証拠が掴めるかもしれない。山本の部屋を飛び出すと、すぐに隣の鍵を

開ける。幸い、彼女はまだ研究所のホールにいるだろう。

「開いたぞ」

幸太のそれを合図に、二人が今度は争うように部屋に乗り込んだ。

山本の部屋と同じ間

取りのそこは、同じく真っ暗で、生活感はあるでもないほどに荷物がなかった。幸太は一氣

に廊下を走り、部屋を覗く。奥まで見回しても、そこに特に目立つものはない。やはり勘

違いだったのだと、安心感が込み上げ息を吐いた時だった。

「幸太、来てくれ」

たけしの鋭い一声が暗闇を引き裂いた。幸太が走って呼ばれた方へ行くと、たけしが待

っていた。洗面所の扉が開いている。たけしの顔をもう一度見ると、彼は諦めたようにか

ぶりを振った。それがどういう意味を表すのか分からないほど、幸太は馬鹿ではない。中

を覗くと、バスタブと洗面台が目に入る。山本の部屋と違うのは、そこには一面に血が広

がっているのだ。バスタブの中には肉の塊まで放置されている。幸太は息を飲み、身体が

動かなくなる。もう止めてくれ。幸太のそんな口には出ない叫びを無視するように、たけ

しが、トイレの便座を開ける。すると、そこにもミンチのように細

かく砕かれた肉片が詰

まっているのだ。証拠を隠そうとして流そうとしたが、量が多すぎたのだ。二人は呆然と

しながら、ただ渡辺が行ったこの惨劇の経過を頭の中で想像していた。初めに口を開いた

のは、たけしだった。彼が監視カメラで気づいたことから発覚した。その責任を感じているのか声が震えている。

「どうするんだよ、幸太。お前気づいたか？」

「……気づいたら、今こんなことしていないだろう」

非現実的な行動に、語尾が荒くなる。やりきれない思いが溢れ、洗面所の壁を拳で殴る。

「監視カメラはこんな部屋までは写さない。俺が見ている範囲では分からなかった」

たけしも肩を落とす。二人は洗面所から出ると、廊下で佇んだ。「ただ、これ本当に山本さんの欠片か？ これだと他にも犠牲者がいる可能性もあるな」

「そうだよな。幸太、お前どこで山本さんの話を聞いたんだよ。マンションで他に姿が見えないって言う人間は分からないのか？」

「いや、本当にこの人はたまたまだ。勿論、鍵を開ければどの部屋も分かるけど」

そう言い、幸太はポケットから鍵の束を出した。そこにあるのはまだ一握りで、研究所には同じ物があと四つある。

「全部見せてもらうか？」

幸太が頷こうとした時だった。軋むような音がしたかと思うと、玄関のドアが開いたのだ。時間配分を全く考えていなかった二人は、顔を見合わせた途端固まった。渡辺が帰ってきたのだ。戦うのか。それとも捕まえるのか。情があるのか。話せば分かると思ったのか。どうするか決着のないまま、二人の前にはこの部屋の住人渡辺が現れた。幸太達がいるとも思っていなかった彼女は、驚いたように目

を見開いたあと、静かに俯いた。

*

駅に停車したままの電車の中では、男の転がった死体を前に、一人の男が呆然としてい

た。携帯で繋がっている相手を、どうすればあの生物から救えるのだろうか。考えるだけで、男は口の中に胃液が逆流してくるのを感じる。声を失っていると、死体からまた一匹小さな生き物が飛び出してきた。集団に乗り遅れたことを焦るかのように、車内を転がるヒツと漏らした幸太の声に、一瞬立ち止まったそれが振り返る。動くな。自分の身体に命じる。じっと自分を見ていた二つの目玉は、すぐにホームに向けられる。そして、男には危害を加えずに去っていったことにほっとする。すぐに電話の向こうからは、焦った少女の声がした。

「逃げろって……。どこに？ どこに行けばいいの！ 幸太はどこにいるの！」

男は携帯を一旦耳から離すと電車を降りた。ホームは地上より幾分か高い位置にある。

この駅で降りたことはなかったが、辺りを見回すと近くに大きめの川が見えた。あれは確

か県内でも有名な物だ。夏になればそこでバーベキューをする人が多いのだ。あれならば、少女も分かるに違いない。

「よし。お前、養紅川まで来られるか？」

急いで携帯を耳に当て、再び話しかける。向こうは、未だに騒がしい。ショッピングモ

ールの中にいるようで、少女の泣きそうな声に混じって店内アナウンスが聞こえる。

「え、うん。それよりも、あたし……妹も心配だよ。真由を迎えに行つてからその川に行

くよ。幸太は先に行って待っていて」

「馬鹿！ その間になんかあったらどうするんだよ！」

こんな時に優しい言葉を掛けられない自分に舌打ちを漏らしたくなる。結局はいつも感

情をコントロール出来ない。自分が危ない今、その緊張感が苛々に繋がる。少女に当たっている場合ではない。

「だって……、それならどうすればいいの！」

電話の向こうの少女の声は、すでに泣き声に変化している。それを聞きたいのはこっち

だ。そう言いそうになって、ぐっと堪えた。落ち着け、落ち着くん。どうすればいい。

「愛。とりあえず、俺がお前を迎えに行く。そうしたら、真由ちゃんを迎えに行こう。それまで待つていられるか？」

必死で宥めるように話す。グスグスと鼻水をすすする音が聞こえ、愛の頷く姿が見えたようだった。

「わかった。待っている。早く来て……」

そう言うと、場所を告げて電話は切れた。川が安全かは分からない。しかし、人混みに

はいないほうがいいと思われた。幸太は急いで改札を出ると、駅前はずでにパニックに陥

っていた。道路に飛び出す人々に対して、行き交う車がクラクションを鳴らす。信号など

最早機能していない。急ブレーキをかけて車が止まり、そこに後続の車が追突、炎上する。

ブレーキを踏まずに突っ込んできた車が人を撥ね悲鳴が飛ぶ。だが、よく見ればその悲鳴

は事故だけのものではない。あの生き物が徘徊しているのだ。車の

いる通りは危険だ。電車に乗るのも無駄だ。タクシーなど以ての外だ。電車に乗るのも自殺行為だ。他人と関わることさえ自殺行為に思われた。突如、あの生き物がまた飛び出してきたらと思うと、吐き気がこみ上げる。自力で行くしかない。この駅からなら、走れば一時間ほどで着くはずだ。一日中、仕事で歩き回った幸太には苦痛だったが、愛の顔を見るまで安心は出来なかった。幸太はすぐに鞆を抱えると、愛が待つ町へと走り出した。その途中、腹からあの生き物が飛び出る人間を見かけたので、すぐに遠回りをする。とりあえず走る。どこだ。

「幸太！」

二人でよく買い物に出掛けたデパートの前で、大きく手を振る愛が見えた。この街にも

あの生き物が現れたのか、そこら中で人々が右往左往していた。愛と会えたことにほっと

して足を緩めると、彼女のほうから幸太の胸に飛び込んできた。迷うことなく、それをきつく抱きしめる。

「無事でよかった。……行こう！」

「体操部だから、多分体育館だよ！」

愛の手をしっかりと握りしめ、幸太は再び走り出す。人混みを抜け、裏道に入る。愛の

妹である真由が通う小学校は、そこからほど近い場所にある。それでも、愛に一人で行か

せたくはなかったのだ。二人がそこへ着いたのはそれからすぐだった。大きな建物が校門

を入ってすぐの所にある。扉はすべて閉まっていて、中からは物音

もしてこない。放課後

だからか、子供達はほとんど下校しているのだろう。もしかしたら、真由もすでにいない

のではないかと考えたが、愛は幸太の手を離すと、建物の扉に手を掛ける。

「開けて確認してみるね」

愛はしつかりとした声で言うと、扉を開けようと力を入れた。だが、いくら踏ん張っても動かないようだ。

「開かない。こんなにこの扉重かったっけ？」

愛は、それでも何度も力み続ける。やはりみんな下校したんだ。おそらく鍵がかけられているのだろう。幸太はそれを確かめようと、体育館の床の高さにある小窓を覗いた。そこから見えた光景は、幸太の想像を絶するものだった。抑えられずに絶叫をし、慌てて口元を押さえた。視線を移して体育館入り口の扉を見ると、その内側には大量にあの生き物がへばりついているのだ。

「愛！ 開けちゃダメだ！」

だがその声は一步遅く、愛は力任せに扉を開けることに成功していた。幸太の視界には、

外に出たがっていた奴らが、愛の身体全体を這うようにしながら一気に飛び出したのが見

えた。愛の悲鳴が響く中、幸太は喉が干切れるほどの声を上げて、愛の名前を呼んだ。

*

「おい、幸太。どうしたんだよ」

肩を叩かれ我に返り隣を見ると、たけしが顔をしかめて幸太を見つめていた。

「ああ。わりい。ちょっと昔のことを思い出していた」

「昔のこと？ 俺たちの昔なんて、ダリアの駆除作業関連しかない

んじゃないのか」

たけしは半分自嘲気味に笑う。それよりももっと過去の思い出なんだよ。そう言いたいのを堪え、曖昧に笑う。幸太もそれを頭から振り払おうとかぶりを振り、目の前の人物に視線を当てる。渡辺は幸太達の姿を見ても、少しも慌てることはなかった。いつかこうなることが分かっていたかのように微かに頷いた。そして、今に至るのだ。気分が悪くなるので洗面所は閉め、部屋に移った。幸太とたけしの正面には、渡辺が正座をしている。だが、その眼に悪びれた様子はなく、まっすぐに幸太を見つめ返していた。

「渡辺さん、どうしてこんな事をしたんですか。話してくれますよね？」

幸太は、張り裂けそうな胸を右手で押さえながら聞いた。彼女は否定をしなかった。自分たちを裏切るような行為をしていたのだと知って胸が痛む。本物の刃物を当てられているように、身体が冷たかった。渡辺は一つ頷くと、丁寧な仕草で頭を下げた。それはここ最近で見た彼女の、一番落ち着いてまともな行動に見えた。

「すみませんでした。何か調べられているとは思っていたのですが、ただ、最近本当に、材料も不足してしまって、特にお肉を手に入れるのが大変だったんです」

「肉が不足？ それだけで？」

たけしが啞然としたように再度尋ねる。それは詰問口調だったにも関わらず、渡辺は口

を噤もつとはしない。それよりも自らの意思を主張するようにはつきりと言った。

「皆さんには力を付けてもらわないといけません。でもお話すると気持ち

悪いと言われそうだったので、仕方がなかったんです」

仕方がない。それは、幸太の頭を殴ったような衝撃を持っていた。それはいつのときも、

幸太達が決して口にはしないと決めていた言葉だ。誰かを救えなく

ても、物事が上手くい

かなくても、絶対に仕方がないと諦め、自分たちを自らで許さないとしていた。それは所

詮逃げでしかない。それが、こんなにも簡単に主張されてしまうのだ。

「なんだよそれ！ 俺たちのためだっていうのか。こんなのをいつからやっていたんだ

よ。気持ち悪いなんてもんじゃない」

「たけし！ 落ち着け」

興奮して渡辺に掴みかかりそうな勢いのたけしを両手で押さえ、幸太はなるべく冷静に

聞いた。彼女は、どうしてここまでやったのだ。それが分からなければ、裁くに値するか

は判断出来ない。まずは、真実だ。

「他に、誰を殺した？」

数秒の沈黙が起こる。ごくろ、とたけしの喉が鳴る。山本のような死体を見るのはご免だ。だが、それまで神妙に頭を下げた渡辺が急に顔を上げたかと思うと、突如間抜けな声を出した。

「は？」

それを見て、たけしが同じ声で「は？」とオウム返しをした。幸太が横を見れば、たけしまで間抜けな顔をしている。やはりここから幸太の役目のようだ。

「渡辺さん。とぼけないで事実を教えてくれ。後のことはそれから考えるよ。隣の部屋の山本さん以外は、誰を殺したんだ」

尋問をするつもりなどない。しかし、たけしは腑抜けのようだし、他に頼る人間もない。彼女がこの調子を貫くつもりなら、こちらの態度も変わらざるを得ない。それを渡辺にどう伝えようか考えていると、彼女はまたしても間抜けな声を出した。ただ、今度は先程よりも少し剣が混じる。

「誰をつて……。誰も」

「何を言っているんだよ。ほら、あそこに肉の塊があるだろう。隣の部屋に山本さんの遺体があるのも証拠だ。それを、俺達に喰わせたいんだろ！」

たけしは次第に大きくなっていく自らの声を抑えられないように暴走させる。またしても幸太が彼の腕を掴む。すると、たけしはすつと身体を力を抜いて床に座り込んだ。そのまま、また俯いて間拔けな顔。その感情の起伏の激しさに、幸太は辟易する。しっかりとくれよ。心の中で幸太が呼びかけた途端、彼はまた立ち上がる。その腕を押さえようとしたが、するりと抜けられる。たけしは洗面所の前まで歩いていくと、ドアをバンバンと叩きながら聞き取れないほど小さな声で何か訴えているようだ。誰に。おそらく、彼自身にたけしも自分を奮い立たせようと必死なのだ。

「おい、たけし。お前いつも冷静なのに、キレると本当にやばいな。今は、お前が一番おかしいぞ」

幸太は軽く宥めてみるが、たけしに変化はない。諦めて渡辺に向き直る。

「渡辺さん。俺達にあなたのことちゃんと言明してよ。誰も殺していないというなら、あそこにあるのは何？」

「ダリアです」

これは逆効果だった。部屋中に沈黙が漂った次の瞬間、たけしが猛烈な勢いで戻ってきた。

「おい！ あれがダリアだって！？」

幸太は言葉を失っていた。しかし、どこかでやはり彼女が殺人を犯していないことに安堵を覚えていた。どうしても信じられなかった自分の勘は間違いではなかったのだ。だが、そうだとすれば他に犯人がいることになる。渡辺は、また視線を真っ直ぐに起こし、たけしを見て話している。

「私は出来る限りのやりくりをして調理に励んできました。でも、材料は減っていくばかりだし、特にダリア駆除に進展もありませんでした。幸太さんのお父さんもあまり堅い物を食べられないように

なつてきましたし」

「ああ、親父がな」

幸太が相づちを打つ。

「それである日、車に付いてきた肉を見かけたんです。……ダリアの」

彼女は、視線とは裏腹に必死に声を絞り出しているようだ。たけしの睨むような視線に気圧されているのかもしれない。たけしの口から出てくるのは、低い重圧的なものだ。

「それで？」

「ちよつとした思いつきでした。煮たり、焼いたりしたら食感も臭いも牛肉と変わらないと思っただんです。ここ最近、ダリアの肉を求めて外にも行きました。監視カメラに気を付けながら」

「そうだな。俺、そんなの気づかなかった」

たけしも両手で顔を覆いながら呻くように言った。彼は自分の仕事のミスだと認めるのが怖いのかもしれない。自分が全てを把握出ていると思った敷地内、監視カメラで見落としがあったのだ。

「皆さんが気づかないことを良いことに量も増えていきました。洗面所で解体して、少しずつ調理場へ運んでいたんです」

それが彼女のミスだった。運が悪くたけしが目撃をし、この事実が露呈された。それが唯一たけしを救ったことかもしれない。

「俺、気づいたんだ。渡辺さんが持っていた袋から血が垂れているのをカメラで見たんだ」

「そうですね。とうとう見つかってしまいましたね」

遅すぎた。幸太と同じ事をたけしも感じたのか、小さく舌打ちを漏らす。だが、彼女が

したことも研究所のためだったのだ。それに、まだ重要な話は残ったままだ。幸太は今度

こそ彼女の一挙一動を見逃さないよう覚悟を決め、言った。

「それじゃあ、山本さんは？」

彼女は確かに、強い視線で幸太を見つめ返し、そして首を振った。

はつきりと、横に。

幸太の口から溜め息が漏れた。そんな幸太の肩をたけしが掴む。

「幸太、やっぱりだよ。そうだ！ だから、目玉もなかったんだ。

渡辺さんが目玉まで取

るはずもなかった」

「じゃあ、誰だ？」

「そうだな。他に誰か変な奴がいるのか？」

三人の間に緊張感が高まる。今度は見えない敵を探さなければいけなくなってしまうた

のだ。いや、見える方法は、まだある。

「幸太。とりあえず過去のカメラの映像をしてみるか。怪しい奴が写っているかもな」

「よし、戻るぞ！」

幸太は、渡辺の一件は不問に付すことにした。自分たちのことを考えて彼女も無理をし

ていたのだろうし、そのために最近考えすぎていたとのこと。むしろ申し訳ない気持ちも

あった。せめて相談をして欲しかった。たけしもそれで納得し、今後は使わないと約束を

交わす。今はそれどころではない。またどこかで新たな殺人が始まっているのかも知れない。

そして、幸太達はラボに戻ってカメラを検証することにした。

*

「愛！ 大丈夫か！」

何かが体中を一瞬這っていった。その衝撃で、どうやら気を失っていたようだ。目を開けると、目の前には真つ青な顔をした幸太がいた。上半身を起こすと、何事もなかったように身体は動いた。

「大丈夫。……さっきのは？」

あれは何だったのだろう。扉を開けた途端、無数の物体が飛び出

してきた。あちこちを触られる感触がしたが、そこに痛みはなかった。気を失う瞬間に見えたものは、ゴマ粒のように小さな黒い点だったが、あれは何だったのだ。幸太は愛を強く抱きしめると、無事を確かめるように身体のアちこちを撫でた。

「さっきの奴らが変な生き物だ。お前が襲われるのを見て慌てたよ。電車の中で、あいつら人体から出てきやがった」

愛はそんな幸太の肩越しに、体育館の中で横たわる数々の人物が目に入った。思わずその胸を両手で押しつけ、立ち上がる。その中に自分の探し求めていた物がいたのだ。

「真由！」

体育館の中から応答がないのは、人々がこうして倒れていたからだ。下校していたわけではない。一番手前のマットの上にいる女の子の顔を見ると、両目がない。しゃっくりのような悲鳴を上げ、愛は妹に駆け寄った。遠くからでもその姿はすぐに分かった。肩より少し長めの髪を、毎日ポニーテールに結っているのは愛だ。それを振るように、元気に歩くのがいつもの真由だ。こんな風にマットの上にごったりと横になっていることなど想像もしていなかった。焦りから、走っても走ってもその距離は縮まらない気がした。愛は妹に駆け寄ると、その小さな身体を抱き上げた。こんなに軽かっただろうか。むっとする汗の臭いが体操服から染み出す。それが余計に彼女が死んでいることを認めさせなかった。だが、すでにそれは冷たくなっている。真由が着ている体操服を胸までたくし上げ、さらに驚く。内臓がすべて食い尽くされてしまっているため、皮一枚の身体がだらりと愛に被さった。だから、重みを感じなかったのだ。

「い、いやよ！ 真由は死なない！」

愛がいくら泣き叫ぼうと、幸太の否定は聞こえない。

「愛」

幸太が伸ばしてきた手を、一瞬早くすり抜ける。その体温は今最も感じたくないものだった。真由は冷たい、それなのに自分だけ温かいと認めたくない。どうして真由は死んだのだ。もう少し早く来

てあげていれば、助かったかもしれない。どうして来られなかった。なぜ……。そう、言われたからだ。待っていると、言われたから。

「……幸太のせいよ」

さらに手を伸ばしてくる幸太を、愛は睨みながら言う。伸ばされた手は目的物に届かずに宙を彷徨った。それを受け止めてあげるほどの余裕はなかった。その優しさが分かっているからこそ、傷つけなくなる。思った通り。目を見張った幸太の顔を見て、愛は少し嬉しくなる。もっと、もっと傷つけ。

「幸太のせいよ。真由が死んだのは」

「おい、愛……。何を言って……」

幸太に話す隙は与えてはいけない。行き場を失った感情が、外に出たがっている。窓を開けて開放してあげなければいけない。閉じこめていると自分が虜になって死んでしまう。

「そう、幸太のせいよ。幸太が待っているなんて言うから。どうしても一時間も来なかった

のよ。あんたが真由を殺したんだ。助けられたかもしれないのに！」

愛は我を失っていた。知らぬ間に流れる涙を拭くこともせず、ただ夢中で罵った。下を

向いて唇を噛みしめる幸太に八つ当たりをしただけだ。愛は、幸太に目の前からどいて欲

しかった。愛自身、これが無暗な言い訳だと分かっている。それでも、少しでもぶつける

対象にできてしまったただけだ。こんな自分は嫌いだ。幸太に当たりたくないなどない。体

育館から出ようと立ち上がった時、愛の右腕が急に痛んだ。痺れるような感覚に、肘を押

さえてうずくまる。

「愛！ どうした」

あんなにもひどいことを言ったのに、幸太はすぐに駆け寄ってきて

くれる。どうして、

どうして怒ってくれないのだろう。幸太は愛が置いた手を退かすと、着ているカーディ

ガンをまくし上げる。

「これ……」

幸太が言葉を失ったのを見て、愛の顔まで青ざめた。幸太が見たそれは、間違いなく電

車の中での男の症状と似ていたのだ。膨れ上がったイボ。その中に潜む黒い陰。愛もそん

な幸太と同じように、自分の肘を見て絶句した。ほんの数分前まではなかったはずの出来

物がある。それどころか、何やら動いているようだ。痛みはさらに酷くなり、頭まで痺れ

るようになってきた。胃に不快感を覚え、トイレに行こうと再び立ち上がろうとした時だ

った。燃えるような痛みと、幸太の悲鳴が同時に愛を襲った。肘を見ると、なんと自分の

身体の皮膚が破れ、そこからぼとと小さな物体が流れ出ているのだ。初めは、それが

血だと思った。しかし、それは床に着地したかと思うと、今度は愛の身体を足から上って

くるのだ。ふくろはぎ、へそ、胸。振り払おうと身体を揺すっても、そいつらは逃げるこ

とも落ちる様子もない。最早悲鳴も出なかった。そいつらは一瞬で、愛の顔まではい上が

ってくる、口の中に潜り込もうとする。何度か吐き出そうとしたが、奴らの勢いは抗う

ことが出来ない。勝手に喉奥へいき体内流れていくのを感じた時、愛はまた床に倒れ込ん

だ。次第に抵抗する力も失われていく。愛が薄ら目を開けると、床

に腰が抜けたように座

る幸太がいた。愛は、どうかして幸太を助けたかった。私に近寄らないで。その祈りが

近付いたように、尻で床を擦るように少しずつ後退していく。愛は、自分の身体が侵略さ

れていくのが手に取るように分かった。身体のアチコチが不気味に軋み、勝手に動く。額

に脂汗が浮かんだ。幸太、逃げて。何度も心の中で繰り返す。そして、やっとそれが声になった。

「こう……た」

だが、口を開けた途端、そこから大量の生物が吐き出された。いや、自発的に出てきた

のだ。電車の中と同じだ。奴らは大きな目をそこらじゅうにギョロギョロと走らせるも寝

ているのはすべて死体だと認識したようだ。幸太、逃げて。愛の声にならない言葉が、脳

裏に浮かぶ。

「うわ。来るなよ」

幸太が小さく呟いた。その怯えた顔を見て、愛はもう一度口を開けた。だが、もう声な

ど出ない。八つ当たりをしたことを謝りたかった。幸太は心配して来てくれたのだ。むし

ろ、彼だけなら安全な所に行けたに違いない。巻き込んだのは愛の方だった。ごめん、幸

太。そう思ったのを最後に、愛の視界の先にいる幸太は奴らに侵略されていった。

*

マユは、後頭部に鈍い痛みを感じながら目を覚ました。

「お姉ちゃん？」

隣のベッドを見ると、なぜか姉も寝ている。そして額には濡れたタオルも乗せてある。興奮したアイが、幸太に掴みかかりながら倒れたことなど知る由もない。ただ具合が悪くなっただろうと思った。

「あれ、マユ。どうして寝ていたんだっけ……。あ、そうだ。お兄ちゃん探して部屋に入って」

一人でぶつぶつ呟きながら思い出しマユは後頭部に手を当てた。少々膨らみが出来ているようだが、確かに覗いた部屋には誰かがいた。幸太ではなかったのだろうか。姉がいつ起きるかと考え、へこんだお腹を撫でる。あの部屋は、結局誰のものなのだろう。なぜ頭が痛いのだろうか。何かされたのか。まさか、そんなはずない。マユにとっては危険なことも冒険要素の一つでしかなかった。頭の中であらゆるシミュレーションを試みる。行き着いた先は、最も単純でかつ危険なものだった。もう一度部屋に行くことにしたのだ。マユは、寝ている姉を振り返りながら部屋を後にした。ラボの中は変わらず静まり返っている。階段をそつと一階まで降りると、一度入ったその部屋の前に再び立った。そのときになって、足が竦む。怖い。だが、少しだけ覗いてみようと思ひ直し、部屋の扉に手を掛ける。思ったよりも簡単に開いたその間から覗き込むと、マユの足がガタガタと震えた。真つ暗な部屋に、今度は誰もいないようである。しかし、人ではない多数の目がマユを見つめていた。それも、終始止まることのない動きで……。

「だ、ダリア？」

マユの前には何個も積み上げられた、透明なケースがあった。そしてそこには無数のダリアの姿があった。大きさは全てがまだ十センチにも満たないようで、ケースの中を素早

く動き回っている。ケースは優に三十個はあろうか。これがすべて倒れたことなど

想像したくもなかった。この部屋にいた人物は、これを隠そうとしたのだろうか。

「お兄ちゃん……。ううん、おじさんに知らせなきゃ」

先ほどは、幸太を捜していて襲われた。幸太を疑うわけではないが、確実に居所が分か

っている方がいいだろう。それに、彼は分からないことがあれば聞きに来いと言っていた。

マユがその部屋を出ようとすると、背後のうちの一つのケースから大きな音がする。振り

返り目を凝らすと、同じくらいの大きさのダリアが身体を絡ませ戦っているのだ。お互い

が口を開き、噛みつき、そして一方が優勢に立ったようだ。敗者もそれが分かったのだろ

う、すぐに天井の蓋の方へ逃げる。しかしそれを追った勝者は、敗者の後方から狙いを定

め、相手の身体を鋭く引き裂いた。共食いだ。マユは一気にそこを飛び出すと二階へと走り出した。

*

幸太とたけしが研究所まで戻って来ると、玄関の前に人影があった。幸太は、なるべく

人手が欲しかったので、彼がそこにいたことに内心感謝した。

「しゅん？」

たけしは、反対に事実を探している今、余計な問題を持ち込まれるのではないかと迷いを出していた。駆け寄ってくるしゅんを手で制し、幸太に近づけないようにする。

「悪い、今ちよつと忙しいんだよ。また今度にしてもらえないか？」

だが、しゅんにはそのたけしの言葉など耳に入っていないようだ。たけしが幸太以外と親しくしようとしもないのも、こんなところでマ

イナスに作用する。しゅんはその手を振り切って幸太に詰め寄る。しゅんの顔は人間とは思えないほど真っ白だった。その鬼気迫った顔色に、幸太の顔も歪む。

「どうした」

尋常ではない。緊張しながら幸太が立ち止まって答える。たけしも諦めたのか黙ったが、急いでいる主張だろう、地面をつま先で何度も叩く。聞いている方が苛立ちそうなそれに、幸太が一睨みする。

「俺、話があつて」

消え入りそうな声でしゅんが呟く。幸太の脳裏に、ホールでうずくまっていたしゅんの姿が浮かぶ。あの時から、しゅんの様子はおかしかった。なぜ、あんなに悲しい顔をしていたのだろうか。嫌な予感がした。

「ああ。今からたけしと監視室に行くから、そこででもいいか？」

幸太の言葉にしゅんが無言で頷く。たけしが驚いた顔で見つめてきたのが分かるが、放ったまま歩き出した。すると、すぐにたけしが追ってくる。振り返ると、その後ろにはきちんとしゅんもついてきている。それに安心した幸太の耳元でたけしが囁いた。

「幸太、あいつおかしいぞ。もしかして山本さん、あいつがやったんじゃないか？ それで告白したいとか」

あり得ない話ではない。幸太は信じたくない気持ちと、自分でもその考えが浮かんでいたことに気づかされた。二人が話していてもしゅんが入ってくることはなく四階に着いた。部屋に入るとたけしがすぐに電気をつけ、そして今までのテープを全て保存してある棚に向かい最近の物をいくつか選んでくる。幸太は椅子に座ると、ドア付近で立ち往生しているしゅんに言う。

「しゅん。何だよ、話つて」

たけしはテープをデッキの中に入れて巻き戻している。そして、しゅんが無言でいる空気を和めるかのように幸太の肩を小突いた。

「なあ、幸太。お前、いつも俺がこんなテープを取っているのを無駄だと笑っていたよな。写っているのは、ダリアの死骸かマンショ

ンの住人の顔だけだつて」

眼鏡の奥で、にやつと目が笑う。幸太が返事をする前に、たけしがその視線をしゅんに移した。

「しゅん。きつとこれには殺人犯が写っているぞ」

その一言で、しゅんが動いた。自分に向けて発せられた言葉だと分かったのだろう。メカ担当のたけしと、駆除担当のしゅんでは動きの早さは一目瞭然だった。幸太が止めようとした時、すでにたけしは部屋が一番奥まで吹き飛んでいた。何が起こったのか分からないように身体を起こし、眼鏡を直す。殴られたのだと気づいたのは、痛む頬を押さえてからだだった。しゅんは、肩で荒い息でしながらたけしの前に立ち、見下ろしていた。そして、今まで我慢していた物を噴火させるように一気に話し出した。たけしを助け起こそうとしていた幸太が、しゅんに向き直る。これでは完全に仲間割れだ。

「おい！ たけし。お前、俺が何かしたっていうのかよ。殺人犯だ？ 何を調べているのか知らねえけど、ふざけんな。俺は、お前達を信用して話そうとしたんだ」

興奮したのか、顔を真っ赤にして拳を握りしめている。

「しゅん、どうしたんだよ。たけし、お前も謝れ」

幸太はしゅんに近づき肩に手を置くと、たけしに呼びかけた。たけしは気まずそうに謝罪のを口にし、しゅんは鼻を鳴らし下唇をつきだす。まるで子供の喧嘩だ。

「な？ しゅん。もういいだろう。何があつたんだ」

「殺人で、何だ？」

しゅんは話す勇気がないのか口を割らない。幸太に逆に質問をしてきた。ここまで来た

ら隠すこともできない。幸太は正直に殺人事件の疑いを話すことにした。巻き戻しをかけたいたテープが音を立てて終了の合図をする。そして自動で再生がかけられ、画面に映像が出た。

「マンションの山本さんが、異様な殺されかたをしている。おそらくこの敷地内の誰かにやられたんだと思う。それをこのカメラで確認するんだ。もしかしたら被害者はもつと出ているのかもしれない。急いでいるんだ」

しゅんは幸太の言葉を聞くと、さらに嗚咽を漏らした。たけしは、幸太の方を見て肩を

竦めた。まるで時間の無駄だ、といわんばかりだ。だが、しゅんは気合いを入れるように

深呼吸をし、涙の滲んだ目元を拭う。

「お前達。そんなことがあったのか。いや、そんなことだろうと思った。だから悩んだけど、幸太に話すのが一番だと思ったんだ」

「なんだ。どういうことだ？」

幸太は、しゅんの言っている意味を飲み込むのに少しの時間がかかった。何か知っていた

る口振りではないか。幸太が続きを促そうとした時、たけしの悲鳴にも似た声が響く。

「幸太！ これを見ろ！」

「りようだよ」

そのたけしの叫び声と、しゅんが呟いた声が重なった。

*

「マユ」

アイはまだ痛みに顔をしかめながら目を覚ますと、涙が頬を伝っていた。それを手の甲で拭うと、身体が妙に重かった。今まで見ていた世界は夢なのだろうか。それにしてはあまりにもリアリティのあるものだった。映像は隅々まで記憶に残っているし、物は確かに触れていた。そして、夢の一言では済ませられない予感を見逃せなかった。だが、夢の中の街は都会で、人もたくさんいた。アイの望

む世界なのだろうか。マユと同じ名前、同じ顔をした妹がいて、隣には幸太が立っていた。そして、ダリアがいた。アイの中でダリアは当たり前存在する物だったが、夢の中では違っていた。幸太の話は断片的にしか覚えていないが、彼の前で身体から飛び出すダリアがいたそう。そして、彼は何と言っていたらう。見たことのない生き物だと驚いていなかったか。幸太に聞いた話を想像して、勝手に作り上げた世界なのだろうか。それとも……。信じたくなかったのか。そこで、アイは隣のベッドに妹の姿がないことに気がつき、飛び起きた。額に乗っていたタオルが、ぬるくなってずるりと肩に落ちる。

「マユ？ マユ！」

夢の中で妹を失った時に感じた胸の痛みと、皮だけになった彼女を抱きしめた感触がありありと手の中に思い出された。裸足のまま、無我夢中で部屋を飛び出す。

「マユ！」

すると、ちょうど四階の監視室から駆け下りてきた三人と、アイが会った。

「あ、幸太！」

三人もアイを見て、驚いた顔で足を止める。たけしはすぐに階段を下りる一步を踏み出

したが、幸太はアイの元へ走ってきた。その顔からは焦りが感じられる。だが、今アイが

助けを求められるのは幸太しかない。それはおそらく数百年前と変わっていないのだ。

「アイ！ マユがどうしたんだ！」

たけしが待ちきれないように幸太の背中に向かって呼びかける。それでも幸太は一切振

り向こうとはしない。そうだった。どうして忘れていたのらう。彼は昔からこうして優

しかつたのだ。困っているときには必ず手を差し伸べてくれた。海で助けてくれた時もそうだった。一番に見つけてくれ、ダリアから守ってくれたではないか。マユも最初から何か特別なを感じていたではないか。あれは、夢ではない。その証拠に、アイは幸太の顔を見ただけで、その胸に飛び込みたい衝動に駆られた。マユがいな
い不安をうち明け泣き
叫びたい。

「マユが……いないの。もしかしたら、また幸太を捜しに行つたのかと思つたのに」

アイは幸太の腕に寄りかかるようにして倒れ、それをしゅんとだけが驚いて見ていた。

幸太はそれを支えながら、アイの背中をゆっくりと撫でた。

「どこに行つたんだ。アイ、マユを探しながらこつちにも付き合つてもらえないか？ 急ぎなんだ」

「うん」

瞬間、アイの中で整理出来ない感情が沸き起こつた。幸太に従つて平気なのか。またマユを不幸にさせるのではないか。そう思うと、アイの足は動かなかつた。幸太に握られた手だけが進み、足が地面に踏ん張る。幸太がアイの腕で後方に引き戻され呻いた。階段を下り始めていた前の二人が、見上げるようにして幸太達を振り返つた。

「……夢で」

今度こそたけしが苛立ちを露わにするように舌打ちをした。しゅんがも困つたように階

下を見ている。ただ、アイにとっては今どの選択をするかが重要だつたのだ。簡単には決

められない。もしも先にマユを探してくれないのならば、一人で研究所を走つた方がマシ

だと思えた。そんなアイの一言は、幸太にだけは通じたようだ。

「悪い。先に行ってくれ。すぐに追いかける」

アイ達の周りに漂う重い空気を察して、たけし達は目を見合わずと、幸太に向かって頷

いた。促されるようにして、もう一度アイは部屋に入る。どう伝えればいいのか分からない。

「アイ。お前もしかして」

沈黙を破るように幸太が切り出した。彼は、分かってくれるに違いない。アイが記憶を

見たことはごまかせないだろう。ゆつくりと幸太に向き直ると、顔を上げた。その顔は夢

の中と何一つ変わらない。悪戯っこっぱい目も、少し低い鼻も。アイの好きだった頬のラ

インも髪型も。彼はこんなにもそのままだったのに。もう一度会えたことが嬉しくて、瞳

には涙の膜が覆う。唇を噛みしめても、声が漏れそうになる。

「……さつき、夢で。マユが……」

どう説明すればいいのだろう。あれは、本当に事実なのだろうか。自分まで前世を見た

と言ったら馬鹿にされないだろうか。幸太は、泣き出すアイの頭を大きな掌で撫でながら、

その顔を覗き込んだ。

「マユが？ どうした……」

「マユが建物の中で倒れていたの。あたし達が探しに歩いて行った。重いドアを開けたら、

ダリアが……」

「アイ！ もういいから！」

急にアイの視界が塞がれた。懐かしい匂い。これは、ずっと昔にアイが大切にしていた

匂いだったのだ。その胸に顔をうずめ、アイは首を横に振りながら、

ただ吐き出すように

話し続ける。

「ダリアが出てきて、あたしの身体を覆った。子供達がたくさん死んでいて。その中にマユが」

幸太の腕に力が込められる。背骨に痛みさえ感じるその強さも、アイには逞しく思えた。

「ごめん。あの時、俺がお前を待たせなかったら、マユは死ななかつたかもしれない。俺

が悪かつたんだ！」

アイには幸太の顔が見えないが、その声が掠れている。こんな声を出すとき、彼は必ず

泣いている。その証拠に、さっきまで力が込められていた腕が、微かに震えている。幸太

は強いけど、弱い。ちよっぴり冷たいけど、やっぱり優しくかった。

「幸太。違う」

「アイ。ごめん。……ごめん」

「幸太、違うよ。この本に書いてあったの。発生時のダリアは傷口から体内に入ってたって。あの数日前、あたし達は外で遊んで擦り傷をいっぱい作っていたの。きっとダリアにはあの日より前に侵入されていったんだよ」

一度記憶の紐が解かれると、洪水のようにそれは押し寄せてきた。

幸太と遊んでいる場面。真由と喧嘩した日。そして、昔の友達。アイが思い出した辛い思い出も、幸太と一緒にいて受け止めてくれた。だが、幸太はどうだっただろう。彼は、一人でこの記憶と向き合ってきたというのか。長い間、自分の目の前で人が死ぬ瞬間を夢で見ていたのか。そんなのは辛すぎるではないか。

アイは幸太の胸から顔を出すと、その頬に手を当てた。やはり彼の頬にも涙が伝い、それを静かに拭いてやる。それがこの数年間の代償としてアイが今出来る全てだった。

「たとえば、あの日より前にダリアが身体に入っていたとしても。それでも、俺が仕事ばかりして会う時間も作れなかったのは事実だ。気づいてやれなかった。あの頃、俺は働き始めたばかりで自分のことしか考えられなかった」

アイはかぶりを振った。責めるべきは、彼だけではない。

「幸太、もういいよ」

「いや、聞くんだ。俺は、心配してくれるお前のことを重いとさえ感じていたんだ。お前の存在が当たり前で、有り難いと思っていなかった。罰が当たったんだ」

「ダリアにはそんな関係ないよ」

思わず、アイの声も大きくなる。それでも、幸太は口元で僅かに微笑んだ。

「俺は、この世界に生まれてから前世を夢で見るようになって、いつまでもお前に怨まれているような気がして死にたくなった時もあった。でも、偶然だ。海の画像でお前を見たとき、すぐに分かった。愛だと。そして真由だと。あの時の俺の気持ちは、おそらく誰にも分からない。その夜、俺はこの奇跡に泣いたよ。本当にお前のことを愛していた気持ちも、愛しさも。後悔も。それから、ずっとお前を俺なりに見守ってきた。今度は絶対に死なせないと」

幸太の眼が、次第に力強さを持ち直してきた。しっかりとした瞳は、またアイの心臓を締め付ける。腕の中で身じろぎながら、アイはそこから顔を出した。お互いの顔が数センチしかない距離は、二人にとって恥ずかしくもあり懐かしくもある。もっと触れたいのに、その手が伸ばせない。ただじっと瞳の奥を覗き込んで、頬が上気するのを止められなかった。

「ただの水族館だって言っただじゃない」

アイが咄嗟に顔を背け、胸の鼓動を隠すように言った。幸太を責めているわけではない。ただの照れ隠しでしかないことを、やはり幸太にはばれてしまっているようだ。背けたアイの頬を撫でるように触ると、その顔を正面に向かせる。

「そんなのラボに連れて来る建前だった。だから、マンションには行ってほしくなかったんだ。海の中のことを教えてほしいっていうのも嘘だ。側に……いて欲しかった」

アイは色んな感情が渦巻いて声を漏らした。そんなにも自分を見守ってくれていた人間がいることが嬉しかった。両親は側でアイの成長を守ってくれた。それ以上に、幸太は手の届かないところで見ていてくれたのだ。目の前にあるその顔が、夢の中の笑顔と重なる。アイは頬に触れる幸太の手に、自分の手を重ねる。目を瞑ると、一筋の涙がその頬を伝う。

「俺はお前が死ぬ時に誓ったんだ。今度生まれ変わったら、絶対にアイ達を守ると。この世界に生まれて、アイを見た時に本当に運命だと思った。でも、不思議だよな。お前達が海の中で笑えば笑うほど、前世を思い出して欲しくなかったよ。俺は嫌われるんじゃないかと怖かったんだ」

頬に触れている手が震えている。それを上からきゅっと握りしめると、今度はアイが幸太の頬に触れた。一瞬驚いた顔をした幸太が、目元を和ませた。その柔らかい微笑みは、アイの涙を更に誘う物だった。自分がこの人に再び会うために生きていたのではないかと思えるほど、心は今までになく落ち着いていた。マユを探さなければならぬ。ただ、それとは別の場所で安心感があった。

「嫌いになんてならない。あたし思い出したの。最後……ひどいことを言ったわ。幸太のせいじゃなかった。幸太はあたし達を心配してわざわざ来てくれたのに。あたしはマユを失ったショックで八つ当たりしたの。幸太はきつと、その言葉に傷つけられて記憶を」

幸太は、続きを阻止するようにアイの口を片手で塞いだ。そして言葉を失ったアイの額に、幸太の唇が再会を喜ぶ証のようにそっと押しつけられる。運命の烙印を押されたようにその一点が熱くなる。「アイ。その俺の勝手な約束は、今までの生きがいでもあったよ。ありがとう」

お互いが必要だと思った時、こんなにも満ち足りた気持ちを味わえ

るのだ。たとえ離れていたとしても、どこかで力になれば嬉しい
と思える。それでいいのだ。幸太の唇が頬に移り、次にアイの鼻の
頭に触れた。不運なことに、幸太がこんな時、次にどんな反応をす
るのか思い出せてはいない。戸惑っている間にアイの唇に一瞬だけ、
幸太の唇が触れた。

その動作があまりにも自然でまた嬉しくなる。アイはそつと幸太の
手を握りしめた。

「アイ。マユを探しに行こう」

幸太の声に、アイも力強く頷いた。たけしとしゅんの姿も探しながら、幸太に連れられて一階まで来た。そこにあるのはホールとりよ
うの部屋である。幸太が簡単に説明してくれた話だと、どうやら主
犯はりようかもしれないのだ。二人が到着すると、そこはすでにド
アが開いていた。

「たけし！ どうだ！」

階段の上で別れてからかなりの時間が経ってしまった。幸太
の背中からひよいと顔を出してアイが部屋を覗くと、そこには無数
のダリアの残骸があった。床にも散らばっている物やケースの中で
砕かれている奴もいる。なによりもアイにとっては研究所内にダリ
アがいることに驚いて後ずさる。幸太が部屋に足を踏み入れると、
手作業可能なドリルを二本ずつ持った、たけしとしゅんが立ってい
た。顔だけでなく服にも血が飛び散っているのを見ても、相当の惨
劇が行われたようだ。部屋のドアを閉めていたからとはいえ、アイ
は全く音に気づかなかった。それほど防音がしっかりしていたのか、
幸太との話に夢中になっていたのか。これではマユが悲鳴を上げて
も聞こえないだろう。アイは即座に部屋の中にマユの姿を探したが、
そこはダリア以外もぬけの殻だった。

「遅い！ 想像以上に手強かったぜ」

幸太を振り返り、しゅんがさわやかに笑って言う。たけしと並ん
で無表情だった彼の、初めて見る一面だ。もしかして戦いを楽しん
でいるのではないかと考え、アイはその思考を振り払った。

「……俺、ダリア殺したの初めてだよ。メカばかりやってきたから。でも、これって結構楽しいな。長年の恨みだ！」

たけしもそう言いながら、床で死骸となったダリアにここぞとばかりにドリルを埋め込む。眼鏡に血が付着しているのを彼は気づいていないのだろうか。いや、たけしの両親もダリアのせいで死んだはずだ。本当に長年の恨みが積もっているのだろうか。

「なんだよ。お前最初は脇でびびっていたくせに」

しゅんは、にやにやとたけしを見ながら砕けたダリアを足でまとめる。

「あいつ、なんでこんなことを……」

幸太は部屋の中心に行くと、ぐるりと部屋を見回して言った。その落胆した背中が、つい抱きしめたくなるほど悲しげだ。だが、アイもそれどころではない。マユはどこにいるのだ。

「幸太！ マユは」

「マユちゃん？」

二人の話にしゅんが入ってきた。そして幸太が次の打開策を考えているのを知ってか、ドリルの間に挟まった肉片を足で取り除きながら言った。

「マユちゃんがいないのか？ 捕まっているということか。俺、見たんだよ。この部屋で、

りょうがこいつらを育てている姿をな。部屋からあいつの変な歌声が偶然聞こえたから覗

いたんだ。それでこのダリアの山を見た。今日、駆除の時にあいつに俺は確かめた。もし

理由があつたのだとしても、こいつら全て殺せば黙っていてやるとも言った。でも、りよ

うにその気はなかったんだ」

しゅんは幸太の肩に手を置き、溜め息を吐く。その横では、まだたけしがダリアを足で

踏み潰している。彼の耳には、今何も聞こえていないことだろう。

その目が真剣すぎて、

アイは思わず視線を逸らした。

「さっき幸太と、たけしに頼んでカメラのテープを見せて貰った。そこに移っていたのは、

殺された住人の家に何度も出入りするりょうの姿だったよ」

しゅんも、その同意を求めるようにたけしに視線を流したが、アイと同様にすぐに幸太

を見た。たけしには話し掛けられないと悟ったようだ。

「そんな、どういうこと？ それじゃあ、マユはもう？」

アイにはそんな事情は飲み込めるはずがなかった。幸太は震えるアイを引き寄せて抱き締める。それは勇気でも元気でもない、ただの慰めだったのかもしれない。それでも、幸太が側にいてくれるということが、アイの強さを引き戻した。涙をぐっと堪えると、自らその手から離れた。大丈夫、という想いを込めて一度頷く。

「おそらく、りょうはマンシヨンの住人を殺害しては、こいつらに喰わせていたみたいだ。証拠になるか不明だが、ダリアの好物といわれる目玉も死体からくりぬかれてたよ」

しゅんが言ったことに過剰なまでに幸太が反応する。アイの肩を掴むと、その顔を覗き込んだ。

「アイ！ だからと言って、マユがこいつらに喰われたとは限らない。まだどこかに隠されているのかもしれないだろう。とにかく他にも探そう」

「おい、お前達なんなの？」

しゅんが眉間に皺を寄せて二人の取り合った手を眺める。

「なんか。ねえ？ おかしくないか？ その雰囲気」

たけしがやっとダリアから足を離すと、眼鏡を外して血を拭う。しっかりと鼻の頭にか

け直したところで、冷静に言った。

「幸太がいつも異常なまでに水中カメラでアイちゃんのことを見ているのは知っていたよ。」

惚れているだけだと思っていたが、そうじゃないみたいだね。そろそろ教えてくれてもいいんじゃないの？」

7 人類存続

四人は、りょうの部屋を出てから次にどこへ行くべきか迷った。

「親父には知らせずに穩便に済ませたいんだよな」

幸太のその心遣いは、結果、四人を父親の部屋から遠ざからせることになった。それが四人の傷を深くさせるものだとはい、この時誰も想像出来るはずがなかった。とりあえずホールから調理場を探したがめぼしい発見はない。外に逃げる可能性もあるので車も確認したが、動かされた形跡はなかった。しゅんの部屋を含めたその他の一階の空き部屋、シャワールーム等を見ても、どこにもその姿はなかった。その間ずっと走り続けた彼らは、ただ荒い息を廊下に響かせながら、出発したりりょうの部屋へと戻ってきていた。

「おい、あいつはどこにいたんだよ」

「最初から四階にはいなかったから、ホールにもいない。外にもいない。あとは……」

しゅんの苛立ちの混じった声にたけしが答えている間、幸太はじっと考えていた。

「三階もない。あたし達の部屋にはいないわ。もし近くにいればマユが声を上げたはずよ」

アイの言葉に、もし口を塞がれたら声を出せないだろうとは誰も言えなかった。

「残りは。もしかして」

急に走り出した幸太に従って、三人も後を追って走り出した。三人は幸太がどこに向かっているのは分かっていた。そこにいるのではないか気づき始めていたが、幸太が行動に移すまで機会を窺っていたのだ。男達が二階に駆け上がったいくのを、アイは必死で追いかけた。やっと追いついたと思ったら、父親の部屋の前で幸太が立ちすくんでいた。その後ろで、たけしとしゅんも動かない。部屋のドアは内側に開いたままのようだが、幸太が部屋に入らないことから

何か起こっていることが想像出来た。しゅんとたけしの背後から部屋の中を覗くと、そこに一体の身体が転がっているのが見えた。

「親父！」

「来るなっ！」

飛び込もうとした幸太に向かって、部屋の中から一本のナイフが飛んできた。それは幸太の顔を掠めて廊下の壁に刺さる。たけしが、アイの横で隠すことなく悲鳴を上げた。部屋から聞こえたのは、あの赤毛の声だ。初めて会った日、あんなにも笑顔で優しくマユの相手をしてくれた男が、今は鋭い声で仲間を威嚇している。その足下には、髭を伸ばした男が一人転がっているのが見えた。そしてもう一人。

「近寄るなよ」

「マユ！」

アイの身体は今にも飛び出しそうだった。だが、ドアを通る瞬間幸太に強く引き戻される。腕がもげるほどの痛みを感じた後、身体が後方へ引つ張られた。尻餅を付きそうになったが、それを支えてくれたのも幸太だった。触れている掌に、幸太がじわりと汗を滲ませている。壁に隠れて部屋の中を見ようとさえしないたけしに代わり、しゅんが二人の横に立つ。

「りよう！ お前何をやっているんだよ！」

部屋の中は、アイが訪れた時と全く異なる空間に変わってしまった。いた。棚の中に一寸

の隙間がないほど埋め尽くされていた本は床に散乱し、テーブルは定位置から窓側に横倒

しにされソファは刃物で切り裂かれていた。そしてなによりも、そのソファに座ってい

るのがりようとマユだった。足下に転がる父親の首元にはナイフが突き刺された状態で、

それは月明かりを反射させながらぶら下がっている。刃物の柄からは、刃先から溢れる血

が伝わり、床へ落ちていく。父親の身体にはそれ以外にも、腹や腕に刺し傷が見受けられる。きつと彼はもう生きていないだろうことが誰の目にも明らかだった。なにより、父親の目玉は消えて空洞になっている。

「親父！」

幸太が立ちつくしたまま叫ぶ。血は繋がっていなくとも、やはり親子だったのだ。予言

と前世の夢に縛られた物だったのかもしれない。しかし、二人がダリアの絶滅を願い続けていたことは変わらない。その日に笑い合えることだけを信じて生きてきたのかもしれない。

い。幸太の身体で震えているのが、アイには分かった。しかし、アイが顔を上げると、幸

太は泣いている訳ではなかった。その目はまっすぐにりょうを睨み付けている。四人は誰

一人として、マユを人質に取られていることから身動きが取れない。それでも、マユは泣

くこともなくジッと座っている。その頬には鋭利な刃物が当てられているのに、アイを呼

ぶこともなかったのだ。反対に、アイの心には動揺が走った。なぜ悠長に寝ていたのだ。

また、マユを危険な目に遭わせてしまっている。危険を覚悟で部屋に飛び込もうと覚悟を

決めた時、りょうが大きく息を吸った。

「残念でしたー」

そして、笑いを含んだ声で突如叫び声を上げた。アイの身体が竦み、マユがぎゅっと目を瞑ったのが分かる。

「りょう。なんで親父を」

幸太が尋ねると、それを待っていたかのようにりょうは笑った。

「だってさ、この親父が悪いんだよ。俺は、俺の夢を叶えるために生まれてきたのに、邪魔をするから」

アイは、目を瞑って賢明にこの事態を耐えようとしているマユの顔を見ているだけで吐

き気がした。あの夢を、マユが死んだ時の映像を見てしまったがために、それがフラッシュ

ユバックとなってアイの脳裏に浮かんでは消える。ぎゅっと拳を握りしめ、りょうが話

ている間に部屋の中へ視線を走らせた。相手はナイフを持っている。それに対抗できるよ

うな武器が必要だ。この距離から飛ばせて、マユに危害を加えない物。本、無理だ。椅子、

とんでもない。ここが水の中ならば誰にも負けなのに、と歯ぎしりをしたくなる。幸太が、

ちらりとアイに視線を投げた後、りょうに向き直る。

「夢？ お前の夢はダリアの滅亡じゃないのか。そのために、俺達と一緒に戦ってきた」

他の誰もるように問いかけようとはしない。発する一言が男を刺激することを恐れての

ことだ。りょうはもう仲間ではない。いや、ずっと仲間ではなかった。それが、彼の嘲る

ような笑顔で証明される。

「馬鹿だなあ、幸太。お前は昔からそうだよ。お人好しっていうんだよ。俺が施設から、

こんなに良いところに引き取ってもらえたのも、お前が友達だって言ってくれたからだっ

たよな。まさかお前、俺が仲良く駆除しようって自主的にやっていると思っていたの

かよ？」

甲高いほどの笑い声が執拗に部屋に響き渡る。耳を塞ぎたくなるほど、それは不愉快な

ものだった。だが、もう逃げないと決めた。アイは、反抗するようにりょうを睨む。

「なんだよ。違うのかよ」

「違うね」

りょうは、手に持っていたナイフを幸太に向かって投げた。それは真っ直ぐに彼に向か

つてきたが、首をかがめてよける。アイも瞬発的に右へどいた。壁にもう一本の刃物が突

き刺さる。陰からたけしの小さな悲鳴が再び聞こえたが、アイには振り向く余裕さえな

った。りょうの手に凶器が無くなったのを機に、マユが走り出そうとしたが、それも敢え

なく捕まってしまう。りょうは腰に備えてあった別のナイフを取り出すと、マユの頬に当

てる。そして、逃げようとしたことを責めるように、マユの頬に舌を這わせた。見てい

られない。アイがぎゅっと目を瞑って耐えた。

「幸太、お前には前世の記憶があるだろう」

幸太の肩がびくつと揺れ、たけしとしゅんが驚いた顔をした。それは、父親だけしか知らない事実だ。

「りょう、どうして」

ここでどういう経緯があったにせよ、りょうが父親から聞いたというのではないだろう。

たとえ命をかけても、幸太には父親が大事なことは漏らさない自信があった。アイも、り

ょうの言葉に驚いたように幸太を見上げた。だが、りょうはまだ笑

っている。ピタピタと

音がしそうなほどにマユの頬に刃物を当て続ける。

「知っているのかって？ それは、俺もお前と同じ時代に生きていたからだよ。そして、この女共ともな」

りようが遂にマユの首に刃を滑らせた。徐々にそこから血が滲み、アイが息をのんだ。

「え？ どういうこと！」

しゅんが叫ぶが、それに答える物はいない。すすり泣くようなマユの声が部屋の外に漏

れてくる。アイには、まさかりようまでもが同じ時代にいたことに驚き、声を失った。次

から次へと告白されるその異常さに、去ったはずの頭痛がぶり返す気がした。壁にゆつく

りと手をつき身体を支えないと倒れてしまいそうだ。りようの自慢話をするような話し方

が、アイをさらに奈落へ突き落とす。

「俺は、前世でダリアを作り出した張本人なんだよ。科学者様、博士様、お医者様だ」

ヒツとたけしが悲鳴を漏らしたあと、小さな足音がアイの耳に入る。まさかと思い廊下

を見ると、たけしが一目散に廊下を走り、階段を下りていく後ろ姿があった。見捨てられ

た、逃げたんだ。様々な文句が頭の中を駆けめぐったが、彼は元々戦闘向きではないのだ

と言い聞かせる。意識的に大きく数回の呼吸をする。

「ダリアを……嘘だろう？」

幸太が縋るような声を出す。

「俺も初めは嘘だと思ったよ。だが、幸太と親父さんが話しているのを聞いて、自分の見ているものが前世だと知ったんだ。俺は前世で、医者として働きながら科学者としての力も備えていた。何か大

きいことをしてやりたかったんだ。それが、俺には可能だった」

りょうは遠い目をしながら話す。自分が過去に起こした栄光だと思っている功績を思い出しているのだろうか。あの生き物を人間が作り出し、人間を不幸にしたというのだ。アイにはそんなことは信じられなかった。これだけの災害を起こしたのも、りょうにとつては誇りだというのか。そんなことをして何の意味がある。悲しいだけではないのか。

「どうやって作ったんだよ？」

幸太が、さらに低い声を出した。彼の苦しみは、アイに勝るものだろう。前世で誓ったことを果たそうと一緒に戦っていた仲間が、殺人を犯しただけでなく、その生物を作っていたなど想像したことはなかったはずだ。全てが虚像であり、嘘だった。信じていたものは、悪だった。予言は存在したのだ。

「歴史書や噂では、動物にたわしを喰わせたとか色々言われていたが間違いではない。ある意味偶然の産物だったが、俺には充分だった。薬品の調合したものを動物に喰わせたり、色んな動物同士を交尾させ続けたら……おめでとう、さ。あんなに簡単に増殖するというのも予想外だった」

予想外だった、という時にも、りょうに悪びれた様子はない。

「俺はその時代、トップクラスの大学研究室を出ていた。あいつらができる時には、一番に大学に知らせに行つたよ。教授は褒めてくれたよ、俺の才能を。そして、この素晴らしきペットを！ こういう結果が出るか公園のホームレスのところ放して実験もしたさ」

大学、という単語を聞き、アイは自分も大学生だったことを思い出した。そうだった。幸太と出会ったのは大学のサークルで、一緒にテニスをしたり旅行に行ったりした。あんな時もあったのだ。その同じ時代にこの目の前の男は研究に励んでいたのか。

「それなら、どうしてあんなに広まったんだ。奴らの力を押さえておくことはできなかったのか。お前の力不足だったんだろう」

幸太が一気にまくし立てると、耳を塞ぎたくなるほどの破壊音が

した。りょうが怒って側にある椅子を蹴り飛ばしたのだということ
はすぐに分かった。あまりの衝撃に、脆くなっていた椅子の足が一
本折れて倒れたのだ。マユの首が絞められ、今までで一番の悲鳴を
上げる。が、まだ殺すつもりはないようだ。すぐにその手が緩めら
れる。

「そうかもな。実際、俺はあんな風に増殖するとは思わなかった。
ホームレスの研究結果が出る前に奴らは物凄い勢いで増殖した。俺
は医者で働いていた病院に来るほど丈夫だとは……。俺が手術した
子供に、奴らはいつの間にか侵入していたんだ。看護婦に呼ばれて
行ったときにはすでにダリアは子供を蝕み、それから俺も襲われた」
「それならなぜ？　なぜ、この時代でもダリアを育てようとするの
！」

マユから気を逸らしたい。その一心でアイはりょうに向かって叫
んだ。だが、それはアイの本心でもあった。前世の罪を再び重ねよ
うとするなどあり得ないではないか。手を伸ばせば償えることもあ
るかもしれないのに、どこまで腐った奴なのだろう。それが、アイ
の口から言葉となって現れた。

「マユを返して！　あなた、一度あたし達の人生を奪っているのよ。
二回もなんて許さないんだから」

初めて口を開いたアイに、りょうが嬉しそうに笑いかける。

「馬鹿だなあ。お前達の前世なんか知らねえよ。それにこいつこそ
今の俺を台なしにしたって言っただろ！」

笑っていたかと思うと、最後は怒りを露わにしている。普通ではな
い。それは誰が見てもすでに明らかだ。だが、マユが何をしたいと
いうのだ。マユは必死に生きているだけではないか。

「あのだ、こいつは俺の部屋に勝手に入ったんだよ。一回目は俺も
部屋にいて、頭をちよつと殴って階段に置いておいたんだ。何もし
なけりゃいいのに二回目も来て、この親父にダリアのケースを報告
しやがった」

「あれは……あなたが殴ったのね？」

マユが階段の下に倒れていたのは、やはり幸太のせいなどではない。この男が、マユを傷つけていた。もう我慢出来ない。アイが部屋に踏み込もうとすると、またもや幸太に腕を掴まれた。振り払おうとしても幸太は離してはくれず、アイは縋るようにその横顔を見上げた。あの男を殴らないと、自分が負けてしまいそうだった。今歩き出さないと後悔する。いや、何か行動しないと腰が砕けてしまいそうだった。

「マンシヨンの住人は、どうして殺した」

アイを掴む手に更に力を込めると、幸太は鋭い声で言った。

「あー、あれはダリアの餌だよ。俺は馬鹿ではない。ダリアの子供をお前達にバレないように捕獲するのも大変だったんだ。反対に、住人を殺すほうが簡単だったよ。今度は失敗したくなかった。ダリアを嚴重に保管して餌を定期的に与える。あいつらはご存じの通りよく食うからね」

「最近のダリアの変化は」

幸太は聞かずにいらなかった。しゅんが、たけしの去っていた廊下を何度も振り返る。もう味方などいないのかもしれない。おそらく、しゅんも逃げる隙を狙っているのだ。

「あれは俺の研究の成果だ。薬品を余分に少し加えれば無敵のペットを手に入れられるんだ。それなのにこいつが！ この親父に話したんだ。それで親父は、俺が予言の悪だとか喚き始めたんだよ」

マユは正しいことをしただけだ。父親も正しい者を救おうとしただけだ。アイの両親も、家族も、集落の人間も、みんな幸せに生きたいと思ったただけだったのに。いくら睨んでも、殴ってもこの憎しみは消えることがないだろう。時が経ても、今度生まれ変わったとしてもこの男だけは許さない。アイの口からくぐもった泣き声が出た。幸太の手に、さらに力が加わる。それはアイの手が折れてしまふほどだったが、二人にその感覚はなかった。そうしていないと、お互いに感情を処理出来ないのだ。

「それで、親父は俺を始末すると言い出しやがった。殺されてたま

るか。俺にはまだやり

たいことが沢山あるんだ」

「りょう。それはなんだ」

「城を作るんだよ。日本に残っている奴らを全部集めて、ダリアに戦わせるんだ」

「そんなことに、なんの意味があるんだよ！」

まだ逃げてはいなかった。しゅんが、アイの背後から叫ぶ。りょうの、しゅんを見る目

は毛が逆立つほどに冷淡だった。じつとアイの背後を凝視した後、それまでの興奮した声

からやや冷静にりょうが言う。

「意味なんて必要ない。俺は出来なかったことを成し遂げるために、また生まれてきた。」

それだけだ。それ以外に俺に価値はない」

「りょうっ！」

アイの手を離し、幸太が叫んだのは怒りではなく焦りからだ。窓に背中を向けていたりようには気づかなかった。アイが悲鳴を上げた。りょうが気配を感じて振り返った時、それはすぐそこにいた。二つの大きな目玉が、終始ギョロギョロ動きながら部屋の中を見回している。ダリアだ。それもとても大きく大きい。目玉の大きさは片方だけでも、りょうの顔より大きいだろう。それが二つ身体の上に乗っている。窓に触れた肌色の物体は、ダリアの手だ。体長がいくら巨大化しても手足の大きさは変わらないらしく、その小ささが不気味だ。

「おい、お前のだろう。言うことを聞かせてみるよ！」

幸太がりょうに挑戦的に言うと、彼の顔には一瞬恐怖の色が走った。だがすぐにそれを隠すと、引き攣らせた顔をダリアに向けた。ダリアが敷地の中に入ったということは、奴らはすでに飛べるようになっていたのだ。どうやって飛んでいるのだ。ダリアは部屋中を物色している。右目は時計回りに動いているのに、左目は反対回り

だ。と、その時だ。ダリアが獲物に狙いを定めて窓を突き破った。ガラスの割れる音と、アイの悲鳴が響く。一瞬の隙をついて、マユがりょうの元から走り出した。駆け寄ってきた妹を抱き上げると、部屋から後ずさる。マユが、アイの胸元で大きく泣き始めた。我慢していたものを吐き出すように、アイの耳が壊れるかと思うほどの叫びだった。

同時に、男の悲鳴が上がる。アイが部屋を見ると、りょうが床に四つんばいになりながら、アイ達の方へ逃げてきているのだ。ダリアは予想外だったのだろう、窓から全身が入りきらずに藻掻いている。暴れるせいでガラスが粉々に砕け、床に散らばった物が宙を飛ぶ。部屋に入った目玉二つが、気味の悪いほどくるくる回り続ける。「どこに行くんだよ？ お前の子供じゃないのかよ」走ってきたりょうを捕まえると、しゅんがダリアの方へを押し返す。呆然としたりょう

が、しゅんに突き飛ばされて尻餅を付いた。ダリアが、それを喜ぶように、さらに早く目を回す。りょうは腰が抜けたのか、立ち上がることなく訴えた。

「こいつらは俺のじゃない！俺が育てているのは部屋の奴らだけだ。外にいる奴は知らないんだ」

それはまるで助けてくれと懇願するようだ。きつとりょうは気付いたに違いない。いつ

もししゅんとは一緒に駆除に向かっていたことを。

しゅん、助けてくれ。

こいつを二人で倒そう。

その目がしゅんに語りかける。

「裏切っていたのはお前だ」

しゅんはりょうを睨み、応じようとはしない。窓は大きな音を立てて全て割れ、その体

積に圧倒されて壁も壊れ始めている。奴は今にも飛び込んできそう

だ。そうならば、すぐに食われてしまっただろう。

「アイ！」

幸太が部屋から飛び出すのと、ダリアの全身が侵入してきたのは同時だった。アイ達の

悲鳴と男達の怒声、そしてドリルの回転音が響き続けた。アイはマユを抱えたまま、幸太

の腕にきつく抱きしめられながらうずくまった。幸太の腕が苦しくとも、彼が賢明に守っ

てくれようとするのを感じた。そしてアイ自身も、胸の中にある大事な命を決して離さな

いと誓った。たとえ、自分が食われようとも。

しばらくすると、ドリルの音が止み、荒い息使いが聞こえた。幸太の腕の間から周りを

見ると肉の塊がある。誰が食われたのだ。マユには見せたくない光景に、さらに強く抱きしめる。だが、それは人間の物ではなかった。

「俺を甘く見るなよ！ 幸太！」

アイ達の隣に立っていたのは、真っ赤に血塗られたドリルを持ったたけしだった。幸太

に向かって言うと、くいつと眼鏡を持ち上げた。彼は、逃げたわけではなかったのだ。

「うっう」

また近くで上がるうめき声。ゆっくり視線をずらすと、そこには下半身を失ったりよう

の姿があった。上半身だけでドアの外へと逃れようと、両手を動かしている。床にはおび

ただしい量の血が流れ、それが彼の命の終わりを告げていた。

「りよう」

しゅんは、かつての相棒を見下ろしながら血に染まったドリルを持っていた。たけしに

ドリルを持ってこいと頼んだのは、しゅんだったのか。侵入したダリアは、りょうの下半

身を口を含みながら身体を貫かれたようだ。

「りょう。もしかしたら、俺やたけしも前世の記憶はなくても、同じ時代にいたかもしれない。

でも覚えてなくて幸せだよ。不幸な過去にとられるな。お前も、この時代でお前

らしく生きればよかったんだ」

しゅんの声は掠れていたが、幸太達には背中を向けているのでその表情まではつかめない。

い。だが、一緒に戦ってきた仲間の最期がこんな形だとして信じられようか。こんな

にも人は過去に縛られて生きていくのだろうか。きっと、それは本人にしか分からないこ

となのだ。もしかしたら本人にも分からなかったのかもしれない。

「俺には、やり残したことが……。子供達が」

りょうは意地でも部屋を出ようと這い続ける。だが、その切断された上半身からは、動

くたびに内蔵が零れ、這った形跡を残す。りょうが話せることが今はもう奇跡かもしれない

かった。そこまでして、なぜだろう。全員が、静かにりょうの動きが止まるのを待った。

しゅんは次第に動きのなくなっていくりょうの上半身を抱きしめながら、崩れるように座

り込んだ。もう泣くことを隠してはない。

「アイ、マユ。大丈夫か？」

幸太がやっと離すと、アイは笑顔で答えた。そのまた中心で、マユが幸太に両手を伸ば

す。マユは、ずっとこうしたくて一日耐えていたのだろう。あちこちに幸太の姿を探し、

そして巻き込まれた。だが、マユは良く耐えたのだ。幸太が、マユの頭をくしゃっと撫で

た後、アイの手から抱き上げる。マユの嬉しそうな笑い声を聞いて、アイも立ち上がった。

どうしてこんなにも力が沸くのだろう。アイは、幸太とマユの笑顔を見てほっと溜め息を吐いた。

「たけし、ありがとうな。お前、やっぱり流石だよ」

幸太が苦笑いで言い、ハイタッチを交わす。幸太に続いてマユも真似をすると、たけしの機嫌がいいのか同じ事をしてから言う。

「いや、最初はしゅんに渡したら逃げたいと思っていたよ。でも、ダリアが入ってきて幸

太が二人を抱きしめているのを見たら、夢中でドリルを刺しに向かっていたよ。身体が勝

手に動いたんだ。やっぱり俺、戦闘向き？」

と、調子に乗ってドリルを振り回している。その間から漏れる肉片、幸太の拳がたけし

に飛ぶ。しゅんも立ち上がり、アイ達の方へとやって来た時だ。

「ねえ、マユちゃんの服の下から見えているのって何？」

しゅんの言葉に、全員の視線がマユに注がれた。ずっと抱きしめていたアイでさえ気づ

かなかったが、マユの服の下からノートが飛び出している。なぜ隠していたのだ。それに、

マユはこんなものを持っていなかったはずだ。幸太の喉が、ごくりと音を立てた。

「あのね、おじさんが持っていなさいって」

マユはそれを引っ張り出すと、幸太に渡した。ノートの端は無理矢理入れられていたか

らか、折れてくしゃくしゃになっている。もちろんアイの記憶にも

ないもので、幸太がペ

ージを開いた途端、沈黙が降りる。その本人は、今や部屋の片隅で無言で寝ている。その

理由を聞くことはもう出来ないのだ。マユが、周りの人間を見ながら困惑した顔で言う。

「おじさんは、机からこれを出して、持っているようにつて。りょう兄ちゃんを呼んで二

人が喧嘩を始めたの」

マユはその時のことを思い出して涙を零し、アイの手にもぞもぞとすり寄ってきた。

「怖かったの。最初はおじさんがりょう兄ちゃんを殺そうとしたの。でも、反対におじさんが殺されちゃった。あたしも殺されるのかなって思ってた怖かった」

アイがもう一度強くマユを抱きしめる。だが、まだ危機は去っていなかった。再度、部屋に爆音が響いた。そうなのだ。想像出来ないことではなかった。ダリアが、一匹空を飛んだ。そうなれば、他の物も例外ではない。アイが部屋を振り返った時には、すでに三匹が目玉を窓から押し込もうとしていた。マユが胸の中で悲鳴を上げる。

「大丈夫だ。早くホールへ行くんだ、大丈夫だから」

ダリアが侵入してくれば、この建物のどこにいても安全ではない。

アイはマユを抱いて立ち上がると、恐怖で震える足を賢明に前に動かした。幸太がその腕を引いてくれないければ一歩も進むことは出来なかっただろう。暗闇にまたドリル音が響く。それが二重に重なっていることで、たけしも応戦していることが窺えた。走りながら後方を確かめると、一匹のダリアが別の部屋から顔を出すのも見えた。悲鳴が喉元でつかえ、足が縛れそうになる。一階に着くと、玄関はまだ守られていた。だが、外壁に何かが衝突しているような爆音がして、それがダリアだというのは誰に聞かなくとも明らかだった。

「アイ！ 早く入るんだ」

幸太がアイの背中を押してホールの中に入った瞬間、地面が大きく揺れた。その後にくさらに爆発音。建物が崩壊しているのではないかと訝るほどの横揺れが襲う。

「来たぞ！」

幸太の後に、しゅんとたけしが飛び込んでくる。たけしは抱えるようにドリルを持って

いたが、しゅんの手にはそれがない。幸太が扉を閉める瞬間、ダリアの姿が見えた。その

目玉にはおそらくしゅんが突き刺したであろう凶器が突き刺さっていた。そのあとも数回

続く爆音と、それに伴う揺れが起こる。それでも天井から何かが落ちてくることも、建物

が崩れることもなかった。よく見れば、ここには開く窓がない。天井には明かりを入れる

ための分厚いガラス張りがいくつかあったが、ダリアがそこに乗っても音さえ聞こえない。

扉に幸太が頑丈な施錠をしたようで、ダリアが入って来ることはしばらくはないと思えた。

だが、アイはマユを離さなかった。またいつ、逃げなければいけないのか分らないのだ。

そんなアイの隣に幸太はやって来ると、胡座を掻きながらマユに手を伸ばした。アイが一

瞬戸惑うと、幸太はマユから受け取ったノートを差し出して言った。「親父はきつと、今日、こうなることを知っていたんじゃないかな」

幸太の声を聞き、マユが顔を上げる。その手に自ら飛びついたことに、アイが止めるこ

とはなかった。ノートの中身も気になり、手を伸ばす。

「どういうことだ？」

たけしが外を窺うように、扉に当てていた耳を離して言った。アイ

がノートを開くと、そこには小さな文字がびっしりと書かれていた。幸太はこの概要を読んだのだろうか。

「それは親父の研究日誌だ。ダリアについて、そして天文学について書いてある。そこには今までの俺達の間起こった数々の出来事について記されている。予言、まさに遡った予測だ」

「そんなの、どうして分かる？」

たけしが、アイの手にあるノートにちらりと目を走らせる。

「詳細ではないがアイが来ること、今日「悪」が死ぬことも書いてある。ただそれが、りょうだとまでは分からなかったみたいだ。そして、今の音は」

幸太が天井を見上げると、たけしが怯えた声で言う。しゅんが、そんなたけしの肩を励ますように叩いた。

「な、なんだよ」

幸太が、たけしをじっと見つめて言う。

「惑星だよ。隕石が落ちたんだよ。地球に」

「隕石？」

アイがノートを即座に捲るが、どこに書いてあるのかが分からない。困惑してノートをたけしに渡すと、扉を開きたい衝動に駆られる。だが、ダリアがもし扉の前にいたら、中に入れてしまう危険もあるのだ。もし死ぬとすれば、ここだ。たとえ何があってもここから出るのは危険だ。マンシヨンの住人達も、それぞれ部屋で恐怖に震えているかもしれない。

「そうだ。そこには真夜中の襲撃と書いてあるから当たっている。それによれば、これでダリアは消滅する。この襲撃は、人間に対してではない。大丈夫だ」

「幸太。どういうこと？ どうしてダリアが死ぬの？」

こんなにも人類を苦しませ、そして増殖し続けた物体の消滅などあり得るのだろうか。

「簡単にこの資料を要約するよ。まだ不十分だが、こういうことだ。たけし、ちよつと貸

してくれ」

たけしが素直に従うと、誰もが自然と幸太の周りに集まった。幸太がマユを床に座らせ

る。幸太はノートの半分ほどのところで手を止め、説明し始めた。

「昔……古代、ノストラダムスという人物が予言をした。それは『諸世紀』という彼の著書でまとめられていて、西暦一九九九年七月に恐怖の大王が来るだろうとされ、その時代の人間を震撼させたんだ。それは人類の滅亡を予言したと考えられた」

「あ、あたしそれ。なんか聞いたことあるかも」

アイが生きていたのはそれよりも随分後になる。それでも、その予言が人々に与えた影響は大きい。アイの同調に一つ頷くと、幸太は続けた。

「それは、環境問題や核兵器など人間の地球破壊の行動が原因で起こる地球の滅亡や天変地異だと考えられたんだよ。でもその時期、多少の災害は当たり前のように起こったが、さして問題のある大きな物はなかったんだ」

たけしが手の中のドリルをやっと放り出し、身を乗り出した。

「その予言に何の関係があるんだよ？」

「それで、だ。ノストラダムスはもし悲劇が起こったとしても生き残る人間はいる。そして

生き残った人間の悲惨な未来像をも予測していたんだ」

たけしが眼鏡の位置を直す。頭の中で全てを整理していることが窺える。

「でも、それは起こらなかったんだろう？ 人間も死んでいない」

しゅんが疑問を投げかける。幸太がしゅんに向けて人差し指を立てると、左右に振った。

ちゅちゅと小さく舌を鳴らす。

「そうだな。でも、このダリアの出現をそのノストラダムスの予言の再来だと憶測する

奴らも過去にはいたらしい」

「ああ！ ダリアがそのノストラ、なんとかの予言なのか！？」

たけしが、閃いた！ とばかりに大声を出す。そして全員がその意見に頷いたかに見える。

たけしが、幸太がもう一度人差し指を振る。

「いや、違う」

たけしが再びうめき声を漏らし、頭を抱えた。

「たけし、これだよ。この隕石がそのノストラダムスの予言だ」

顔を上げたたけしは、幸太を見つめたあとしゅんを見る。誰もが声を出せなかった。マ

ユでさえ、事態を飲み込んだのか天井を見上げている。これが、予言の再来。それは人間

にとって吉とでるのか、否か。

「幸太。どうということ？」

アイが幸太の膝に手を乗せた。

「親父は再度研究したんだよ。その予言についてや過去の予言者本人の書物、評論家とか

の関連書物についても全部。あの部屋に資料として置かれているのは知っていた。親父が

その話をするのも聞いたことはあるんだ。西暦の年数が違う、とか」

「どうということ？ ノストラダムスはわざと予言の年数を間違えて記録したってこと？」

「そうだよ。彼は、この時代の、この時間に降ってくるのを分かっていたんだ。しかし、その前に人間が起こす戦争や、汚染についてもわかってしまったんだよ。そして、自分でできることを考えたんだ」

「それが嘘をつくこと？」

「そうだ。予言を恐れた人間は、戦争を止めてもつと環境について考えるようになると思ったんだ。そうすれば地球を早い段階で救えると考えたのだろう。しかしそれも無駄だった。人間は核兵器も使ったし、地球も壊し掛けた」

幸太が、自分の手に乗ったアイの手を、ぎゅっと握る。全ては決まっていた、それがアイの心に重くのし掛かる。人間は地球の一部であって、本体ではない。それを思い知らされているようだ。だが、前世で生きたアイ達に、人生は必ず存在した。それも、今のためにあったのだろうか。

たけしが二人に対しての咳払いをすと言った。

「結局地球は滅亡するのか？ 俺達は終わりなのか？」

外がどうなっているのかは分からない。だが、次第に外壁にぶつかる物体の衝撃音は聞こえなくなっていた。あの街が綺麗になる時が来るのだろうか。ダリアのいない時代など存在するのだろうか。それに答えるように、はつきりと幸太が頷いた。

「いや、終わりじゃないよ。俺たちは、始まったんだ。予言の中には、『恐怖の大王の前に別の固体が現れれば人類は救われる』という供述が隠されていたという」

「もしかして、それがダリア？」

アイの核心をついた言葉に、さらに幸太が力強く頷く。

「きっとその人は、ここまで全てをお見通しだったんだろう。ダリアが現れれば人間も減るが、戦うことをやめるわけではない」

「そして、隕石がくる」

「そうだ。俺達もこうして助かった」

「ダリアは、今どうなったんだろう」

アイが天井を見上げながら呟いた。マユがそれに続き、男達はひとまずの無事を喜ぶように握手を交わした。

彼らはホールの中で時が過ぎるのを待った。明かりのない部屋の中では、何もすること

が出来ず、太陽が上るのを待つしかない。ろくに夕食もとっていないので全員の腹の虫が鳴いたが、ホールに続く調理場にあるけなしの食料をそれぞれ囓るに留まった。マンションの住人、街に残っている人間、それらの安否を考えるだけで食べ物喉を通らな

いだ。

そのまま眠れぬ夜を、五人は寄り添って明かした。一筋の光が差し込んだ時、一番に外へ出ようと促したのは、しゅんだった。マンシヨンの住人を気遣っている言葉を発したが、しゅんはりょうの亡骸が心配だったに違いない。だが、誰もそれを聞くことはない。幸太が賛成をしたことで、ホールを出ることになった。しゅんが扉を開けようとしたが、外側から何かで押されているように重いらしく、幸太が手を貸した。それでも開かず、たけしも加わった。たけしは、これから体力を付けると前夜に誓っていた。

だが、アイの中で開かない扉に嫌な予感を覚えた。夢で見たシーンに似ていてはいないか。人気のない校庭。重い扉。心配な妹。今回、マユが側にいるものの、向こう側にいると予想されるのはダリア以外に何かがあるのだ。もしも、そこを開けてダリアが死んでいなかったなら。ダリアが襲ってきたら。身体を這い蹲られたら。やめて！そう叫ぼうとアイが腰を開けた時だった。扉は、男達によって開かれた。

「なに、これ……」

扉の向こうに広がっていたのは一面の白い世界だった。そこにあるものの全てが真っ白に変化し、まるで別世界に来たような錯覚に襲われる。アイが止める間もなく、マユが幸太の元へと走っていく。それを追いかけながら、扉に触れると、指についたのは白い粉だった。この白いものは何かの粉だ。ホールの床も。廊下も。そして外も。

「幸太さん！」

どこからともなく聞こえてきた声に、アイが玄関を見ると、そこに立っていたのは無愛想に食事の皿を並べていた渡辺の姿だった。だが、それはアイの覚えている限り初めて見る顔だった。彼女が、笑っている。

「渡辺さん！ 無事だったんですね」

五人の元に走り寄った渡辺が、幸太の手を握ると涙ぐんだ。そして、アイの初めて聞く

しつかりした声で、流暢に話してくれた。

「昨夜、幸太さん達が帰ってから、私部屋でこれからどうしようと悩んでいたんです。答

えが出ないまま夜中になって、急に空が明るくなったの。見ていた？」

もちろん見ていた、という相づちを期待するような問いかけに、幸太は首を横に振る。

その頃ホールに逃げ込むのに必死だった。いや、それよりも前から五人は外の景色を見る

余裕など一分たりともなかったのだ。案の定渡辺は口元に手を当て驚いた顔をしたが、す

ぐに小刻みに頷くと続けた。

「そうしたら、いきなり大きな光る石の塊みたいなものが降って来たの。マンションでも

一時悲鳴が上がったのよ。何個、いや、何千個かしら。細かい物から、大きめの物まで。

すべてが光っていたの。怖い……というより、思わず見とれてしまうほど。怖いのはあれ。

「ダリアが空中にも浮いていたのよ」

やはり、ダリアが飛ぶことは事実だった。マンションも襲われたのだろうか。幸太がそ

れを尋ねようと口を開いたが、渡辺の勢いに押されて黙った。

「それが、不思議と石が落ちてしばらくしたら、ダリアが動かなくなったの。昨夜は敷地

の中にも入ってきて、もう駄目だと思ったわ」

渡辺は、その光景を思い出したのか両腕を抱え身震いした。アイは彼女と幸太達の間で

何が起こったのかを知らない。なぜ、彼女がこんなにも親しげになったのかさえ判断出来

なかった。だが、幸太もそれには一切触れないので、アイも黙って

いることにした。

「動かなく？」

幸太がそつと、渡辺に握られていた手を離す。それを見て、しゅんが笑いを堪えた。

「そつ、動かなくなつたの。そのあと、溶け始めたの」

「ダリアが溶ける？」

たけしがやつと話に割り込んだ。

「そつ、あたしも驚いた。でも、溢れるようにいたダリアが本当に塩に溶けるなめくじみ

たいに消えたの。あの石のおかげよ。みんな、喜んでいるの」

「みんな？ マンションの皆さんも無事なんですね？」

幸太の叫びと共に、他のメンバーからも歓喜の声が拳がった。一番の不安は解消された。

全ての人間が無傷なわけではないだろう。それでも、確かに生きている。これからの救助

と手当にしばらく追われる日々が続くだろう。だが、もう大きな敵はいない。目の前には

未来が開けているのだ。

「よっしゃー」

たけしとしゅんが、喜びでガッツポーズを決める。そして、二人で玄関から外の白銀の世界へと走り出していった。それを後からまゆも笑って追いかけていく。渡辺も、調理場へと歩いていった時、アイの隣で聞こえないほど小さな声で幸太が呟いた。

「親父。ごめん」

アイがじつとその横顔を見上げ、そつと手を握った。幸太はまっすぐの前に向き、唇を

噛みしめている。彼の中にある後悔が、アイには手に取るように分かった。

「俺がもつと早く言われた通り、悪の所在を探す努力をしていたら親父は死ななかつたのかもしれない。このダリアのいない世界を見

せてやりたかった」

生きていれば、誰しも決断を迫られる時がある。後悔する時もある。悔やみ、眠れない時もあるだろう。しかし、だからこそ人間でよかったと思う瞬間もある。幸せを知っている、それは辛いことを味わっているからこそ得ることが出来る。大事なものは、逃げることでなく、乗り越えようとするものだ。そして隣に愛しい人が立っていてくれたら、きつと力は泉のように沸くのかも知れない。

「そうだね。でも、きつとおじさんは分かっていたんだよ。こうなることも全部。だから幸太に話してくれた。幸太のことは責めていないと思う」

「でも、俺がもし……」

「幸太。もし、あのときって思っても始まらないんだよ。誰が悪くて何がいいなんて、その時には分からない、きつと死ぬまでも分からないかもしれない」

幸太が、はつとした表情でアイを見下ろした。

「あたしだって、昔のこと思い出して後悔することはいっぱいある。あのとき死ななかつたら、幸太に電話しなかつたらって」

そして、幸太にあんなにひどいことを言わなかつたら……。時は戻ってこない。前に進むしかない。少しでも誰かを大切に思えば、きつと幸せは降ってくるだろう。大切な人は、気づかぬうちに側にいて、そつと見守ってくれている。幸太は、泣きそうな顔でアイの手を強く握った。

「そんなこと、俺はよかったんだ。むしろ俺がお前の死ぬ瞬間に何も出来なくて」

「それだよ、幸太」

「え？」

アイが、幸太の手を強く握り返す。表からは、マユの甲高い笑い声が聞こえる。マユは

忘れてしまっているだろうか。幸太がいつも救おうとしてくれていることを……。それな

らそれでいい。今のマユは、今日スタートした。目の前にあることを、しっかりと受け止めて欲しいだけだ。だが、アイは自分の記憶を儚く愛しい物に思えた。

「幸太、それと同じだよ。あたしは、あのときの幸太を責めるつもりなんてない。何もしてくれなかった？ ううん。充分してくれたよ。自分を責めることも、相手のためにもならないんだよ」

それは、ここ数日でアイ自身が学んだことでもあった。後悔すべきことと、自分を責めることは別である。幸太は、アイを見下ろしながら、目元をそっとほころばせた。

「だから、きつとおじさんも笑っているよ。よかったなあって。頑張ったあつて。生きるって言っているよ」

「あい、ここに生まれてくれてありがとう。また会えて嬉しいよ」
「幸太」

二人はどちらからともなく、その場で抱き合った。

「ああ！ お姉ちゃん達のエッチい！」

二人はいつの間にか玄関に現れていたマユの大きな声に驚き、離れてから照れくさそう

に笑い合った。そして手を繋いで外へ出ると、そこには大きな世界が広がっていた。白い

粉は地面に積もっている。

「これから忙しくなるな」

二人は、目の前ではしゃぐしゅんとたけしを見ながら握りしめた手に力を込めた。

【了】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3433o/>

傷ついても、ずっと

2011年4月5日21時01分発行